

新しい家庭科

ウイ

人間と土を生かす



1985

12

遊びの風物詩



地藏さんは、わが国の庶民の信仰で昔からありました。

赤い前だれ姿で、のんびりとねむそうな顔で村の入口にはいると、

「こんにちは、遠くからよくきましたのー」と声をかけられたような気がします。

民話の世界にもよくでてきます。

古事には閻魔大王の分身で、不幸な子供たちを守る仏ともいわれています。

私の東北の田舎には、きんきらきんの赤ん坊のお祝い晴着を厚くきて、顔にはおしろいできれいに化粧したお地藏さんが、各村にたくさんあります。

農閑期の冬になると、雪の中で腰のまがつた、としおいた夫婦が夜なべでつくった手ぬいの前だれをかけてやり、しわだらけの手で、はげ落ちたおしろいをとりぞき、又きれいに、おしろいと紅をつけてやる姿もみえます。

冬の野面を渡る風は子供の泣き声のように鋭い声で吹き去ってゆきます。

子供を守る親もまた、地藏菩薩というべきでしょう。

(田沢 茂)

「自立とは？」——ご返事に代えて 丸岡 秀子

ナイロビ会議へも参加したかったんですが、忙しい夏場の真っ最中だったので、多角経営の農家の主婦からの便りでした。

農作業にとつて、一人の欠落も、すぐ支障を起こす。そのことを知っているので、わたしは、慰めをふくめて返事を書いたのです。どんなに、アジア、アフリカの女性たちと——そのほとんどは農業とかかわっているだけに——話し合いをしたかったでしょうと。

しかし、一面、あなたたちは、差別の意識からは、ほとんど解放されている。営農の基幹的責任を負い、夫と対等の生活運営を実現しなくては、現実には少しも進まないことを経験しているあなたたちは、「自立」は、志向問題でなく、毎日の実践問題になっています。自立の堅い意識を伴わない反差別も、家庭内役割固定化の改革も、それは必然性を欠いているから信用できないと、わたしは、いつか申しましたね。

ということとは、自立が問題だからこそ、反差別も、平等も、性別役割分担問題もあるということなんです。同時にまた、少数の先に立つ人びとが孤立しないように、多勢の女性大衆が、一緒に連れ立って歩きますことが大切だということでもあると思うんです。婦人年首唱者のひとり、ライコーネンさんは言いました。

「女は、土に足をつけて、しっかりと立っている。しかし、いつまでも立っているわけにいかない。みんなで歩き出そうではないか」と。

(評論家)

※※※※※ 人間と土を生かす ※※※※※

〈巻頭言〉「自立とは？」—ご返事に代えて ……………丸岡 秀子 1

※ 特 集 ※

土を生かす教育が人を生かす……………	岩浅 農也	4
「土」を生かし「人」を生かす……………	多辺田政弘	9
1980年代の農業と農家婦人……………	大木れい子	14
「はたけ」とわたし……………	羽生 楨子	19

※ 発 言 ※

学習の主人公たち 土をどう思う

千葉県立薬園台高校の生徒たち……………	54
人間も土も生きることを願って……………	黒部 澄子 58
重い夏——……………	和田廣治、美智子 60
これが人間を生かす道だろうか……………	和気 昭 65

* * *

Weのレポート	外国の女性政治家を迎えたフォーラムで ……………	山口 里子 47
遺 稿	クレバスにかかる橋 ……………	尾藤 操 84



○情報
○波
○ひと
植垣一彦さん
40
82

《西暦二〇〇〇年に向けての全国会議》
《家庭科の男女共修をすすめる会10・19集会》
86

表紙デザイン 加藤由美子
目次イラスト 馬場洋子
本文イラスト 編集部

❀ 新しい家庭科を創るために ❀

- 小学校では “ひとり立ちができ、思いやりの心を持つ”
子どもを願って 一二年生—
……西垣邦子、野澤とみゑ、清水恵子 24
- 中学校では 日々の暮らし方を見直す力…橋本登志子 29
- 高等学校では 忘れられない実践Ⅲ……………森 幸枝 34
- 大学では 家庭科、男女共学の時代を迎えて
……………佐藤 慶子 41

❀ 連 載 ❀

- 遊びの風物詩……………田沢 茂
- 教室の窓 種、その芽ばえ……………植垣 一彦 48
- カウンセリングの応用
—現場から— 「共に生きる」その2……………児玉すみ子 50
- 霞通信 木犀が重く匂う日に……………武田 秀夫 52
- 男の台所 穴子のしんじょ……………高瀬 斉 72
- 政治の目 スパイ防止法の危険性……………宮本なおみ 74
- 土 嫁と姑……………五十嵐愛子 75
- Weのブックランド 教師と教育への懐疑と諦念…長谷川公一 76
- フェミニスト・テレビ考 テレビに登場する老人……………鈴木みどり 77
- おとなって… 真夜中のクソ電話
……文・松本のり子、絵・松本 哉 78
- 思えば思われる物語 自然のふところで……………丸山 光子 79
- フウフウフウふうふ 時代……………ウツのみや 80

○“We” EDITOR'S NOTE 96 ○アンテナ 94 ○十字路 92
○この号をよむために 81

土を生かす教育が人生を生かす



岩 浅 農 也

学習は遊びである

林竹二先生に出会って「子どもは学習したがっている」とを教えられた。それまで、私は「よい」授業をつくらうと努力していたが、この思いを捨てて出直すことにした。それから十数年、授業を続けてきた。最近二、三年は脳性マヒの数人の子どもたちや筋ジストロフィーの数人の子どもたちと、継続的に歴史を学ぶことができ、やっと、林先生のことばが自分のものになってきた。

考えてみると、赤ちゃんは這う、立つ、歩く力を獲得するときに、数百回失敗しても、懲りないでやり直す。そして這う、立つ、歩くことを学習すると、自分の外に何か新しいも

のをもつのではなく、生活の一部を変えるのではなく、自身を変えるのである。まさに、子どもは学習したがっているのである。

学習というと、私たちの社会では、わかること、おぼえることと考えられている。また、「知識なしには学習できない。だからまず知識を与えなければ」と考えられている。たしかに、わかることもおぼえることも学習の一部に違いない。しかし、それが、何かのため、たとえば、よい学校へ入るためであつたら、自分を変えるのではなく、自分の外に何かをつけ加えるだけだから、本当の学習ではない。

幼児あるいは少年の時期には、学習は遊びである。彼らは外からまちがった考えで「勉強」させられていなければ、学

習したがっている。何かのためではなく、学習そのものが目的だから、没頭する。だから遊びなのである。しかし、一般には、遊びは「勉強しないこと、目的なしに何かをする」との意味に用いられている。それは、勉強（勉強強い）を文字通り強制されるので、遊びの本来の姿を見失ってしまった結果である。

子どもは遊びたがっているから、遊ぶ材料がなければ、材料を見つけ出し、作り出して遊ぶ。ちようど学習意欲があれば、知識をもちあわしていなければ、知識を獲得するのと同じである。だから、このごろの傾向に見られるように、無線操縦だとか、ロボットとか、本物そっくりの完成品を次々と与えられると、幼児はびっくりするし、喜びもする。しかしそれでおしまいである。こういう経験をかさねると、だんだん遊ぶことができなくなる。

子どもたちは本物そっくりではなく、本物によってこそ、学習することができる。だから自然が子どもたちにとって不可欠なのである。といっても、遠くまで出かけなければいけないということはない。どんな狭い庭でも、ベランダなどに作った菜園にも、自然は透徹している。春になれば芽が出るし、秋になれば紅葉したり、霜枯れる。どんな小さな雑草も花を咲かせ実を結ぶ、季節に応じて昆虫も活動する。想像力が働けば、どこにも自然を発見できる。これこそ、学習であ

り遊びである。

自然を学ぶことが頭をよくする

自然を学ぶということは、図鑑で正確に名前を調べて教えることではない。まず、子どもたちといっしょに心にとめて自然を見る。そこで、変化に気づく。種子を蒔くと芽が出る。芽が出ないところがあればそこを手で掘ってみる。芽になっているけれど、土があまりに多くかぶせられてなかなか外に出られないことがある。芽が出ると、どんどん伸びる、毎日一本ずつ抜いて、画用紙に貼っていくと、成長が目に見える。

子どもたちは、種子が芽に変わること、どんどん伸びることに共感し、大変喜ぶ。それと同時に、どの植物も種子を蒔くと芽が出る。水をやらないと成長しない。根が出て、芽が出て枝分かれして、葉が出てくるといふふうに法則性を見つけて出すことができる。種子の形がいろいろ違うことをなぜかと考えるとき、風で飛ぶもの、動物や人間にひっかかって遠くへ運ばれるもの、人間が大事に育てるものという区別をして考えるか、あるいは種子は何が目的かと考えるかなどに応じて、合理的に考えると解決の喜びが得られることを経験する。

子どもたちは昆虫も好きである。植物と違って自分で動く

ことがはっきりわかるからである。しかし、そのままにしていると、友達と数の多さとか、珍しい種類をもっているかどうかを競争することで終わってしまつて、学習にはならない。やはり、卵からかえつて、卵を生むまでの各段階を経験させることが、学習を助ける。私は、百匹あまりの青虫を子どもたちが探し、集め、育てた学級の話聞いたことがある。四月から五月のはじめに子どもたちが集めた青虫を全部育てているうちに蛹になった。そして七月はじめの土曜日の朝、ほとんど一斉に蝶になり始めた。二、三時間かかつて、昼すぎには教室じゅう蝶が乱舞した。やがて窓が開かれ、一匹ずつ自然の中に帰つていった。この時の感激を子どもたちは一生忘れないだろう。

同時に、彼らは、百匹あまりの青虫が三十数匹の蝶にしかならなかったことに気づき、教師とともに図書室で調べた結果、蜂の一種が青虫に卵を生みつけていて、その青虫は蜂の子の餌になつてしまったことが分かった。そして、この経験が子どもたちをファールブルの昆虫記に結びつけた。

子どもたちと自家菜園で働くことも、やり方を工夫すれば、すばらしい学習になる。何のために、何をするのかを理解させないで、おとなの命令通りに働かせることを避けなければならぬ。「自分たちで生産したものを自分たちで食べたいね」、「たくさん収穫したいね」などと、共通の目的をは

っきりして、子どもたちとどうしたらいいかを考えて、実験的に、子どもの考え通りにやつてみると、子どもを働きすぎにするだけでなく、頭をよくすることができると。

社会科で農業の学習をする時は、プロの農家の工夫を具体的に資料として出すと、合理的に考えることを学習するだけでなく、農民の知恵に感動する（拙著『村に生きる子どもたち』農山漁村文化協会刊を参照して下さい）。

こうして、本当の学習を経験することができれば、子どもたちの間には「落ちこぼれ」は生じない。しかし、現実の学校では、予習をして教師の期待する答を発表する子ども——他人の間にうまく答えるための知識をポケットにいっぱい持っている子どもが、優等生になる。自分で考えたいので、いつも教師の期待する答えをあてることのできない子どもは落ちこぼされる。しかも、多くの親たちは自分のものさしを持たないで、学校の成績だけで子どもを評価してしまう。

学習がなくて、勉強ばかりが榮えている学校教育の集約は高校入試である。ここでは偏差値が支配する。

農業学習が「落ちこぼれ」を救う

偏差値最低のグループは農業高校にあてられる。「うちが農家だから」農業高校に進む生徒は、「いないわけではない」という程度である。しかし、驚いたことに、農業高校に入學

したからこそ、本当の学習の楽しさがわかり、農業の大切さを感じられ、「人の言ったことなどを気にしていたが、精神的に大きくなった」と言い切れるようになった生徒たちがいる。

それは、ただ土をいじらせ、植物を育て、家畜を育てさせればいいというわけではない。奇蹟を起こした教師のやり方を私たちの参考にするために、簡単に説明してみたい。

入学してきた、やる気のない生徒たちに、ダイズの栽培をやらせる。まず、ダイズの種子の構造を、具体的に、生命の神秘性が考えられるように説明し、実験室で観察させる。たとえば、種子のどこから幼根がでるか予想してマジックでしるしをつけさせ、発芽したら予想した所だったかどうか確認させるとか、ひとりに百粒時かせのうち何粒発芽するか数えさせるなどの問いを出す。種子を蒔く時は、小学校理科の教科書のように、「指の第一関節の深さで蒔きなさい」という指示はしない、生徒の思うように蒔かせる。

つぎに、畑を整備させる場合も、熱心に石を拾い出してやっているのも、遊びまわっているのも、そのままにする。畑に種子を蒔く時も、よい種子だけを選別させることもしないし、覆土の深さも自分の考えにまかせる。アブラムシの防除や除草もやらせるが、やり方は指示しない。

成長の姿を理解し、記録できるように、茎・葉などの各部

分の名前を教える。おぼえるまで何度でも根気よく指導する。土寄せ、間引きもさせる、この頃になると、生徒はダイズのすばらしい生長、その生命力に惹かれて、手にマメが出るほど働くようになる。ダイズが大きくなったように見えるとうれしいので、土寄せをひかえ目にしたり、間引きを延ばす傾向が現れる。それもそのままにする。

ダイズが生長すると、教科書の模式図を使って、枝分れの出方を見させる。すると教科書そっくりということとはほとんどないので、環境によって育ち方が違うことに気がつき、自分のこれまでのやり方が十分でないことを考えるようになる。

その後、花の数、さやの数、粒数、最後に収量を調べさせる。そこで、自分がダイズにどのようにかわって来たかを具体的に知ることができる。さらに、脱粒・調整という仕上りも自分の考え方でやらせ、最後に、その豆で豆腐を作って会食する。

学習についての考え方を変えよう

この一連の授業は、どうしたら生徒たちが学習することができるだろうかという考え方で構成されている。生徒たちは自分のやったことの結果（ここではダイズの収量）を見て、自分の行動の効果を、何度も考えなければならぬ場面に追いこまれる。自分で自分の行動をフィード・バックし始め

る。教科書を必要に迫られて自発的に読む。そこで学習が成立する。しかし、自分のダイズのことが教科書の通りとは限らない。そこで、「先生、どうして違うのだろうか」などと聞く。この時、教師が「こうしろ」とか「こうやればいい」と指示するのではなく、「私ならこうやるけどな、こんなやり方もあるね」という答えをすると、教師と生徒との間のコミュニケーションが起こるし、ひとりひとりの生徒が見えてくる。

生命のあるものを育てる学習と、子どもたちひとりひとりの意志を尊重する学習指導方法が結びつくとき、生徒たちの中に思いもかけない変化が起こる。このことは、彼らの感想からうかがうことができる。

落ちこぼされて、学習意欲も、学習習慣を失っていた生徒が、ダイズの学習を通じて、「家に帰ってから、毎日の計画を立て勉強するようになった」「このダイズ栽培で、ぼくは、どんなにつらい職業についても大丈夫である。その理由としては、ぼくは先生方に実習の時一番おこられて、それなりに人よりも辛抱強くなり、精神的に今までは神経質で人の言ったことなど気にしていたが、ダイズのおかげで今では精神的に大きくなった」と述べている。もう一人は「農業とは複雑なものであり、経験をつめばつむほど、新しい課題がでてきて、奥ゆきの深さを感じます」「農業は答えが一つでないこ

とがあるために、むずかしい」「農業学習は手足だけでなく、頭脳を使いこなす、まさに全体的な頭脳労働であると言っている（詳細については、松本重男『ダイズプロジェクトと生徒の学習』『農業教育 26号』所収、農山漁村文化協会刊を参照されたい）。

戦前の農学校の農業実習や中学校などの「作業科」、最近の「体験学習」の一部では、命令に服従する態度や忍耐力を養うために、また収量を多くするために、教師のこまかい指示の通り作業させている。しかし、この場合は、学習は成立していない——自分とは変わっていないし、教師がひとりひとりの生徒を見ることはできない。

この場合「子どもは怠けるものだ」という考え方に立ち、勉強させるのが教師の仕事と考えている。しかし、赤ちゃんの時から経過をじっくり見直すとき、子どもが怠けたがったり、利益の多い方を選ぶという傾向は、歪んだ育て方によってこそ生じたということは明白である。明治以来このような考え方で教育されて来たことの結果が、現在の荒廃ではないだろうか。学習したがつている子どもにもふさわしい教材を与え、それに応じた学習指導をすることが、現在の教育たて直しの根本である。

（いわさ・あつや 武蔵野女子大学）

「土」を生かし「人」を生かす

多辺田 政弘

はじめに

私は、この九月末に鹿児島県菱刈町で開かれた日本有機農業研究会の集會に、一會員として参加した。参加者は九州在住の有機農業実践農家を中心に消費者も交えて六〇余名であった。そこで、最近、健康食品や自然食品がある種のブームで、スーパーやデパートにさえ「有機農産物」のコーナーが設けられるようになってきたことが話題になった。これは、有機農業運動をそれぞれの地域で地道に実践してきた人々にとって、複雑な気持なのである。「有機農業」という言葉が市民権を得てきたのは一見喜ばしいことのように思えるのだが、何か違うのである。その何か違うという異和感にこだわりたいのである。

一体どこが違うのだろうか。いろいろな意見が出た。「スーパーやデパートに有機農産物のレッテルで並べられているものはホンモノなのだろうか。有機物を肥料に使ったというだけで無農薬ではないのに〈有機農法〉でつくったなんていうレッテルが貼られているものもある」「ホンモノとニセモノの区別がつかなくなっている」「品物がホンモノかどうかわかる技術が消費者が持たなくちゃいけないんじゃないだろうか」「行政が商品テストをして公的機関の保証マークをつけるべきではないだろうか」「いやそんなことを行政がやるはずはないし、やらせるという発想もおかしいんじゃないだろうか」「やはり、生産者と消費者が顔の見える関係のなかでこそホンモノがつくられていくんじゃないだろうか」……。

そのような議論を聞きながら、有機農業とは何だったのだ



ろうかと振り返ってみた。私的な話で恐縮だが、有機農業に私が深く関心を持ち出したのは、前の職場である国民生活センターに入所して、雑誌の編集を担当した一九七〇年代中ごろからである。全国各地の消費者運動や反公害運動を取材して歩いているうちに、最も心をひかれたのが有機農業運動であった。有機農業運動は、反公害運動と深くかわりながらへもう一つの生き方——ややおおげさに言えば、公害をタレ流す石油文明から私たち一人ひとりがどうやれば脱出できるのかという方向性——を、具体的な生き方のレベルで示しているように思えたからである。

調査研究部に配転になって、初めに取り組んだテーマが「有機農業運動」であった。四年間、全国の有機農業生産者と消費者の提携運動の実態や動向を追いかけた。その後も、有機農業運動への関心の延長線上で、自治体や住民運動による生ごみ堆肥化の試みの実態調査、さらに「地域自給研究」へと進んだ。研究関心の変化は、実は有機農業運動の展開とかなりの緊張関係を持っている。

見えてくると変わってくる

ご存じのように、農業による環境汚染や人体被害、あるいは食品汚染といった問題が社会的拡がりをもって注目されるようになったのは、一九七〇年代になってからと言えるだろう。

う。農業生産者側では、土の疲弊や農業被害への関心から「土づくり運動」や「有機農業運動」が発生し、一方、消費者側でも、食べものの安全性に対する不安を強く意識するようになり、「安全な食べものを手に入れる」という運動が各地で発生してきた。そのなかで、消費者と生産者の提携という試みが、七〇年代なかばから各地で多様な形で発生してきた。

ここで重要なことは、この提携関係が生み出した消費者と生産者相互の自己変革のダイナミックスである。消費者は生産者と直接結びつくことによって、土を知り、農業の現実を学び、旬を知り、食べ方を変えていくということが必ず起こってくる。生産者のほうも、消費者から日常生活のなかでの消費者問題を学び、合成洗剤から石けんに変えるとか、化学調味料やプラスチック製品は使わないようにするとか、手づくりを心がけるといった生活のあり方に変化が起こってきているのである。

土を知った消費者側の意識変化のうち、特におもしろいのが「食べものの安全性」に対する考え方の変化である。

生産者と消費者が、単なる商品としての農産物を通してのみではなく、土を媒介として直接結びつくと、「食べものの安全性」の捉え方が、「分析主義」から「関係性と労働共感性の重視」へと変化してくるのである。このことは一体何を意味するのだろうか。

農産物の生産現場から分離され、接点のほとんどない大都市住民の消費者は農産物を工業製品と同じように単なる「商品」とみなし、検定機関や規準をつくり「商品テスト」することが「消費者の権利」であるかのように考える人が多い。また、流通が第三者の手によってなされ複雑化した流通機構のなかで、その「商品」がどこでどのようにして作られたかという情報がわからなくなってしまうというなかでは、安全性の確認は、表示や分析的手段に依らざるをえなくなってしまうのである。

ところが、生産者と消費者の関係が、土を通してより直接的になるに従って、農産物は単なる「商品」という意味より「食べもの」とは生き物である」という意味が強く意識されるようになる。消費者は農業の現場に立ち合うことによって、「工業製品」ならぬ「土地条件や天候や病虫害の発生状況に左右される生物としての農産物」が見えてくるようになる。安全な食べものは、単に農薬や化学肥料や飼料添加剤を使わないというだけではなく、堆きゅう肥の自給や土づくり、飼料の自給や飼い方、労働力の配分の問題まで含めた農業経営全体とのかかわりのなかからできてくるということが見えてくる。そこから、どのような農業とくらしを組み立てていったらよいのか、というように消費者の視野（関係性や労働の共感性）が広がっていく。

一物一価の発想からの脱却

この変化はおもしろいことに農産物の価格についての考え方の変化にもつながっていく。工業製品の場合は原材料費が価格積算の起点として与えられ、それに生産・流通諸計費などを積算していけば、ある程度、価格の説明はついていくように見える（これも本当はあやしいものだが）。しかし、原材料費となる第一次製品の価格となると本当のところつけようがないのである。農産物や水産物、木材などの値段に生産費用算出による価格つけの根拠などあるはずがない。なぜなら、それらを真に生産するのは、人間や機械ではないからである。例えば野菜ができるのは、地力の助けをかりて野菜自身が育つからであり、その育つ時間も人間の都合外のことである。人間は、ただ育つのをほんのすこし手助けするにすぎない。人間がすることは、野菜自らが行った生産の結果を、人間の利用に供するために収穫し、移動するにすぎない。従って野菜そのものの価格などほんとうのところつけようがない。市場の需給関係のなかで価格が決まるというのは、第一次製品の価格はその生産費からはほんとうのところ割り出すことができないから、市場システムというみえざる手に委ねることによって、なんとなく納得しているにすぎない。まして、同じ畑で多品目作りまわしの関係のなかでできる野菜

に、ネギ一把いくら、ピーマン一個いくら、といった一物一価の価格をつけようはずがないのである。土とくらしの循環に自給の基礎を置く農民にとって本来、一物一価の価格など必要なかったのである。一物一価の市場価格が入り込むことによって、市場価格に振りまわされる作付が始まり、多品目作りまわしの循環体系が崩れ、土とくらしの循環が崩れてきたのである。

とすれば、市場を媒介にせず直接提携という形で結びつく関係のなかでは、市場の一物一価の考え方に對する疑問は当然起こってくる。一物一価ではなく、多品目ワンパックのセツト供給や、市場価格に左右されない通年価格、あるいは価格をつけずに会費やお礼制などで農家の所得保障をするという考え方。それぞれの条件によって、いろいろなふくらみを持った工夫がされるようになってきた。たぶん、どれが一番いいなんて理屈はないのだ。お互いになんとか納得できるところに自然に落ちつくからである。ただし、土を知った人たちは市場価格に左右される一物一価の考え方にとどまることはできないだけである。

定常系の世界

居ながらにしてお金を出せば欲しいものが手に入るようになること、つまり勞せずして欲望を満たせるようになること

が進歩だという〈物質主義〉に陥ったのはいつからだろうか。藤田省三氏は『精神的考察——いくつかの断面に即して』（平凡社、一九八四年）のなかで次のように述べている。

「制度化的な全社会的貫徹はとりも直さず一義性の支配である。私たちは直接的な生活資料の豊かさを得ることとの交換に一物一価と一問一答と偏差値的一列縦隊の圧力の中で今兩義的ふくらみを完全に失わされているのである。だからこそ「戦後体験」を見る時、悲惨は唯の悲惨だけとしか感じられないのである。相互性の塊としての経験の喪失はそのような形で現われている」

高度経済成長期以降を支配した一物一価、一問一答の価値観は、まさに経済学（狭義のと言うべきだろうが）の価値観ではないだろうかと、最近しみじみ思う。この経済主義は一系列縦隊であるがゆえに、進歩の概念で簡単に律してしまう。進んでいるか遅れているか、豊かであるか貧しいかを数量化できるかと思ひ込んでいる。限らない「開発」が目標になる。

しかし、土に接し、自然に接していくと、その世界は目をみはるばかりの複雑さや多様性をもっていることに驚く。さらにその生態系の仕組みを生かして生きてきた多様な地域の生活の組み立て方や生きる知恵の豊かさが見えるようになるから不思議である。そこに見える世界は決して進歩に向かつての一物一価、一系列縦隊の世界ではない。むしろ、物質的に

は自給自足的に循環する永続性と共存性をもつ「定常系」の世界であるが、多様にそれぞれの花を開かせることのできる質（文化）の個性を持った時空間である。

帰農への流れ

有機農業運動のなかで、土に接する楽しさを知った都市の消費者が、プランター栽培から、家庭菜園・市民菜園などによる自家菜園、さらには、通い農業や共同自給農場づくり、さらには帰農あるいは着農という、農へ向う多様な流れが生まれていることは注目すべきことである。それは、単に「安全な食べものを手に入れる」という出発点をはるかに越えて、一物一価の物質主義からの自己解放の心を読みとることができる。

私自身、有機農業運動を追いかけているうち、その魅力に取りつかれて農業の楽しさを実践するようになった一人である。初めは有機農法米の提携を通して、田の草とりの援農などに行っていたのだが、自分の食べるものぐらい自分で作りたいという強い欲求にかられて、四年前から栃木県へわが家の自給米をつくるための通い農業を始めた。同じ「安全な食べ物」でも人に作ってもらって食べるのと、自分で作って食べるのでは、全然違うのである。ヒマと金があるから出来るのではない。同じ時間と金を何に使うのかの問題である

のだ。あるいは、生き方をどう変えていくのか、という問題といえるかも知れない。いや、そんなに力んでいう必要はないのかも知れない。大地に接し植物を育て、その結果、ホンモノのおいしさを味わえる、この楽しさは、一度知ったらやめられない、ということなのだ。ただし、この楽しさは、自分の食べる分、そして、あげたい人にお裾分けする分ぐらいを作る範囲ぐらいまでに適用することなのかも知れない。だから、国民皆農論に私は大いに賛成なのだが、自分が楽しいと感じるなら他人も同じに感じるはずだと思うほどファシストではないから、そのことは、私の場合は、にとどめる。

この四月から、ひよんなことで沖縄の大学に勤めることになった。沖縄でも、米の自給をしたいと田の借りられるところをさがしたのだが、沖縄本島の水田はほぼ消滅し米軍基地とサトウキビ畑に変わっていたのである。やっと縁があつて北部で有機農業をやっているグループの農場の一面（畑）を借りられるようになった。米の自給は当分あきらめざるをえないが、雑穀・豆類・芋類・果樹の自給を目指して、喜々として農場に通い始めた。農場は、夏休みには学生のゼミの移動教室となり、有機農業でつながった人々の交流の場にもなっている。食糧自給率の極端に低い沖縄で近代主義者に何と言われようと自給という課題に取り組もうと思っている。

（たべた・まさひろ 沖縄国際大学）

● 人間と土を生かす ●

一九八〇年代の農業と農家婦人

大木 れい子



● 戦前そしていま、農家婦人は

戦前期の農業と農家の暮らしは、半封建的な地主・小作関係のもとに営まれ、多くの農民は高率な現物小作料のために、貧苦の生活を余儀なくされました。その上婦人は、家長制的家制度の下に、嫁として妻として二重三重に忍従の生活を強いられました。それはまさにNHKドラマの「おしん」の世界でありました。それ故、農地改革、婦人「解放」などの戦後改革が婦人にとっていかに大きな意義があったかはいうまでもありません。

しかし、戦後四十年経ち、時代は大きく変わり、農業、農村も激しく変貌しました。農地改革で自作農民となり、希望に満ちた生活が出来ると思ったのは束の間、対米従属の下に展開された農業近代化の諸施策は、農民を農外労働へと駆り

立て、「三ちゃん農業」、「主婦農業」という事態を惹き起こしました。今日、農業の主要な担い手となった婦人は、農家経済はじめ、後継ぎ問題や高齢化問題に苦悩を深め、将来の経営と生活は不安に満ちたものとなっています。他方、こうした厳しい状況の下で、主体的に明日を切り拓こうとする意欲的婦人が育って来ていることも事実です。以下、これら農家婦人の抱える問題と今後の展望についてみていくことにします。

● 外国農産物の輸入による農業の後退

一九八〇年代も半ばを過ぎようとしています。過ぐる前半期を振り返ってみますと、我が国の農業は実に厳しい「外庄」と「内庄」の下に圧迫され、後退を迫られて来ました。「外庄」とはいうまでもなく、農産物市場解放への圧力です。

近年の「日米経済摩擦」の解決を理由に、外国農産物の輸入は著しく増大しました。小麦や大豆の国内生産がすでに壊滅状態にあることは周知の通りですが、穀物全体の自給率も約三〇％に低下しました。また牛肉とオレレンジに象徴される畜産物や果樹、そして野菜に至るまで、輸入量は増加の一端を辿っています。たとえば柑きつ類は、一九七〇年を基準としますと、一九八一年には生果で五・八倍に、ジュースは九・八倍にふえています。野菜類は、塩蔵品（つけもの）や冷凍品の形で、枝豆やいんげん、さや、アスパラガス、ほうれんそう等々、多品目にわたっています。さらに伝統的食品の一つである梅干しは、国内流通の五八％、しょうが漬は四三％を外国産に依存しています。こうして鮮度と味を失った野菜などが私たちの食卓に登場するようになっていくのです。

農（水）産物輸入先の主位にたつのはアメリカで、我が国輸入額の三五・二％（一九八三年）を占め、二位のカナダ（七・四％）を大きく引き離しています。

国産でまかなえるはずの農産物をどうしてこれほど輸入しなければならぬのでしょうか。貿易摩擦のためでしょうか。基本的には否です。その理由は、日米安全保障条約第二条のいわゆる経済条項によって、アメリカに対する経済協力が義務づけられていることにあります。去る九月に、アメリカの国会が日本の市場解放要求決議を平然と行ったことは、

そうした日米関係が根底にあるからではないでしょうか。

価格の安い外国農産物の輸入増大は、日本の農業を圧迫し後退させ、農家の経営を危機に追いやる最大の原因です。同時に、一国の独立を守る上でも、他国に国民食糧を依存することの危険性は歴史が証明していることを指摘しておきましょう。

● 深まる経営と暮らしの危機

一方、国内では主食である米の減反政策が一九七一年以来強行されています。一九七九年から四年間も米の不作が続きましたが、生産調整という名の減反は継続されました。その結果、逆に米不足が現実となり、韓国米の輸入という事態を惹起し、農民の激しい怒りを呼んだことは記憶に新しい所です。我が国の農業が、米の国内自給を史上初めて達成したのは一九六七年のことで、以来まだ二十年と経っていません。国民食糧の安定的供給を確保するためには、より十分な生産と備蓄を含む自給体制が課題となっています。

米のほか牛乳や豚肉、たまごなどの畜産物およびみかんやタバコ等、主要農産物も生産調整が行われています。加えて打ち続く米価の据え置きをはじめとする低農畜産物価格は、農業所得を低下させ、借金農家が増大するなど、農家の経営と生活を極度に圧迫しています。農業所得で家計費を充足す

る割合は二〇％にまで低下し、他は農外収入に依存せざるを得なく、農家の兼業化、多就業化がいつそう深まっています。

しかしながら、政府の八〇年代農業政策は、こうした状況を強め、農地の流動化を進めて中核農家を育成し、これらを中心に「高生産性農業」を推進しようとするものです。こうした農業の縮小による再編政策は広汎な兼業農家や農業を担う婦人たちの生活の安定と向上と真向から対立するものであることは明らかです。そこで次に農家婦人の抱える問題等についてみてみましょう。

● 婦人は農業の主要な担い手

農業基本法が発足した一九六〇年当時、我が国農家の構成は、専業農家、第一種兼業農家および第二種兼業農家が、三・四・三の割合でした。しかし、一九八三年には、一・二・七へと第二種兼業農家が圧倒的部分を占めるほどに激変しました。婦人は農業就業者の六割強を、また基幹的農業従事者の過半数を占め、農業の主要な担い手となって来たのです。

本来の「農夫症」は「農婦症」と書き変えられるかといわれる程に、心身の苦勞を背負いながら、一方では学習を進めて農業の知識や技術の修得につとめ、営農とくらしを支えて来ました。田植機やコンバインなどの機械を操作する婦人がふえ、また、作付計画や施肥設計を立て、農薬を注文し、水管

理や家畜管理を行うなど、労働はもちろん、経営管理にも主体的に参加するようになりました。こうして婦人の役割がますます大きくなる中で、さまざまな問題も発生し、解決が迫られて来ています。その主要な一つに健康の問題があります。

まず農業の機械化・化学化の進展により、省力化は顕著に進みましたが、さまざまな労働災害が発生していることを指摘しなければなりません。一昨年、除草剤として広く使用されているパラコート剤の被害で、宮城県の主婦が死亡しました。そのため、宮城県民医連による調査の結果、パラコート剤を使用する婦人の肺機能低下の事実が明らかになりました。「低毒性」農薬の多回数使用による災害は、その他の作物の場合にも様々の被害を惹き起こしています。

また、労働と生活における精神的負担や欲求不満から生じる「イライラ」病や肥満症、さらには子どもの心身症が指摘されるなど、婦人と家族の健康問題が深刻になっています。農協生活活動の中で最も取り組み率の高いのが健康問題であることは、こうした実情を背景としているといえます。

機械による労働災害は、発生数は男性に比して少ないものの、「女性の方が後遺症を訴えたり、休業日数が多い」という指摘は重視する必要があります。労災問題に対する国の補償制度は、災害の範囲も補償対象も極めて限定されており、大部分の婦人や老人は除外されているのが実情です。それ故

労災制度の改善は婦人にとっても切実な問題です。

●生活構造の変化と農家らしさの追求

生産と消費、労働と生活が不可分な農家では、婦人は生活の主体としての役割も果たさざるを得ません。農業経営の悪化によるくらしのやりくりをはじめ、生活の近代化、都市化による家族関係や生活構造の変化は、主婦の悩みを一層深めています。その一端を家計費の支出からみてみましょう。

最近五年間の変化をみますと、支出の伸びが最も大きいのは光熱・水道費です。これは一度導入したら後もどりが困難で、社会生活を営む上でいわば「強制的」費用ともいえます。これら公共料金の増大は、家計費硬直化の大きな要因です。次に支出の著しいのは交通・通信費です。一戸二〜三台の車時代を迎えている農家の自動車費の比重は大きく、飲食費に次いで第二位であり、家計費の一四・二％を占めています。

第三の特徴は、飲食費の中の調理食品と外食費の急増であり、食生活が大きく変容していることを物語っています。この傾向は、他方で飲食費における自家生産物割合の低下となつて現れており、一九八三年には全国平均で二〇％を割るに至りました。もちろんこれには大きな地域差があります。

こうした生活構造の変化の中で、農家生活の見直し、農家らしい生活を求める動きが各地で生まれていることも事実で

す。たとえば、高齢の家族労働力を活かした「にわとり十羽運動」や婦人労働力を中心とした「五十万円自給運動」などなどほとんど全県にわたつて多彩に展開されています。

ともあれ、生産に直結したこのような運動は、生活を守り、豊かにし、かつ健康を守る上で、農家らしい生活の原点といえましょう。宮城県の一主婦は、「自分で生産し、家族の好みに合わせて調理し、加工した食品こそ最もぜいたくな暮らしであり、農家ならではの豊かさである」と明言しています。

さらにこうした農産物自給運動は、安全かつ味のよい食品を求める消費者と手を結んだ産直運動へと発展している例も少なくなく、地域の食生活と農業発展の方向を示唆しているといえます。

●家庭生活における婦人の地位

少し前になりますが、全国農業会議所が行った調査（一九七七年）によりますと、生活の主役である婦人が、何らかの形で「自由に使えるお金」を持っているのは九〇％に達しており、また一九八四年農水省が行った調査によりますと、婦人名義の貯金通帳を持っているのは約六七％ありました。労働と経営の主体としての一定の発展が、生活における婦人の経済的地位にも反映しているとみることが出来ましょう。し

かし同時に、二九歳以下の婦人の場合は、夫または親から小づかいをもらうのが約六〇％強も占めており、依然嫁の地位の低位性を示しています。さらに家庭生活での仕事の分担状況を男女平等の観点からみますと、性別による固定的な役割分担意識がなお強固に存在しており、婦人の心身の負担を余計重くしている要因となっています。

にもかかわらず、生きがいを求める婦人たちは、日々根気強くペンを持ち、文化を創造する諸能力を発展させていることも見逃せません。農協生活活動にみられる各種スポーツ、手芸、踊り等の文化活動の確実な発展はその証拠といえます。

● 農家婦人の社会的地位と展望

さて、最後に、農村社会で婦人たちはどのような地位を得ているのかをみておきましょう。それには、差し当たり、農業協同組合（以下農協と略す）における婦人の位置をみるのが適当です。農村・農家にとって、生産、流通、そして生活にと多面的機能で密接な関係にある農協は不可欠な存在となっているからです。農協正組合員に占める婦人の割合をみますと九・五％と極めて低位となっています。現実の労働と生活における婦人の役割の大きさにもかかわらず、このような婦人の社会的地位の劣位性は、なお農村に男女差別の社会的通念が強く作用していること、また経済的基盤として、大抵

の婦人が農地所有から排除されていることなどがあげられます。特に高齢化社会を迎え、老後の生活を保障すべき年金問題は、切実な問題となっています。参政権や均分相続など、近代市民社会原理に基づく諸制度が存在しているとはいえ、農村社会で、とくに婦人にそれらがまだまだ十分貫徹していないのが、一九八〇年代半ばの今日の状態なのです。

以上、農村婦人が抱える諸矛盾、解決すべき課題は山積していますが、これらについて、考え、発言し、連帯し合う婦人組織も育ちつつあることに注目したいと思います。その代表的例は、日本農業新聞「女の階段」コラムへの投稿をきっかけに、ペンで結ばれた「回覧ノート」グループの存在です。すでに全国的交流集会在回を重ねるほどに組織的にも発展しています。こうした草の根からの諸組織をはじめ、生活改善グループや農協婦人部などの諸活動もまた重要な農村の活力源となっており、これらのいっそうの活躍が期待されます。婦人のいっそうの地位向上のために、具体的課題を明示し、取り組みを強化することがいま求められていることは、いくら強調しても強調しすぎることはないでしょう。婦人の地位向上がさらに農業の自立的発展を支える大きな要素であることは、戦後四十年の歩みが示しているからです。

（おおき・れいこ 東北大学農学研究科）

「はたけ」とわたし

羽 生 楨 子



わたしは横浜に住んで小さいはたけをつくっている。なぜ都市に住んではたけをつくるのかを人によくきかれるし、自分でも考える。いちばん大きい理由は楽しいからだ。育つものを見るのが楽しい。土をしみじみと見るのが楽しい。もうひとつ、わたしは八歳ごろからおとなになるまでをいなかで暮らした。それが影響している。家の屋敷うちに、あるいは家につづいてはたけがあるのがふつうであり、そこで四季おりおりの野菜をつくって家族の食べ分はうちでつくるのがあるたりまあだった。花と緑いっぱいの中。わたしはおとなになるまでを花と緑に埋まって育った。学校の帰りは文字通り道草をして夢中で花を摘んだ。濃い紫のすみれの花束。野も山も小川も川岸もみんな好きだった。人がだれでもそうなのか

どうか、わたしにはわからない。その前、もの心ついてから七歳までは大阪で育っている。そのころのビルと舗道とチンチン電車とデパートを記憶している。昭和十年前後の大阪。学校へあがって最初、電車通りを一人でわたるのが心細かった。片側にえんえんと高い煉瓦塀がつづく通学路。

わたしにとっては、暮らしていくのに、そばにはたけがあった、そこでものが育ったり枯れたり、実るものを食べたたりできる方が落ちつく。自分で種をまく。野菜は勝手に育ったり、手入れをするともっとよく育ったりする。自分で育てたものを自分で食べるというのはとても直接的な行為だ。生きることそのままつながる。つくる過程が見えているという大きな安心感がある。

今年の夏は暑い日がつづいた。そして八月の終わりから九月のはじめにかけて 台風とその暑さのところ、潮風でか光化学スモッグでか、野菜はともいたんだ。それでも秋口からはたけは実るものがいつせいに実った。秋とはものが実る季節だ。山だろうと里だろうと実っているんだと思うと胸がやわらかい気がする。はたけでなすの実がぶらさがる。れいしの実は細いつるでぶらさがる。かぼちやはごろごろしているのだけど、ラズベリーの木にはいあがつたのはラズベリーの枝かげでぶらぶらする。ピーマンは九月はじめのところでのいたみが大きかったけど、それでもしこしこぶらぶらする。ブラックベリーは房なりでぶらぶらする。丹波ほおずきもはたけのわきでぶらぶらする。プチとまとは鈴なりだ。ほんの四十坪ほどのはたけに、これだけの実がぶらぶらゆれている。大地の上でゆれるものに囲まれて立つ。それがみんな食べられるものだ。顔がにこにこしてしまう。秋の日ざしは時に強く、昼間からはたけのどこかでくさびばりが鳴いて、かねたたきが鳴いて、はたけにふみ出すとおんぶばったがびよんびよんして、今年生まれたいとかけがさつと走る。もんしろ蝶が来、あげはが来、きあげはが来、くるあげはが来、しおからとんぼが来、むぎわらとんぼが来、あきあかねが来る。しじみ蝶もせせり蝶も来る。そういうえは今年はるりあげはをととう一度も見かけないで終わった。毎年一度か

二度きつと来る。高い空からひらひらと舞って来て、またはねをいっしょうけんめい振って高い空へかけあがつてしまふ。水色のはねがなんとも美しい。るりあげはは滅つたのだろうか。るりあげはの幼虫の食草は何だろう。鳥も来る。このあいだの朝はかわらひわではたけがいっぱいになって、羽の下の美しい黄緑色をみんなで見せて色をこぼしそうにして飛んでいった。一度きせきれいが来たことがある。長いしっぽの羽をツン、ツンあげさげして、はたけの土で羽が汚れはしないかと思うほど美しい黄色だった。うねの高みにすつと立った。

いい話ばかりではない。ときどき野菜の育ちが悪い。たとえばほうれんそうなどは育ちにくなっている。わたしのようなしろうとだけでなく近所の農家の人もそう言う。わたしは光化学スモッグか酸性雨かを疑っている。だからはたけの記録をつけるときは空気の状態についてときどき書きとめておく。すると人は「光化学スモッグなんていうのがまだあるのですか」という。これは地方の人だ。地方の人でなくても近所の人「また奥さんが空気の話して」とわたしの肩ポンとたたいたりする。「狼だあ」と叫んで三べんめにはだれにも信じてもらえなかったおはなしの中の少年みたいだ。人は都市の空気に危機感を持っていないのだろうか。都市だから少々の空気の悪さは仕方がない、という寛大さが人々の意識

の奥にある。いや、人はそんなことあげつらっているひまがなくて泣いたり笑ったりしているうちに年老いていくのだからうか。そういう人々のあいだにまじっていながら、「きょうの空気は白っぽいスモッグ」「きょうの空気は青っぽいスモッグ」「午前ツンとする空気」「よどんで目と鼻を刺す空気」なんていちいち書くのは、暮らしの中での違和感になる。わたしだって恥ずかしい。でもわたしは、川崎、横浜という都市に二十年以上住んで来たにんげんだ。そこで子育てをした。子どもが光化学被害をこうむったことがある。そんな空気の中で子どもを育てて良いとは思わない。最も代表的な光化学被害は、一九七〇年七月、東京杉並で運動中の生徒がバタバタ倒れてなかには意識を失う重症者が出た事件だ。被害を受けるのは中学か高校の、それも女生徒が多い。一九八一年七月、東京町田市の中学や横浜生麦中学の女生徒がのどの痛みやはきけ、けいれんなどをおこして病院に運ばれたときは、わたしの記録でも「17日、スモッグのどを刺す空気、いんげんいたむ」「18日、のどや目を刺す空気この夏いちばんひどい。頭痛とはきけ」となっている。ここでも被害を強く受けたのは中学の女生徒だ。最も敏感な人たちだ。その人たちが危険を知らせるカナリヤにしてはならない。その人たちが健康に育たなくては人の社会はしあわせではないだろう。その人たちがあたりまえのそこらの空気を吸ってバタバタ倒

れることにおとなは驚かなくてはいけない。そして対策を考えなくてははいけない。わたしはここ数年空気がまた悪くなつて来たと感じている。証拠はない。わたしの感じだ。わたしはわたしの感覚をたよりにしてものを言っている。ここにひとつの数字がある。

シン 報 日 数	オ 注 意 日 数	光 化 学 令 延 べ 日 数
328	288	1973年
74	266	75
76	150	77
78	169	79
80	84	81
82	86	83
84	59	85
131	73	
135	157	

環境庁調べ
発令延べ日数は都道府県を1つの発令単位として集計した。85年の数字は8月末現在のもの。

(朝日新聞85.9.29)

わたしの気のせいだけではないのだ。

わたしは野菜を見る。光化学スモッグが酸性雨かに弱い野菜がある。徐々にはあるが酸性雨の影響が大きくなりつつあるように思う。以下わたしの観察。本葉の出はじめ時点で雨が降ると、野菜は黄ばんでいつせいにだめになることがある。本来、雨が降ればぐんと育つところなのだが。根がしっかりと張った野菜は少々空気が悪くても大丈夫。花の咲く前の時点でやられるともうその野菜はだめ、花芽・若葉のところがよくしゃくしゃと萎縮する感じでもう実にならない。いんげんなど、実になりはじめのところでもやられると実が変形する。生殖に影響を与えていると思うことがある。

これらは証拠はない。でもわたしは野菜を見つづけてい

る。五年も六年も七年も八年も見つづけている。野菜が育たないのはどういうことか。わたしはそのことについて遠慮がちにだけ言う。野菜が育ちにくいような空気の中で人が暮らしていいはずがない。

はたけは四季を鮮やかに映し出す。初霜のおりるのはうちの庭よりはたけの方が早い。はたけは敏感なのだ。敏感さのおおかたは土にあるようにわたしは思う。はたけを朝夕眺めて暮らす。野菜はときどき輝くばかりに美しく育つ。その野菜へのほめ言葉をいっぱい胸に持ってわたしは暮らしたい。

85年9月のはたけ

1日

新聞から 労働省発表の婦人労働白書、「六十年版婦人労働の実状」によると、企業などで働く女子雇用労働者が昨年千五百万人突破、初めて家事専業者を上回った。賃金は男子の五二%、男女の賃金格差は五三年以降むしろ拡大している。

台風十四号十三号十二号と一昨日から今日にかけて日本を通る 一日中強風快晴 ごま倒れる プチとまと毎日とれる 夕方それは美しい夕焼け

2日 暑い今年最高東京三五度 台風十六号発生 なすピーマンおくらに肥料 チヒリ白菜芽が出る

3日

新聞から マンズワインさらに一銘柄有毒不凍液検出。イタリア産アイスクリーム香料にも有毒物質。

5日

聖護院大根種まき ラズベリー枯れ枝切り新枝に支え残暑きびしい にんじん芽出る れいし知らない間に一つ赤くはぜる 草とり 庭木の枝切る

9日

玉ねぎ聖護院大根芽出揃う なす最盛期 大根種まきのおう大根の種まいたところねこがひどく荒らす 種まき直し網はる 草に埋もれて消えなかったねぎ移植しそ花になる

11日

きのう網はった所めちやめちやにねこ荒らす 網はり直す 雨になる 雨といっしょに空気少し悪臭

12日

新聞から 神奈川県環境部五九年度県内大気汚染状況発表。窒素酸化物(NO_x)の汚染が川崎、横浜両市で悪化、全七五測定局中四五・三%の所で二酸化窒素環境基準超える。◇有毒ジエチレングリコール入りワイン問題で、マンズワイン社は検査直前タンクの中味をすりかえシロ判定を受けたことが判明

16日

大根芽が出る カリフラワーブロッコリーの苗人にもらって植える キャベツも移植 なすすごいいきおい聖護院大根まびき土よせ肥料 ねぎにも肥料

17日

大根まびき土よせ にんじん玉ねぎに肥料 草とり

18日

いんげん若芽と花のつくところがかくしゃくしゃして本来白い花のはずがしなびたクリーム色 花にはなつても実にならない 九月はじめの台風と暑さのときに光化学スモッグでか潮風でかやられたのではないかと思う 考えてみればプチとまともいんだ ピーマンも半分ぐらいいは葉の色がまだらでくしゃくしゃして実にならない 葉っぱも葉のふちが巻いて育ちが悪い

19日

ごま刈りとる ごまに角のあるあおむし何匹もいる れいし終わり抜く プチとまととれている 草とり 午前かわらひわいっぱいくる 午後むし暑く濃いスモッグ おんぶばった今年は多い

25日

つづいていた冷たい雨小止みになる 秋なす実いっぱい ピーマン少しずつ実 いんげんやとと細々と実雨やみ日がさす 庭のあちこちにきのこ生える うすい笠と細い足のきのここと ふくらん中がぬめりいくちに似たきのこさんしよの枝に直径十センチほどのあしなが蜂の巣 とる 畑耕す 夜秋の虫さかん

26日

27日

新聞から ロンドンで開かれた海洋投棄規制条約締約国会議は二六日、放射性廃棄物の海洋投棄停止を事実上無期限延長する提案を可決、日本を含む先進

諸国は海中への核廃棄物処理の道を当面封じられる

29日

庭木の枝切る リラ花ざくろネクタリンにわうめゆすらうめ すだちの実少ないけどできた サラダ菜サニールタスこまつ菜菜の花種まく 雨もよい

ハブ草実熟す 丹波はおずきも赤いさんしよ実はぜらつきよう葉を出す プチとまと終わりに近づくとにら花から実へ 少しずつ刈っては若葉を食べている みようがは終わった 大きいスコップの柄であげはさなぎになる 来年の春までそのスコップは使えない ひさしぶり晴れる 空を豆粒のような鳥とぶ 地にはくさひばり 花菜種こまつ菜芽出るさんしよの実きじばとが食べにくる 庭のすずらん一個オレンジ色の実をつけている すずらんの実を見たのははじめて

(はぶ・まきこ 詩人)

30日

新しい家庭科を創るために◆◆小学校では

“ひとり立ちが
き
思いやりの心を持
つ”
子どもを願って

— 二年生 —

西垣 邦子
野澤 とみゑ
清水 恵子

一、はじめに

本年機会を得て「家庭科学習における老人問題のとりえ方と指導法の研究」をすることになった。その研究の一端として、老人を子どもたちがどのようにとらえているのかを調査した。その結果の一例を二年生を取り上げて紹介してみる。

「目が少し弱くなったおばあさんの洗った茶碗が汚れていました。どうしますか」の質問に、核家族の四五パーセントの子は「怒る」、五五パーセントの子は「洗わなくてよいと言う」と答えている。

「家の中であぶなっかしく歩いている年寄り」を、同居家庭の二五パーセントの子は「嫌味を言う」、四〇パーセントは「無視する」と答え、このような年寄りの立場に対して、「怠け者で役に立たない」と考える三五パーセント、「相手にしない」と考えるが六五パーセントであった。

これ等の質問に対する回答には「かわいそうな気がする」とか、「声をかける」といった選択肢があるにもかかわらず、こうした回答を選んでいるのである。

教育界の今日的課題としての「いじめ」の根底は、人の心の痛みもわからない子どもたちが育ちつつあることから始まっていることは特筆するまでもないが、このいじめと同じ心情を老人問題のこの調査の中にも見る思いがする。

さまざまな活動体験を通してはぐくまれていく自立心と、人とかかわり合いの中ではぐくまれていく共に生きる優しさ、家庭や社会の大きな変化によって、幼児期の成長過程の中で育ちにくくなりつつある今日である。

しかし社会の一員として生きていくためには、ひとり立ちしながらなお、人とかかわりを求め、お互いの幸せを願いながら生きていく人間性を身につけていなくてはならない。

二年生ではまだ自己中心的なものとらえ方を多く残している年頃でもある。従って老人問題に対する回答のように、自分と立場を異にする人々の気持を理解することはむづかし

いのかもしれない。しかし、この期だからこそ必要と考える。

そのためには二年生としてどんな力をつけたらよいのであるか。重要なポイントは何かについて考えてみたい。

一年生の家庭科の内容を基盤にした学級指導で身近なところからひとり立ちを始めた子どもたちは、その技能を使える楽しさから、家族や友人に使う場を広げ役立てていこうとする気持が芽生えている。第一には、この芽生えを更に大きく育てたい。

また、純真で素直なこの期の子どもたちは、場の中に自己をひたらせ、感動体験が強く持てる年齢である。楽しいことや良いと言われたことは素直に自分の生活に取り入れたり、再現を試みたりし労力を惜しまない。この特徴を生かして、身近な人々とうまくかわり合いが求められるような場づくりのできる様々な体験を、第二に味わわせたい。ひとり立ちしながら、人々と共に生きる喜びを数多く体験することが、やがて中学年の「仲間の中で生きていく時代」に向けての大きな基礎づくりになると考える。

では、こうした力を身につける場を、現在の学校教育のどこに見出したらよいのであろうか。

(一)ひとり立ちができる力をつける

前学年同様、学級指導の中で更に力、の、定、着、を、図、る、。そのた

めの二年生における指導内容については十月号で指導一覧表を十一月号で実践の一例を、一年生を通して紹介済みなので省かせていただくことにする。

(二)人との正しいかわり合いのしかたに気を使う力をつける
身近な人々に自分の意志でかわっていき、思いやりの心をはぐくめる実践的・体験的な場は、家庭科学習のない低学年ではどのように設定したらよいかが問題になる。

そこで本校では、ゆとりと充実の時間の中に位置づけることにした。「岩野田っ子」と称し低学年では十時間をあてている。

活動内容は、楽しくて、興味を持って取り組み実践化されやすい素材で、人間関係の結び方（応接・接待・団欒等）が個々の家庭に密着しやすく、問題解決的内容であることを考慮することとした。

二、岩野田っ子実践例

(一)お客様ごっこ

(1)児童の様子

二年生になって、少しずつ外に目を向け始めた子どもたちは、自転車に乗って遠く離れた友達の家にも遊びに出かけるようになってきた。

ところが友達の家を訪問の仕方について家庭で教えられて

いる子が少なくなり、訪問先の家庭に迷惑をかけていても気づかないでいることが多い。そこで二年生なりの訪問の仕方を指導することにした。

(2)ねらい

よその家庭を訪問した折の態度を身につける

(3)学習の主な流れ

⑦事前指導

お友達の家を訪問した折や、された時に「考えた方がよいな」と思う様子を思い出しておく

⑧本時の学習——くらしの部屋にて学習——

T お友達のおうちへ遊びに出かけた時の様子をやってみよう。気がついたことは後で発表してね。先生が訪問先のおばさんになります（いすにかけて編み物の真似）

C 可奈ちゃん遊びましょ（挨拶しないで靴を脱ぎ捨て、部屋へ）

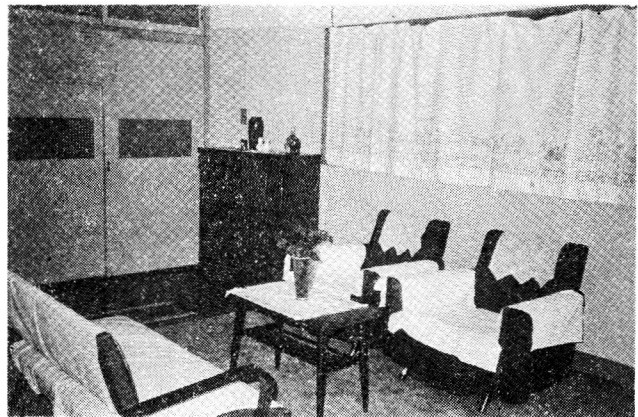
C 遊び（部屋へ行く途中食器棚・冷蔵庫の戸を開けのぞく）
C （部屋へ入る途中）きょうはどんなおやつ出してくれるかな

C つまらん。かくれんぼしよ（洋服ダンスの中に隠れる）

T ……………。気をつけるとよかったと思うことは？

C 黙って部屋に入ったりしないで、おばさんに挨拶する

C 靴をそろえて上がる



くらしの部屋・応接コーナー

はきれいにしてから帰る

C おばさんがよい気持で遊ばせてくださるよう考える

T ではどんなふうにしたらいいか。今までの話し合いから考えて、もう一度やってみましょう

——訪問ごっこ——

C 戸棚を開け

たり、あちこちの部屋をのぞいたりしない

C おやつを請求はしない。

でたら「ありがとう」と言
って静かに食
べる。おやつ
の取り合いや
投げあいをし
ない

C ドンチャン

騒ぎしない

C 使った部屋

T よその家で遊ばせてもらう時は迷惑をかけないように、
そして感謝の心を忘れないことだね

㊦事後指導

学習後、友達の家をたずねた時、様子を時々話題にのせ、
話し合わせる。

㊧学習後の子どもの様子

喜々として友達の家を訪問の様子を演じた子どもたちは、
何気なくした自分の行為に芳しくない評価を聞いて驚いたよ
うであった。それ以後気を使っている様子である。

T 君の家に行った折、おばさんが額にサロンパスをはって
いるのを見て、頭が痛いようだから遊ばず帰ったという子。
遊びにきた子が大声で気持ちのよい挨拶をする、家の中で暴
れていたのに、素直に注意を聞いたという親たち。人とか
かわり合う時には相手のことを考えて言動に気を使うことが
たいせつだとお客様ごっこを通して身につけはじめたよう
だ。

㊨おやつづくり

(1) 児童の様子

買ったおやつを与えられて育ってきた子どもたちは、おや
つがほしい時、二年生なりに自分の手を下してその欲求を満
たそうという行動にでない。

自分で作って食べる楽しさ、作った物をだれかと一緒に食

べる楽しさを体験させることで、ひとり立ちの力や人と共に
生きていこうとする力を培いたいと考え、この活動を取り上
げることにした。

(2) ねらい

簡単なおやつを作り、そのおやつを使って会食ごっこを
し、家庭で実践しようとする態度を育てる。

(3) 学習の主な流れ

㊦事前指導

自分でできるおやつをおかあさんに教えてもらったり、調
べたりして、三人分の材料を自分で準備する。

㊧本時の学習——調理室とくらしの部屋にて学習——

T どんなおやつを作り、だれを招待するか発表してくださ
い

C お父さんの大好きなコーヒーゼリーを明日の誕生日に作
る

C キュウイとミカンにヨーグルトを混ぜて歯の悪い妹に

C おかあさんの帰り遅いで、おなか減るで、弟と食べるサ
ンドイッチ

C 三時のお疲れ休みにレモンスカッシュ、家中の人に

T いろんな人と一緒に楽しく食べられるね。では作ってみ
ましょう

——調理室にて調理——

T でき上がったおやつをみんなに紹介し、お金はいくら、

②評価をどう生かしていくのか検討する。

〈研究の進め方〉

①授業実践をして研究内容①②を領域としてとらえ直す

②題材を通して、評価計画一覧表を作成する

③達成不十分な生徒に対する指導の具体例を検討する

〈住居領域研究方針〉

研究会全体の方針を受けて住居領域では、「学んだことを生活実践にうつそうとする力をつけさせる」とした。その実現のために、つぎのように授業をしくんだ。

学習課題をみつさせる——驚き

課題解決への手だてをつかませる——共同体験

共同思考

個人の実践計画

〈授業の仮説〉

資料提示と実験の導入によって無駄をなくす努力をした生活態度を育成することができようであろう

〈本時のねらい〉

生活の中での水の重要な役割を知ると共に、使用している現状をみつめ直して、有限な資源を合理的に使う態度を培う

二、第一次授業実践（二時間授業）の反省（大垣市北中）

〈課題をみつつける場〉

●目標 工業用水・農業用水として使用する他に生活用水として大切な水の役割がわかる

工業・農業に欠かせないものであることが活発に出されたにもかかわらず、家庭生活では広く使われていることをあげるのが不十分であった。

〈体を通して解決する場〉

●目標 水の使用の実態をつかむ

⑦水の使用量の推移を示す表とグラフ ④水の使用実態の図 ⑤各国の人口一人あたりの降水量 以上三つの資料から、使用可能な水は予想外に少ないことや年々使用量が増えていることをつかんだ。

●目標 生活用水の増加の原因がわかる。各自の水の使い方とありのままにみつめ問題点を上げることが出来る

工業用水としての使い方に問題があることが出され、地盤沈下の原因となることなども出てきた。しかし、各家庭での生活様式の変化に伴うことが多く、これこそ、日常だれもが使っているのが本当にその使い方でのいかを検討する必要があることを強調し得なかった。

●目標 使い方によって水の使用量がちがうことがわかる

出したままと溜め水を使う場合とで、洗面、手洗い、雑布洗いの時の使用水量の差の実験。蛇口からの水の出し方のがいによる出水量の差をみる実験。

生活の中での水の重要な役割を知ると共に、使用している現状をみつめなおして、有限な資源を合理的に使う態度を培う。

場	過 程 目 標	教師のはたらきかけ	予 想 さ れ る 生 徒 の 活 動
課 題 を み つ け る	日常生活に欠かすことのできない生活水の大切な役割がわかる。	工業用水、農業用水、水力発電、舟運、観光などに水を使っているが、家庭や学校で使う生活水としては、どんなことに使っているか。どのように役立っているだろうか。	○各自学習プリントに書く。→班内で発表する。 ○班交流 ア. 調理に―食品の汚れとり、食器洗い、食品を煮てやわらかくする。汁物料理のため。 イ 衣類整理に―衣服の汚れおとし、染めなおし、のりづけ。 ウ. 入浴に―体をあたためる。体の汚れをおとす。 エ. 掃除に―すまいの汚れおとし。 オ. トイレに―汚物を流す。 カ. 洗面に―歯みがき、顔洗い。 その他、生け花、庭木への水、冷暖房等。
	水の使用の実態をつかむ。	資料をもとに、水の使用実態を考えてみよう。	○資料を見てわかったことを書く。 ○発表し合う。 ア. 降水量が多いのに、1人あたりの降水量が世界平均の1/5くらいである。 イ. 直接海へ流出するから、実際に使われるのは、1/4強である。 ウ. 水の使用量は、年々増加し、ここ20年間で約3倍に増加している。
生活に欠かせない水は、今の使い方のままでよいだろうか			
体 を 通 し て 解 決 す る	生活水の増加の原因がわかる。	一人あたりの生活用水が増加したのはなぜだろうか。	○家庭でのくらし方でかわってきたと思われることを発表する。 ア. 水洗トイレ―各戸のし尿浄化槽の設置。多量に使う（汲取り） イ. 洗たく―洗たく機で水を流しながら洗う。（タライ） ウ. 入浴―各戸に風呂があり銭湯がへってきた エ. 上水道―ポンプ井戸ではなくて、蛇口をひねればたやすく出てくる。
	自分の使い方の問題点に気づく。	くらしやすくなって使用量が増えてきたのはよいことであるが、つい、ムダはしていないだろうか。	○自分の体験やみかけたことを話す。 ア. いきおいよく出す。 イ. 流しっぱなしで他ごとをする。 ウ. 風呂水があふれている。 エ. ポタポタ蛇口をしめてももる。

	<p>使い方によって水の使用量がかわってくるのがわかる</p>	<p>使い方によってどれほど使用量がちがうのかを調べてみよう</p>	<p>○教師測定を見る。</p> <p>a. 漏水 ポトポトッパッキングとりかえしめ方不十分 スルー——きちんとしめる 小さな浴槽で200ℓ</p> <p>b. 班で、一つ決めてやる。</p> <p>㊦ぞうきんすすぎ(流水)(ため水)</p> <p>手洗い・洗面・歯みがき (")</p> <p>○わかったことを学習プリントに書く。</p> <p>○発表する。</p>
<p>伸びを確かめる</p>	<p>今までの学習から、節水の必要に気づき、自分や家族と共に実行できること、節水方法を考えることができる。</p> <p>日常生活の中で継続的に節水実践する意欲をもつことができる。</p>	<p>節水の必要をまとめる。</p> <p>実行できる節水方法を考えよう。</p> <p>家庭実践しようとすることに○をつける。</p> <p>本時の感想を書こう</p>	<p>○学習プリントにまとめる。</p> <p>㊦降水量は多くても海に流れてしまい、使える量は少ない。生活用水がふえてきている。いずれ水不足になるのではないか。</p> <p>○学習プリントに書き発表し合う。</p> <p>ア. 出しっぱなしをやめてため水で。</p> <p>イ. 蛇口のあけ方を制限する。</p> <p>ウ. 水の再利用。</p> <p>エ. 水もれの修理。</p> <p>オ. 洗たく 洗液を脱水してからすすぐ。</p> <p>カ. 水洗トイレ 流す回数。</p> <p>交流後実践することに○をつける。</p> <p>「海と漁師」—他地域 森林と保水 雨をすいごも道路 運動場を洪水の時の貯水池に 吸水と地盤沈下 水質保全</p>

使い方による差をみようとしたの
ではあるが、無駄な使い方をしない
ために、どのような努力をしていく
かを考えようとして実験している
という意識が希薄であった。

へ伸びを確かめる場へ

●目標 家庭生活の中で継続的な節
水実践に意欲をもつことができる

⑦水門川BODの年次変化のグラフ

④BODと魚の棲息状況の図 ⑦大
垣市の給水設備・排水設備の図 以
上三つの資料を使って、郷土の水、
水門川について先生の話があった。
今、学校付近で行っている排水工事
が川をきれいにすることにつなが
り、自分たちの生活環境を守ること
になることを意識させるものであ
った。川の汚染とアユでもすめるか、
フナ、コイならすめるか、それでも
死んでしまうかについては大きな驚
きであったようだ。時間不足であ
ったが、排水設備に、野菜やゴミを流

さない、水洗便所に溶けにくい紙を流さないなどの日常のさ
さやかな心がけが、よい水を使えるものになることなどを訴
えられたと思う。

三、第二次授業実践(二時間授業) (岐阜市陽南中)

一年食物学習の最後であることと、一次実践の反省を受け
て次の三点を大切にしたい。

①日常生活の中で水は欠かせないものであることを自分の毎
日の営みから強調する ②自分が今すぐにでもできる節水の
方法はないかを考え確かめてみる ③社会の一人として具体
的に行動できることを、ひとりひとりが持つことができる。

生活用水に的をしぼって、自分が朝起きて寝るまでどれだ
け多くの場で水を使っているかを出させた。食物学習では人
体構成で水分が多いのに驚き、野菜には多いということはキ
ャベツのせん切りを、生といためた物・ゆでた物とで、量が
どう違い、食べる感じがどう違うかを調べた時、水もいれな
いのフライパンに水が出てきて量が予想外に減ったのに驚
いたことを思い出させた。また、さつまいもごはんをする
時、水量は予想どおりさつまいも分の水はなくても米の分だ
けでおいしく炊けたので、やっぱりいも類も水が多いことを
認めた。こうして私たちは知らぬ間にたくさん水分摂取を
していることを確認したことがあるので、これらを導入とし

て話した。

節水の気持を起こさせるため、教師の測定を全員に見せ
た。漏水(ポット、ポット)は一分間で〇・〇六ℓ、しめ方
不十分でスルーと出るのは〇・七ℓ。一ヶ月では前者は浴槽
一杯強、後者十六杯になることを計算させた。これによって
蛇口の開け方と水の出方の違いがわかったので、各班が節水
できそうな方法を確認するための実験をした。

溜め水使用と放水しながらとの比較を、思い思いの作業に
ついて試みた。「同じ溜め水でも分ける回数による相違や、
流水の時何も思わないで行動するのと、節水を意識して行動
するのではどう違うか、必要量の水を用意するのに、定量
間近になったら水栓に手をかけているのと、定量になったか
らパツと止めようとするとどれだけ違うか」などと、日常や
っていることを改めることはないかという気持で、実験内容
を決め行動することができた。

その後の調理実習で「はよ止めて」「その余分の水は後で
洗いに使おう」などと、この学習をした生徒が、していな
い学級から来た生徒に呼びかけている声も聞かれた。

今後、この授業をどこかへ入りたい。有限の資源を後世
に渡せるように、たいせつに使うことを意識させると同時に、
自分の生活行動が適切か否かを見直そうという心も育ててい
きたいと思う。

(岐阜市立陽南中学校)

新しい家庭科を創るために◇高等学校では

忘れられない実践Ⅲ

森 幸 枝

再出発

その年は、田辺高校にとってまさに再出発の年であった。同校は、一九六〇年代の高度経済成長政策による高校多様化の路線に沿い、全国で、科学技術振興の名のもとに数多く誕生した工業高校と時を同じくして、当時府立高校には無かった工業単独校として昭和三十八年に設置された（京都府が望む総合制高校では国の補助は出なかった）。そして、その後次第に生徒の質の低下がすすみ、四十六年前後には、授業がまともに出来ず、暴力・喫煙・怠学が横行するまでに学園が荒廃し、

地域のひんしゆくを買うに至った。しかし、生徒・保護者・地域をも巻き込んだ先輩教職員の、何年かにわたる血のにじむような教育運動が漸く実って、遂にこの年、五十二年四月に普通科を設置、地域制・総合制・男女共学制の高校三原則にもとづく学校へと変革したのであった。従って、地域制ということから、「イヤイヤ、恐る恐る」入学して来たような生徒がまだ何人もいた中で、教職員は再興の意気高く、活気に満ちあふれていた。以来、全国的にも珍しい普通科と工業科の共学という条件のもとで、力を合わせて、普・工のミックス授業やミックスホームルーム、普通科における技術教育（技術一般）等の取り組みをすすめる、学習の正常化、クラブ活動の活発化、生徒会活動の前進、校内規律の確立など、一定の成果を挙げ、地域の学校として、地元の人々も目を見張る蘇生ぶりを示していくことになる。

ところがあるのである。先ず驚かされたのは、はじめて生徒にまみえた始業式のとき。体育館の壇上で、何人かの先生方と共に型通りの着任の紹介があった。「次は：『家庭科』の森幸枝先生です」と校長が言うか言わぬかに、並いる二・三年生（工業科男子のみ）のほとんどが、ドツと「ヘエツツ」とも「ワハーッ」ともつかない笑い声をあげたのだ。????……。

つまり彼等にとつて、もちろん私個人ではなく、「家庭科」なるものが、おかしくもあり驚きであつたらしい。中学校に

技術・家庭科があるではないか、と力んでみても仕方がない。彼等の多くは、「ヘエーッ。高校にも『家庭科』なんていう教科があったんか。あのオバハンがその先生か」くらいのところが正直な気持ちだったのだと思う。私は、一瞬びっくりした。そして工業単独の男子校としての、積年のひずみをそこに見た思いがした。それは、単に「家庭科」の存在を知らないということではなく、これまで生徒たちに様々なゆがみをもたらして来た要因でもあるのだな、と思った。ずっと総合制の男女共学校にのみいた私には、全く異様な体験で、「これは大変だ。この学校で家庭科の男女共修を理解してもらおうのは」と直感したのだった。

案の定、「聞いてはいたけれど、男子にどんなこと教えるの？」と他教科の先生、「ヘエー。最近の男の子も家庭科なんかやるんですか！」と驚く工業科の先生も何人か。他校との接触も少なく、今まで無縁の教科、その上紛争の心労等々、無理もないとは思ったものの、なんとも情けない気持ちであった。「ウチでも、男女共修がんばってや」という少数の先生の励ましを受けて、まさに、私にとっても一からの再出発となった。

懸命なアピール

先ずはじめに、四月当初新入生に配布する「学習のしお

り」の各教科の紹介にも抜け落ちていたのを発見、あわててプリントをしてはさみ込んでもらう。「この教科の基盤は何か、何のために学ぶのか、どんな内容を学ぶのか、どんな方法で学ぶのか、どんな力をつけたのか」等、ひとりひとりの生徒に訴えかけるような気持ちで、わかりやすく、短くと苦勞して書いた。

その後は毎年、秋の育友会総会には「今、男女共修の家庭一般では、こんなことをやっています」と、その前後の授業の流れや生徒が研究発表した時の作品等を、壁新聞よろしく会場や廊下にはって、少しでも親たちの理解をと願った。学園祭では、前任校のように生徒を動かして生徒の力で、とまではとても無理であったが、やはり、その時々の研究発表やレポートの綴じ込み（朱でコメントを書き入れたそのまま）などを展示したりした。さらに、教職員研修会にも取り上げてもらうなど、校内外への宣伝に大いに努めた。

やがてまる三年が経過して、はじめての卒業生を無事に送り出した。すでにその頃家庭科は、他教科と全く同列線上に、そして、選択科目の食物・被服・保育の履習者も、生徒増ともかかわって年ごとに増え、専任の教師も漸く二人になったのであった。

前記のように、この学校での家庭科の出発はいささかあわれだったが、その後は学校再建に取り組む民主的な教職員集

班学習での工夫

そこで、表1は五十七年度の指導計画である

に親
一だ。
てだ



表 1 昭和57年度年間指導計画(普通科2年、2単位)

	指 導 項 目	指 導 内 容
一 学 期		なぜ、何を、どのように学ぶのか
	家庭生活の現状	アンケートとその考察 現状の問題点に気づかせる (班学習・発表)
	現代の家族と 家庭生活	現代家族の特徴 家庭生活の機能 家事労働
	家族の移り変わり	家族の構造・形態・機能の変化 旧民法・現民法による家庭像の違い
二 学 期	青年期と食生活	1日のたべものの現状調査と考察 栄養素・栄養所要量 食品の選択と組み合わせ 調理実習 青年期の1食分 (栄養の充足、男女の協力)
	夏休みの課題	時代による子どもの生活環境の変化 (祖父母・父母・自分の幼時と今の子ども)
	子どもの発達	生活の変化に伴う発達のゆがみ(班学習、OHPによる発表) 人間の愛と性、生命の誕生 心身の発達のふし 生物的発達観と社会的発達観 児童憲章と児童福祉法
	これからの保育	家庭保育と集団保育の特質と重要性
三 学 期	子どもと食生活	食品の安全性 食品の添加物・食品公害 調理実習 安全なおやつづくり
	冬休みの課題	家計にかかわる新聞記事切り抜き (国家予算と家計のつながり)
	家計の現状 支出・収入 生計費	1981年の家計の実態 各支出費目の問題点 食物費・住居費・教育費・税金・公共料金と家計
	食費と食生活	食品の経済性 需要と供給・食糧問題 調理実習 限られた費用で条件を満たす工夫
ま と め	消費者問題	消費者運動の歴史と現状 消費者の権利と責任の自覚
		1年間の反省

が、先ずは生徒の実態と時間不足を念頭におき、①従来より一層具体的に平易な指導をする ②多様な学力の生徒それぞれが力を出して前進出来る条件をつくる ③班学習に時間をかける代わり、一つの題材を多角的にしっかりと検討させる中で他の指導項目の到達目標を同時にめざす、ことを実践上の課題として考えた。そして、四月当初には次のような授業の

(2) 展開をしてみた。
(1) 生徒の生活意識・生活実態のアンケートを実施し、その中の「家族構成、母親の就労、子どもの数、家庭生活での男女差別、家事労働に参加の有無、生まれ変わりたい性」について集計をさせる(生徒自らの調査結果を教材化)

表2 班学習課題(アンケート集計考察から)

(1班5~6人)

◎班の話し合いで出されたすべての意見をノートに書き、その中で重要だと思われるもの3つに○印をつけよう。

1. 核家族の長所・短所
2. 子どもの数2~3人が圧倒的に多い理由
(班員の父母は何人きょうだいか出しよう)
3. 母親の就労
(1)年々家事労働以外の労働をする母が増える理由
(2)1が家庭生活に及ぼす影響
(3)内職・パートを正規の職業と比べた利点・欠点
4. 家庭生活での男女差別の具体例
5. 男性が家事労働を全くしないことについての意見
6. 女生徒に比べ男生徒が家事労働に参加していないことについての意見
7. 男性に生まれ変りたい理由
8. 女性に生まれ変りたい理由

の家庭の現状と地域や時代との関わりに気付く)

(3) そのなかから、班学習の課題づくりをする(どんなことが問題になるのだろう、なぜそうなるのか) ↓表2

(4) 班討論の経過を班長がまとめていたのを改めて、全員にその進行を逐一記入させる。その中から三つを選ぶ段階ではかなり幅広い相互学習がすすみ、生活上の問題点がわかってくる

(5) 班発表はある班の意見を黒板に書かせ、他班からの追加で内容を次々とふくらます(各自ノートに全部を写す)。

板書は、班長に限らず無関心派を指名、もたもたしている

と「しっかり書け!」とか、「そんな意見じゃなかった」とか班から叱られる。ここで生徒たちは、思いもつかなかった他班からの意見に大笑いしたり、感心させられたりして、班学習の楽しさや大切さを学び、視野を広げていく

(6) たくさん板書の中から、重要なものを教師と共に選び出して印をする(教師からまとめを渡していたのを改める)。

次に、それを資料として「現代家族の特徴、家庭生活の機能、家事労働の今後のあり方、家族の歴史的な変遷」等と結びつけて説明、板書も補足する(ノート提出、ここまでを通しての自分の意見をまとめ、班学習の感想も書く)

(7) 高度経済成長以来、いろいろなかたちで家庭生活の機能の崩壊がすすんだことや、生活実態に比しての意識変革のおくれ等を確認、それらの歪みを正していくために今後の家庭科学習をしっかりする必要があることに気付かせる

班学習後の感想文をそえる。

女子……班学習は、自分一人で考えるだけでなく他の人の意見も聞けるのでいい。また、自分の意見も小人数の中なので出しやすい。班学習は楽しくてよかったが、もう少し意見の出し方を変えてもよかった。

今日の授業は、班学習の大きなまとめだった。まだ私達は、文明などの進歩とはうらはらに古い考えを持ちつづけて

いる。もっと考え方も変えていかねばならないと改めて感じた。今後、生活の中でもこの学習で考えたことをいかしてきたい。

男子……家事労働の重要性がよくわかった。子どもをやしなっていくのは、たいへんしんどいことだなあと思った。もっと家事労働に目を向けるようにして感謝したい。

こういうふうに学習したら、ふだん何気なしにしている身の回りの事でもよくわかった。

男子……人それぞれいろいろな考え方を持っているんだなあとと思った。視野が少し広がったような気がする。今の時代は近代的な考え方が増えてきてはいるけれども、まだ昔の考え方も一ぱい残っているということ、この二つの考え方の中で女の人の仕事かふえ、大へんになってきていることがよくわかった。自分の母も職業を持っているが家事もほとんどやっている。のん気に遊んでいてはいけなと思った。

班学習は、受身的でなくて自分でもいろいろなことを考えられるし、他の人の意見もたくさん聞くことが出来るからすごく勉強になる。

女子……なんか、女性の権利とか男女の差別問題とかについて、深入りしたように思うけれど、今までそんなに深く考えたこともなかったし、よい機会だったと思います。家庭という重要さを改めてわからされたような気がします。班学習

については、他の人の意見とかが聞けるのでいいと思います。これから先慣れていったら、もっと充実すると思う。

女子……高校に入ってから初めて男女いっしょの授業だったので少しびっぴりした。

班も男女混合でいろんな意見が聞くことができました。自分からだけの一方的な見方だけじゃなくて、他の人が日頃から家庭生活についてどのように思っているかよくわかった。

そして他の班ではどんな意見が出ているのかもわかったし、これからもどんな班学習をやってほしいです。

私は班長だからもっとしっかりしなければいけないと思うので、いろんな話し合いをたくさんすれば、だんだんなれてきて意見をまとめられるようになると思います。

男子が家事をしなくてもよいなんていう理由がどこにあるのだろうか……。

男子が家事をしないことについて私はとても腹が立ちます。男女平等なんて本当に形式的なもので、それを本当のものにしていくのはこれからだと思います。

男子……ボクは、家庭科の時間といえど、調理実習とか、裁ほうとかそんなことばっかりやるのではないかと期待していた。ボクはこれでも料理が好きで、上手だと自負している（あとかたづけはしないが……）。とにかく、家庭一般ではな

くて、家事一般だと思っていました。で、授業を受けるとわかりかし内容もくく、ビックリしました。まあその点ではキタイは外れたわけですが……。

で班学習ですが、このアンケートの結果は、たいへん面白かったと思います。やはり男女差別というものは根強くあることが分りました。しかしこれは『オレは男だゾ!』という

意識だけから起こっているのではなくって、女性の意識も原因していることがわかりました。それから一つ男として言いたいのは男は、いや男だって、男女差別はいけないと思っているのです。が実行がともなわないだけです。(一番悪いことだな)。

(前京都府立田辺高等学校教諭)

＊ひと＊

「教室の窓」の 植垣 一彦さん



夕方、だれもいない四年三組植垣学級に入っていくと、円型に並んだ子供たちの机の上に、国語辞典とことわざ辞典が。

ことわざ教育を始めて九年目の植垣さん。四月から共に過ごすようになった子供たちが

一人、二人と自然に自分で買い求めたのだ。十月号で書かれた「いじめ」のその後が聞きたかった。

「ないんですよ。すでに二学期も、楽し

くすごせるといいです」といじめられた子が書いた時点で、教室は変化していたのだ。植垣さんの涙が、落ち込みが、子供たちに、もういいよ、授業やろうよ」と言わせ、植垣さんを元気づけた(？)。根本的な解決かどうかわからないけれど、と。

小五と小一の娘さんと交換日記を始めた。友達がいじめられっ子で、娘さんを頼っている。そんな時、二人こみでいじめられたら危ないな」と本音で心配するけれど、学級ではつきりさせなければ」とアドバイスも。

教室の中にどれだけ生活を持ち込むか。植垣さんは自分の仲間を教室に招き、話をしてもらっている。植垣さんの仲間は子供たちの仲間。昨日の日曜日、ミカン狩りに行った子が、クラス全員にミカンを持って来て、給食の時食べた。でも、子供たちが教室に自分の

生活を持ち込んでくる機会が少ない。

「学級のわく組の中にいると、どうしても教えこもうとするものができてしまう。だけれどどれだけ自覚的か、というのがただ一つの救いじゃないかな」。子供たち同士顔が見えるようにまわく机を配置してるのもその一つ、と。趣味はプロレスを見ること。実際に見に行ったことも。

話を終え、焼肉を食べに行くことにした。昨年受け持った孫さんの店。が、定休日でもないのに店は真暗。すると植垣さん、店にどんどんはいっていき、中で何か話している。父親がたおれたらしい。そんな心遣いに、自然なふるまいに、心がうるおった。焼肉は食べられなかったけれど。

家族って何？「究極のところで許しあえる間——それは夫婦かな」(馬場)

新しい家庭科を創るために◆◆◆大学では

家庭科、男女共学の時代を迎えて

——見直し迫られる

食生活の教育 (2) ——

佐藤 慶子

少なくともこの十年間に、食生活教育は根本的な見直しを迫られる社会的視点の変化を経験したように思う。

そのひとつは、食生活が一応量的充足をみるとともに、次に「健康と食生活」という課題が待ち受けていたことである。その主要な課題は、欧米型成人病の克服ということであったが、同時にわが国が急速な高齢化時代を迎えつつあったことも、長寿と健康の視点をそこに加える成りゆきとなった。

二つめに、成人病の最難関であるガンの増加に対して、果たして食生活とどのような関係にあるのか、ガンは食生活で予防できるだろうか、が大

きな社会的関心事となった。このことも食生活への関心を大きく転換させる要素であった。

三つめとして、家庭生活や食生活の変化の中で、食事がどのようにに振られているかが研究・関心の対象として浮上してきた。いわゆる「食生態学」の領域である。いったい食生活の課題にとって、食生態学の諸研究が今日ほど必要になると誰が十年以上前には予測できただろうか。しかし、とくに児童の食生活の問題を考える時、ひとりで食事する子どもたちの姿を照らし出したこれら諸研究の成果は、十分教育上考慮されるべき課題となってきた。

一、健康のための食生活の様式

健康と食生活との関係に最も関心をもち、最も広範な行動を展開したのはアメリカであるといわれている。アメリカ人一人当たりの供給栄養量は一九七八年で、熱量三千四百キロカロリー、たん白質百六グラム、脂肪百六十六グラムで、総カロリーに占める脂肪の割合は四四％にも達する。

その結果、人口十万人当りの死亡率は、心疾患三百三十二と日本の約三倍を占め、脳血管疾患が日本の方が多いのを除けば、ガンも糖尿病も日本より高い値になっている（一九七六年）。そして、死因の約四割を心臓病が、ガン、脳血管疾患の三種が合計三分の二の死因を占めており、医療費でも、

表 1

〈米 国 の 食 事 目 標〉

- (1) 肥満を避けるため、消費熱量（カロリー）と同じだけの熱量しか摂取しないこと。もし肥満になれば、熱量摂取を減らし、消費を増やすこと。
- (2) 複合炭水化物及び「天然に存在する」糖分の摂取量を総摂取熱量の約28%から約48%にまで増加させること。
- (3) 精糖及び加工糖の摂取を約45%減らし、総摂取熱量の約10%とすること。
- (4) 全脂肪摂取量を総摂取熱量の約40%から約30%に減らすこと。
- (5) 飽和脂肪の摂取を総摂取熱量の約10%に減らす。ポリ不飽和脂肪とモノ不飽和脂肪のバランスをとり、それぞれが総摂取熱量の約10%になるようにすること。
- (6) コレステロール摂取を1日約300mgにまで減らすこと。
- (7) 食塩の摂取を1日約5gに減らすことによりナトリウムの摂取を制限すること。

〈「目標」が示唆する、食品の選択と調製の転換〉

- (1) 果物、野菜、全粒穀物の摂取を増やすこと。
- (2) 精糖及び加工糖並びにそれらを多く含む食品の摂取を減らすこと。
- (3) 脂肪含量の多い食品の摂取を減らし、植物性及び動物性を問わず飽和脂肪の1部をポリ不飽和脂肪で置き替えること。
- (4) 動物性脂肪の摂取を減らし、飽和脂肪の摂取を少なくするような肉類、とり肉、魚を選択すること。
- (5) 小児を除いては、全乳を低脂肪又は脱脂乳に、高脂肪乳製品を低脂肪乳製品に替えること。
- (6) バター脂、卵その他高コレステロール源の摂取を減らすこと。ただし、更年期前の女性、小児、老人については、卵の栄養的利点を確保するためコレステロールについての目標を緩和して考えること。
- (7) 食塩及び食塩を多く含む食品の摂取を減らすこと。

一九六〇年の六%から一九七八年の一一%（対GNP比）へと増加が続いている。
この状況に対して、一九六九年ホワイトハウス主催食物栄

養保健会議が行われ、その後一九七七年上院に設けられた「栄養と人間ニーズに関わる特別委員会」は、「マクガバン報告」（委員長ジョージ・マクガバン）と通称される報告書を提出し、「米国の食事目標」を発表した。この食事目標等は表1の通りである。

さらに、一九八〇年連邦政府は、農務省、厚生教育省公衆衛生局合同で、「食生活改善指針」を出し、併せて農務省は、八一年「より良い食事のためのアイデア——食事指針に役立つ献立と調理法——」を啓蒙用に刊行した。

マクガバン報告は、議会が、表示や食生活（の危険）の研究、関係者の意見調整等を行うことと、大衆教育計画を徹底することを勧告している。そして、農務省が一九七九年の報告書を子ども向けの「食えることって何？」の啓蒙書に当てたり、八〇年代に入って高齢者栄養専門家会議が行われて、高齢期の健康のための栄養教育が配慮されたり、企業のwellness運動で、食生活・運動・休養・ストレス等の自己管理が啓蒙されたり、と健康と食生活をめぐる取り組みは広範に展開

されているという。

これら一連の過程を通じて、アメリカでは、栄養や食生活の管理は個人の賢い多様な選択と管理にまかせようという、意識が形成されてきたようである。

二、日本型食生活の提唱

一方、わが国の食生活の再検討は、昭和四十年代の半ばに栄養水準の改善と米の余剰という新しい段階を迎え、主として食糧供給の政策立案の面から開始された。

昭和六十年代を目標とした農政審議会の答申（昭和五十年四月）は、食料の需要供給両面から日本人の食生活の将来のイメージを作り、可能な限りの自給力の保持を打ち出した。この際、需給部会に参集した専門家の研究会「食生活研究会」の報告書「これからの食生活」（五一年十月）が基本となつて、「八〇年代の農政の基本方向」（農政審議会答申、昭和五五年十月）、および「日本型食生活の形成と食糧の安定供給に関する調査研究」（食糧需給研究センター、昭和五六年年度、「食生活のあり方に関する研究」（農政研究センター、五七年度、定着促進事業）へと展開した。

日本型食生活提唱の論拠となつたのは、①風土や文化との係りで、民族は所与の条件下でそれぞれの食生活を営んでいたこと、②食生活に対する生理的条件等から、わが国の食生

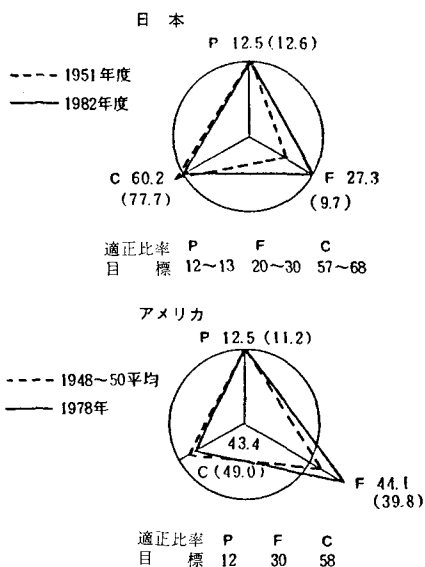
活の果たしている生理的ニーズ、し好的ニーズ、利便性のニーズの適合性、③食糧資源との関連で、食糧供給範囲の拡大の中で自給食糧を確保する意義、などである。

とくに、昭和五四年の「日本人の栄養所要量」（公衆衛生審議会）をベースにすると、たんばく質、脂肪、炭水化物の摂取カロリー比は、P 一二・一三％、F 二〇・三〇％、C 五七・六八％が適正比率であり、昭和六五年には脂質の上限三〇％に達すると見込まれたことが、食生活のこれ以上の変化に歯止めがかけられた理由といわれている。

「日本型食生活」の評価は、米、野菜、魚、大豆を中心とした伝統的な食生活のパターンに、肉類、牛乳・乳製品、鶏卵、油脂、果実が加わつて、多様な食生活が形成され、欧米諸国に比べ熱量水準が低くその中に占めるでん粉質比率が高く、また、動物性たんばく質と植物性たんばく質の摂取量が相半ばし、動物性たんばく質に占める水産物の割合が高いなどの点が評価されている。

そこで、望ましい食生活の提言は、表2のように、細かな分量をさけ、大まかな方向として示されている。問題事項は、カルシウム不足、塩のとりすぎ、個人の食事の偏りなどが指摘されている。

図1 PFC熱量比（日米比較）



資料『日本の食生活』p.168より

表2 日本型食生活の提言

- ① 総熱量のとりすぎを避け、適正な体重の維持に努めること。
- ② 多様な食物をバランスよく食べること。
- ③ コメの基本食料としての役割とその大切な意味を認識すること。
- ④ 牛乳の摂取に心がけること。
- ⑤ 脂肪、特に飽和脂肪酸が多く含まれている動物性脂肪のとりすぎに注意すること。
- ⑥ 塩や砂糖などのとりすぎに注意すること。
- ⑦ 緑黄色野菜や海草の摂取に心がけること。
- ⑧ 朝食をしっかりとること。

三、ガン予防と緑黄色野菜

ところで、ガン予防と食生活は関係があるのではないかと多くの人が感じてきた。現在ガンは、専門病院で治療を受ければ五割が治る時代だそうで、三〇四割台を脱することができなかった二十年前と大きく異なってきた。このことがまたいっそうガン予防への関心をかりたて、食生活ではどのようなしたらよいか、との研究が求められるところとなった。

予防がん学研究所長、平山雄博士によれば、昭和四一年から行っている六府県二十九保健所管内に住む四十歳以上の男女二十六万五千百十八人の追跡調査の結果、食品の中では緑黄色野菜が「毒消し作用」と呼べるほどの効能を持っていることを指摘している。つまり、緑黄色野菜さえ食べればガンにならないというわけではないが、ガンの原因と考えられるような喫煙、飲酒、肉食の習慣化した人たちでも、緑黄色野菜を食べているかどうかで、ガンの発現率が大幅に異なるという。中でも発現率が半分以下になるのは、口腔・咽頭ガン、喉頭ガン、肝臓ガンで、これを見るとやはり食生活・食品とガンは無関係とは言えないようである。

「ガン予防十二カ条」（国立ガンセンター杉村隆博士ら）では、ガン予防のために避けたいたのは、偏食、ひとつの食品のくり返し、食べすぎ、深酒、タバコ、塩辛いもの、熱すぎる

もの、ひどく焦げたもの、カビの生えたもの、などの食物等と、過度の日光・過労であり、守りたいものは、バランスのとれた栄養、適量のビタミンA・C・E、繊維質、などの食物と身体の清潔（とくに生殖器官は男女とも）である。

これらを見ると、食生活への理解や管理能力の向上もさることながら、ガンに最もマイナスと言われるタバコ、飲酒、肉食について自覚すべきなのは男性であることが改めて問題となる。

四、私たちはどのように食べているか

さて最後に、いわば食事の食べ方の問題であるが、今日子どもたち（三〜十二歳）の二一・四％が朝食を子どもだけで食べていることがわかっている（「国民栄養調査」昭和五七年）。そして、子どもだけで食事をする場合は、栄養のバランスが良くない傾向にある。栄養に差があるのは、成人でも二割以上のエネルギーオーバー、二割以上の不足が相当量あるそうだが、子どもたちの場合、知識・技能そのものが不足がちであることを考えると問題の解決は容易ではない。

現在、都市・農村を問わず若い母親の就業・就労は一般化し、母が仕事に出掛ける時間の方が、子どもが食事をする時間より早いことも珍しくはない。とくに、都市の核家族世帯では、母または父の役割を補う人がないし、また共働きはサ

ラリーマン世帯では必然化しつつある。その意味では、学校や保育所が朝食の給食をするか、子ども自身の自立力を高める以外に現実的な解決はない。

子どもは消費カロリーが少ないから何を食べさせておいてもよいのではなく、子どもの時の食習慣が生涯の健康にかかわることを考慮すると、何らかの配慮はしなければならないのである。

これらの研究の必要性を提起しておられる点で、女子栄養大の足立己幸氏らの食生態学の研究はきわめて貴重な役割を持っていたといえよう。

砂田登志子氏によれば、アメリカでは幼児のクッキングクラブが日本の塾のように存在し、手軽に子どもがクッキングの初歩を学ぶ機会が設けられているとのことである。サンドイッチやサラダなどのごく簡単な食べ物を、プラスチックナイフなどを使って整えることができるようになるという。小学校ではもちろん、もう少しレパートリーが増える。この話を聞くと、小学校の五年にならなければ家庭科を習わない日本のシステムは再検討の必要がありそうである。

五、食生活教育の再検討

以上のような諸点から学ばれることは、健康と不可分な食生活の知識やその運営能力を身につけることは、私どもの生



あなたも We のつくり手に…

◆夏増刊号を讀者でつくろう

“働き続けるために”は好評でした。

来年のテーマは「こどもたちへ—おとなになる旅」長谷川公一さんの発案です。小学校高学年から高校生の世代に、わたしたちの自己表現として自分史的なメッセージを送りましょう。

●こどもの日の不可思議、忘れ得ぬこと ●家族とのかかわりの中で
●友情 ●思春期のときめき ●師との出会い ●社会に出た日 ●結婚を選んだのは、選ばなかったのは
●夫(妻)とくらし始めたころ ●子産み、子育ての中で ●親である喜び、苦しみ、悲しみ ●老いをみとりつつ ●病む中で ●老いにまわかう……のように自分史の中のエポックに焦点をあてていただいても。
●わたしの「戦争」体験 ●消費者運動の中で ●PTA活動を通して
●わたしにとって女性解放運動とは……のように、時代や社会とのかかわりの中でとらえていただいても結構です。次の世代へ語り継ぎたいことを頭において書いて下さい。

400字詰原稿用紙6枚程度、**メ**切りは1月31日。ふるってご投稿を！

◆4月号原稿募集

テーマ「幼い日—大人は忘れてしまった」

幼い人の言動に心洗われることはありませんか。発言欄にご投稿下さい。2千字以内、**メ**切りは12月5日です。(原稿はいずれも住所・氏名明記)

◆5年目の継続購読をよろしく!!

活権であるとともに国民としての基礎的素養であることをより強く認識させられることである。

そして、食生活の教育が、学校や家庭に限らず、広く社会全体で取り組まれるべき課題であるとともに、子どもの教育のみでなく、大人にも必要な教育であることが理解される。

さらに、食生活の教育は、もっと早期から考えてゆくべきで、学校が担うべきか、他の方法も充実すべきか、幼児段階はどうするか、の検討が必要である。

また、足立己幸氏が教科書で扱われている料理が、日本風四四・三%に対し、外国風五五・七%と指摘しているように、食生活の題材の再検討(たとえば日本型食生活)、調理中

心の教材構成から食生活の意義の理解へ、など教育の場における研究も必要であらう。

以上の日米の行政を中心にした食生活教育の方向転換の動向以外に、たとえば女子栄養大の食品分類の発想(四群制)、また日本型食生活のベースとなった各地の伝統食の採録(農山漁村文化協会『岩手の食事』以下各県)など、食生活をめぐる研究もまた従来と異った成熟を見せているように思う。

参考『世界の食生活U・S・A』『日本の食生活』いずれも全国食糧振興会刊行食生活と食文化シリーズ

(山形大学)

山口 里子

十月二日の夕、フォーラム「二〇〇〇年にむけて女が政治を変える——海外五人の女性政治家を迎えて——」が東京・千代田区の本教育会館でもたれました。女俱樂部バンドのミニコンサート、土井たか子さんの挨拶の後、落合恵子さんの司会で、ギリシャ、スウェーデン、ニュージーランド、オーストラリア、ベラウからの代表が「私と政治」を語り、新谷のり子さんの歌「鳩よ舞い上がれ」に会場全体が唱和して終了しました。五人のゲストの発言から、ほんの一部をご紹介します。

アン・ペンダリー（オーストラリア）：何故政治家の道を選んだかという問いへの答えは、男が何故政治に関わるのかと同じ理由です。政府の決定は女性たちにも大きく関わりますから。全ての決定機関に女性の%をふやすことは、平等・正義・平和の実現のために重要です。

マールガレット・ウィルソン（ニュージーランド）：私は長いこと草の根の活動をしていました。女性が自分の人生の決定権を持つのは、経済的自立があつてこそ可能であり、そのためには労働の平等、子育ての保障が必要です。しかしこれを実現していくには、自分たち自身が政治の中に入っていかないと確信したのです。

アンナ・リンド（スウェーデン）：女が働きたい自分の収入があるというのはとても重要であり、男とほぼ同数の女が働いています。これを支えるものの一つとして、両親保障制度があり、子供の世話のため、両親とも九カ月、九〇%の給料で休めます。現在父親たちは少なくとも二カ月は休んで子供の世話をするようになっており、これが家族関係にも大変良い影響を及ぼしています。しかし、これでもまだ不足と考え、休暇期間を一年に延長させ、母親だけでなく父親もきちんと利用するよう義務づける運動をしています。また、女が変わる時は男も変わる必要がおきるのですから、男が新しい役割に適応していけるようにと、政治レベルでのプログラムが進められるようになりました。

カリオピ・グルダブ（ギリシャ）：現P A S O K政権は草の根の女たちによって支えら

れてできました。民主主義の社会によって、全ての決定機関に女性の参加が圧倒的に少ないというのは、まさにスキヤンダラスな事柄と言ふべきです。

ジュリア・テウル（ベラウ）：平和と次の世代の為に、ベラウの女たちは、非核・独立を目ざして闘う主力になり続けます。

以上です。尚、カリオピさんと共に来日したギリシャの中山康子さんは、「もし日本の女たちがアテネに来るのなら、平和運動の担い手の女たち、P A S O Kと協力して女性運動を推進している草の根の女たちとの交流の機会を作りましょう。ぜひ来て」とのことです。

なお、この日に先立って、九月二十八日には、東京・渋谷勤労福祉会館で「パネルディスカッション・二〇〇〇年にむけて女が政治を変える」が開かれました。

パネラーは、いずれも政治の現場に身を置いている女性五人、竹村泰子（衆議院議員）、土井たか子（衆議院議員）、池田あつ子（東京都議、柳谷あき子（藤沢市議）、橋本文子（日野市議）の五氏。

「平和憲法を政治に生かす」担い手としての女性がもっともっと増えるように、と交々語りました。

（編集部）

〔8〕 種、その芽ばえ

人の死の、落雷のごとき衝撃は、やがて悲嘆の雨をふらせ、その雨けぶりの中に、残された者達を、立ち尽くさせずにはおかない。

さようなら、吉田ゆたかさん

宇治牧子

「吉田ゆたかさんがなくなっただんだったよ」と友達が言ってきたから、「そんなのうそだ」と信じませんでした。しばらくたって、他の人から、また、そのことを聞き、ました。二回目に聞いた時、「あの話は、ほんとだったのか……」と変な気持ちになったので、すぐ植垣先生に確かめに行ったら、「そうなんだよ」とさびしそうに教えてくれました。

八月十三日未明、漫画家の吉田ゆたかさん（We'85春の公開ゼミナール）に参加なさった

ので、御記憶の読者もいらっしやるかと思うが、大患ののち、四十九歳の生涯を閉じられた。

私のとめどのない悔恨は、しかし、二年前に吉田さんをクラスに迎えて今はバラバラになっっている当時の子どもの達の、限らないやさしさに触れることで、しだいに癒されてゆく。彼らは、「吉田さんに作文を書くこう」と呼びかけ合って、まったく自発的に動き出した。集め係という岡村君と孫さんが、毎日少しずつみんなの作文を届けてくれる。ある時は教室に、ある時は私の自宅に。それらを読みながら今一度たまらない気持ちにさせられるのと裏腹に、「こんなにまで吉田さんは、子ども達の中に生きているんだ」という確信が、雨けぶりに立ち尽くす愁傷の私を救ってくれるのだ。

このあいだ四年三組に来てくれた時は、あんなに元気だったのに、とつぜんなくなるなんて、今でも信じられませんか。私は、本屋さんに行くたびに、吉田さんの「ことわざ事典」をさがします。そして、本があるとはっとします。吉田さんにおくることわざを作りました。「三人いても一人」——意味、いくらたくさんさんのまんが家がいるも、一人の吉田さんにはかなわない、ということわざです。吉田さん、やすらかにねむってください。

吉田さんとの出会いは、印象に深い。一昨年暮れのある日、『学習まんが・ことわざ事典』なる本の新聞広告が目にとまった。むろん私には、未知の著者名であった。私は、年来的コトワザ教育への関心から、その時も、「ひとまず買っておこう」と心決めて家を出た。そして、なぜ本屋で入手しなかったのか思い出せないのだが、予定の研究会の席上で、毎日学生新聞の長谷川孝さんに「贈呈本をあずかってきたよ」と手渡されたのが、なんと、当のその本だったのである。

一読して私は、「あまたの類書の中で、これは確実に傑出している」とすぐに判断でき



た。その後、クラスにお呼びして授業をしてもらったり、学年合同の父母懇談会で講演をお願いしたりもしたのだった。

吉田さん、さようなら

浜中真帆子

あの日、吉田さんが教室に来てくれたこと、思い出します。黒板一面に、元氣君の絵をかいてくれたことや、私たちのかいた「コトワザまんが」にひとつひとつ感想を

言ってくれたことや、お話をしてくれたことを思い出します。教室にくださった元氣

君の絵、そのとなりに「まかぬ種は生えぬ」と書いてあります。吉田さんがなくなつたと聞いて、もう一度、読みなおしました。

何もしなければよい結果は出ないから、やはり何ごととも努力だな、と私は思いました。これからも、このコトワザを聞くたびに、

ほのぼのとした元氣君の顔といっしょに、吉田さんのことを思います。

まかぬ種は生えぬ——色紙に添えて子ども達に贈られたそのコトワザは、おそらく、入魂の労作『学習まんが・ことわざ事典』全5巻（あかね書房）

を成した御自身の実感に支えられている。

商業出版社の企画や依頼とは無縁に、吉田さんはこの仕事を、情況の劣悪が強い不可避の課題として、自らに課した。そして、出版社探しの途上で「無視されたり、冷笑されたり、流行語ならいざしらず、ことわざなんて売れっこないですよ」とあしらわれながらも、「石の上にも四年」、ついに大ヒットとして結実させた。

吉田さんのまいた種は、こうして、肥沃な子ども達の土壌に着実に根を下ろす。

吉田ゆたかさんについて

古賀洋子

吉田さんは、今の子どもたちに、すこしもことわざを知ってほしいから、子どもが楽しんで読めて、使い方もおぼえられるように、マンガで書いたんだなと思えました。それに、「マンガはだめ」と言われている人も、お母さんに見せれば「いい」と言ってくれるかもしれないし、「子どもが楽しみながら勉強していけるかも」ということで、こういう本を作ったのかな、と思います。吉田ゆたかさんは、親の気持ち

子どもの気持ちらがわかっていてマンガにした、と思います。だから、吉田ゆたかさんは、むかしの人のことをしんじていた、とてもいい人だと思いました。

吉田さんは、いわゆるコミック誌やギャグ漫画の路線とは一線を画してきた。その、吉田さんのまき続けたストイックなまでにひたむきな種は、さらに弾け散り、そして風に運ばれて、いくつも、いくつも実を結んでゆく。

ぼくは事典を持っていないけど、日吉南小の図書室に入ったので、いつでも読めます。昼休みに行ってみると、たくさんの人たちが読んでいます。こんなすごい本を残してくれて、ありがとうございます。

と岡村高志君の言うように——。

吉田ゆたかさん、情況の劣悪に飛ばしたあなたの渾身の檄は、正当にも、子ども達がしっかりと受け止めています。

（横浜市立日吉南小学校）

「共に生きる」 その2

児玉 すみ子

カウンセリングの応用とは

「共に生きる」生き方を学ぶことであった。

専門家でもなく、大した素養があるわけでもない私が、カウンセリングの理論・理念を自分流に、実地に応用し続けて、辛うじて体得したものは、目の前にいる若者たちと、いかにしたら、共に生きられるか、ということであった。

カウンセリングに導かれることがなかったら、私は、多分、彼らに振りまわされ、失望し、自分が傷つかぬよう防衛し、教師というおぞましい仕事をのろいながら、我が世界に沈潜する道を選んでいくことであろう。

しかし、カウンセリングを素人なりに、心に打ち込むごとく、ひたすら学んだことが、我が狭き殻を打ち破り、若者たちと共に立ち、共に生きる術を身につけさせてくれたのであった。

一段高いところから、自分の価値観を基準に、若者たちの在り様を、眺め、批判し、嘆き、いらだち、果ては、絶望に至る道から、若者たちの立つ処、即ち、原点に連れもどされたのであった。そこは、

生きんとする生命に溢れたアマルガムの世界であった。

父の不幸を背負うべく運命づけられていたEの、暗く沈んだ表情の奥に、青空の下、白球をかつ飛ばすことへの意欲が、みなぎっていた。夫の病いと死に、くたくたに疲れ果てても尚、生業のため、夜遅くまで働かざるを得ない母への、やさしい心遣いを育んできたEの心には、又、同年輩の女の子たちと気楽に言葉交わし合いたいという年頃の男の子らしい願いが秘められていた。

そして又、Eを取り巻く仲間たちとて、ひとりひとり、固有の生の条件や背景に囲まれ、抗いながら生きていたのであった。彼らは、けっして、Eの悲しみを、その重さで、受けとめられる度量を持つ者たちではなかった。Eのために、野球のチームを作ったわけでもないし、Eの気を引き立てるために、女の子たちが、故意に声をかけたわけでもなかった。

それどころか、若者たちの現実の世界は、大人たちが、こうあれかしと望む理想から、むしろ、かけ離れたものなのである。親しみや睦み合いも確かにあるが、同時に、残酷さや幼稚さが雑然と混じり合った、ぶつかり合い、いがみ合い、疎んじ合いの、くり拉げられる世界なのである。

しかし、そんな、どろどろとしたアマルガムの世界に直面し、それを受け入れ、共に立とうとしてみよう。そこに展開する様々な葛藤や、行き交いに、心開いてみよう。私自身も又、共に生きんとする一つの生命の発露として……。

すると、驚くべきことが見えてくる。

人は、現象的場における交わりの中にこそ、生きるものだということが見えてくる。

早弁を済ませた若者たちは、昼休みのチャイムと共に校庭へ突進する。僅か四、五十分の間に、もう何ヶ月も続いている延長戦をやるわけだ。汗にまみれ、興奮に息切らした熱戦の後の、数学の授業が、見るも無残と化すのは、当然ともいえよう。

この、はやめちな、現象的場の、躍動する生命のほとばしり合いの中で、Eは、ぐんぐんと力を得ていくのであった。一方、数学の授業をめぐる動きの中では、Eの、生活に裏打ちされた実感が、子供っぽさが抜け切らず、突走ることしか考えない仲間たちには、深い影響や感化を与えていくことになる。

私の眼前にあり、私も関わっているこの場は、いかにも矛盾にみちた、玉石混淆の場である。しかし、この世のどこに、理想的な、真実の光がまかり通る場があるというのだろうか。そもそも、誰が、固定した真実を保有しているといえるのだろうか。

現在、置かれたこの場で、相互に、関わり合い、交わり合いつつ、今、ここにおける真実は何かが、問われ、検討され、実現されていくのではないだろうか。

◇ ◇ ◇

しかし、このエピソードは、ここで終わらなかった。

まだ、三十代の半ばであったS先生は、この後しばらくして体の不調を訴え、翌年、あっけなく、癌で亡くなってしまう。

S先生の死が伝わると、先生に対し、もっとも激しく抵抗し、試験ポイコットも辞さぬとしたA（男子生徒）が、私のところに、飛んで来た。

「S先生は、何故、死んじゃったんですか。僕らのせいなんですか。」

死んじゃったら、何の解決にもなりやしないじゃないか！

僕らは、もっと先生と話し合って、納得したかった。本当の仲直りをしたかった」

Aは、握りこぶしで、涙をぬぐいながら、私に迫るように訴えた。「先生の死因は、癌で、あなた方のせいではありません」

と、私はなだめながら、自分の奥深い処で我が罪を感じていた。

若者たちに、何でも思ったこと感じたことを表現する自由を保証してきた私の接し方が、そうした接し方を許容しないS先生に対する反発を、惹き起こしたのであったかもしれない。良かれと思ってしまうことが、思わぬところで思わぬ人を傷つけ、苦しめる。人が為す行為の善悪は、容易に判断できるものではない。知らずして犯す罪の身を思う時、若者たちの眼にさらされて立つことの怖さを痛感する。

しかし、その怖れゆえに、自己を閉鎖し、頑なに孤独を守ればよいというものではあるまい。

彼らと共に生きようとする姿勢、共に生かされたいという祈りをもって、我を開き、彼らと交わり合うことこそ、寛し、寛される道ではないかと、思っている。

木犀が重く匂う日に

武田 秀夫

木犀の匂いがあたりにただよう曇った秋の日です。なにか美しいことを書きたいと机に頬杖をついてさきから考えています。寝不足気味で頭も重く、なかなか興が湧いてきません。裏手の家の教室に行くのも億劫で、玲子の机でこれを書きはじめていますが、木片をはめこむと鬼の顔になる机の上の玩具のその鬼の目も、今は八の字下がりには憂鬱そうです。濃いコーヒーでも淹れますか。

いまは娘の部屋になっているこの洋間に、四年前私は、四人がけのテーブルにおいて教室をはじめたのです。その最初のころ、なにがいちばん印象的だったかといえ、それは、テーブルの上の子どもたちの顔や手の表情とは全くうらはらな動きをするテーブルの下の子どもたちの足の表情でした。

教師をしていたころの私は、いつも四十人ほどの中学生を相手に、立ったまま、いわば上から見おろすかたちで授業をしていました。そうして教えていた私の目には四十の机の表面とその上に手をのせてこちらを向いている四十人の中学生の上半身しか映りませんでした。いまから思うとそれはモノクロームの画にたいへんよく似

ていました。

ところが六畳ほどの小さな部屋で、テーブルに互いに向きあって坐った小学生たちを横から見る位置に私も椅子をおいて本を読みはじめると、私の目には、テーブルの下でプラインプラインと揺れている足、自分の読む番になったとたんに貧乏ゆすりをはじめ、読んでいる間中それをやめない子ども、その足、足のかかとでゴシゴシともう一方の足の甲をこすりつけていつかなやむことのないその足の動き、そうしたものがどうしても映ってきて、私をなんとも落ち着かない気分にしたのでした。ちよつと、その足なんとかならないのと声をかけなくなってやめたことがなんどもありました。本を読んでいる机の上のからだは平靜に静まっているのに、テーブルの下には別の生き物が棲んでいるかのように子どもたちの足は思い思いの動きをします。テーブルの下に見えない水槽があって、そこにさしこむ屈折した光の縞の中でひらひらと別の生き物がおよいでいるみたいだ、私はそんなふうに思ったりしました。

やがて時がたち、ひとりひとりの子どもたちの輪郭が私の目にはつきりしてくるにつれて、私はこんなふうになるようになってきました。机の下の子どもたちの足の動きは、子どもたちの一見平靜な、あるいは明るい外見の奥にひそむ不安な心、本人も意識していない心の焦燥、深い悩み、劣等感、そうしたものの存在を暗示しているのではないかと。高校生のころ観た「ケイン号の叛乱」という映画の中で、ハンフリー・ボガート扮する異常な艦長は常に鉄の玉を数個、掌の中でカチャカチャカチャカ動かしていました。焦燥に血走ったハンフリー・ボガートの三角の目と、別の生き物のように動く掌の中のやむことのない鉄の小球の不安な響きを私は忘れることが

できません。少し連想が飛躍しすぎたかもしれませんが、実際私は昔みたその映画をそのころよく思い出したものです。

私の教室に通ってくる子どもたちの中には、学校の勉強が苦手で、いわゆる進学塾の授業では無理だと本人も親も考えてここを選んだという子がかなりいます。そしてその子たちの中にはもちろん元氣にあふれた子もいますが、沈みがちな子もいます。その元氣な子も沈みがちな子も勉強に自信のない子は一樣にはじめは手でノートをかくします。あるいは、問題を前にして首をかしげたり考えこんだりしているふうをします。が、その子たちは、実は、問題に手をつける勇氣が出ないでいるのです。うながされて問題にとりかかってみはするが、「へんだな」「これ、ちがうな」とつぶやきながら消しゴムですぐ消してしまいます。ただ問題に手をつけた格好をしているだけなのです。だから私が「どれ、見せてごらん」と近づくと、「やっぱりちがうな」とつぶやいてあわてて消そうとします。「いいから、見せてごらん」とその手を押さえ、そこに書かれた全く無意味な数字や文字をとがめることはせずに、決して皮肉をいわずに私は「これはこういうことだよ」と基礎から教えはじめる。いつもそんなふうにそうした子どもたちとのかかわりははじまるのでした。その私もなれてしまふといふイライラして、「おまえさん、これは先週やったばかりだよ」などと言ってしまい、ああわるいことをしたと後悔するのですが――。

そうした子どもたちをみていると私はいつも、小学校から中学校までの長い年月にわたって、この子たちは毎日毎日教室の中で勉強のできない自分を級友の嘲笑から守ろうとして必死に生きてきたの

だな、つらかっただろうなとつくづく思います。その結果、そうした子どもたちは、数学なら数学それ自体をわかうとする努力よりも、いかにして「ほんとうは全然わかっていない自分」を級友や教師の目から守るか、その悲しいテクニクを習い覚えることに汲々とし疲れはて、固い殻をかぶっていま私の前に坐っているのだと考えていつも傷ましくなります。とても私はその子たちにむかって「知らざるを知らずとなす。これ知るなり」などとお説教をする気にはなれません。自然に、ノートをかくしていた手ははずれ、すぐに消しゴムで消してしまう悲しいくせが消え、「先生、ここがわかりません。教えて下さい」と言えるようになるまで、氣長にそっとしておいてやろうと考えます。その足、なんとかならないのと言えばその時はその常同的な動きは止まるでしょうが、その机の下の足の動きとなつてあらわれている子どもたちの心の底の不安なものがあることによって消え去るわけではないのと同様に、勉強がよくわからなない自分を級友の間でなんとか格好をつけてガードしつづけてきたそのあいだに流した見えない心の血、口をあけた傷は、「勉強ができない」ということを恥ずかしがらずに認めるようにならないかぎり前へ進めないよ」というような、あまりに正しすぎるお説教のことばなどによつてはそうかんたんにいやされないだろう、私はそう思うのです。まだ私の教室の中には「勉強のできない自分」を人に知られる恐怖におびえ、固い殻にこもったままの子がいます。でも休まずに通ってきます。私はその子のひそかな期待に必ずこたえなければと思います。

木犀の花の匂いも、秋の曇り空の下に漂う今日のそれは、少々重く感じられます。

＊学習の主人公たち＊

土をどう思う

千葉県立薬園台高校の生徒たち

中島 良子

土は—数学よりも奇なり。なぜなら…。

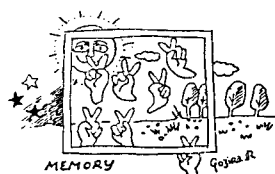
土を0又は数字と考^ぞえてみましょう。それに肥料や種の数字及び四則等の不合を加えます。つまり、成長中の花や実が答えになる訳ですが、数学では0は0です。けれど、土の0は0ではありません。数多くの養分と言う数字等を吸収した0なのです。それに、数学の様に決まりきった答が出る訳でなく、天候や私達の愛情ある接し方で答が変わってきます。すなわち、土とは無限大なのです。それに、答がいくつもある国語でもあり、土にだって歴史はあるので社会とも言えます。—私はこんな事を書いていくけれど勉強が好きではありません。そんな常識的な勉強よりも、土と関わる事は生きて行く上での勉強にもなります。土は生物ですから、こちらが示した

通り植物等を生み出してくれます。

土は大いなる源です。時には優しく時には厳しく、私は土と接すると言う事は生易しい事じゃ無いと分かりました。それに、今まで虫等と接する事が無かったのに接する事が多くなりました。ハ、エやかだって嫌だと思わなくなりました。良く観察すると可愛いと思う様になりました。カ、エルだってそうですし、私達の身の周りにいる嫌われている虫にだって感動する様になりました。—これは私がおかしいからかもしれないが…。

生命の偉大さを教えてくれた土は先生でもあるのです。

—いや、土は何も言わないし教えてくれないかもしれません。その人、その人によって土に教わったりする事は違いうしろし、何も得ない人もいます。けれど、土はいっ



カット・若竹 稔子

も私達に何か語りかけてくれている筈です。

—土は、私にとって母のようでもあり、先生でもあり、友達でもあります。土を思うと私は何だか分からない物が心に浮かんでくるのです…。それ程土に対しての考え方が変わってきました。土は、いつもさりげなく気にもかけない位、身近にいます。でも実は、存在感がとても大きいという事に気づくようになりました。

萩原 裕幸

日本人の自然に対する考え方は驚く程無知である。子供達は野菜というものは工場で作られていると考えているらしい。こういう話を聞いたことがある。ある子供がカブト虫をいじって遊んでいる時に足をひっこぬいてしまった。結局その子供は接着剤で足をくっつけてこれで直ったと言っていたさうである。まったく情けない話だ。日本中の河川はコンクリートで埋め立てられ川としての命を失われつつある。山だって乱伐がたたってはげ山が続出している。これでは二〇年もたないうちに日本は木が一本もない死の国になる。こうならないためには日本人がもっと土に親しみ自然に近づくことだ。土を耕し植物

を作り自然のありがたさを知る。人間は自然の中に入り自然を知れば知るほどやさしくなれる。自然は全てのものを浄化する力も持っている。

雨宮 いづみ

私は、この学校にきて土と触れ合う時が、長くなっただけだと思います。家が農家なので、小さい頃はよく畑で遊んでいました。耕やした畑は、気持ちが良くこの上に座って、土遊びをするのが好きでした。

土は、なくてはならない宝物だと思います。原始時代では、土器などを作っていたし、人類や木などが育っているのも、みんな土のおかげだと思っています。作物を作るにしても、土は大切な物となってきました。この大切な宝物を、忘れてはいけないと思います。

三枝 裕之

僕は小学校の高学年の頃、エビネという植物を探しに友達と一緒にあっちこち行き地エビネを取ってきたり、新宿の京王百貨店のエビネ展へ行ったりして、とにかくエビネが好きでした。そしてこうした理由からこの薬園台高校の園芸科に入りました。入ってから

はエビネ蘭とは少し違うことだが、トウモロコシとか野菜関係をやっていきます。ただしエビネと野菜の共通点はいくつかあると思う。それは科は違いますが植物であることは違いない。つまり水・酸素・温度さえあれば育つことができる。この水・酸素・温度の中になぜ土が入らないと言うと、水苔とかヘゴとかスポンジでも育てることが出来るからである。ようするに今の時代では土がなくても植物はだいたい育つのだらうと思った。土の中に含んでいる成分をそのまま液体にして水苔を使っても、そんなに変わらないと思う。今度エビネを使って土と水苔でどっちが育つかを研究してみたいと思う。

岡村 祐子

土というのは、みじかにあるが今の歳となつては、遠いものになった気がする。小さい頃は、どろんこ遊びなどしたが、今となっては、花を植えたりするぐらいで、あまり触る時がないからだろう。その中で、私達は、学校などで使うため、けっこう触っている。土というのは、洋服、手など汚れるため、触りたくないけど、野菜や花などには、自分を支える大事な物なのだろう。土には、栄養があ

り、野菜や花などに力を貸し、すごいものだと思う。土とは、一生つきあっていかななくては、ならないものだろう。私達人間にとつて、生物にとつても、大切なものだろうと思う。

葛西 大策

土、それは「水・光」と並ぶ、生命の三大要素である。その神秘性は誰もが認める所だろう。種を蒔き水をやる。ただそれだけで花が咲き実が生る。神秘のブラックボックスだ。

物理的に見れば平均六ミクロンの小石、一見無機質に見える「それ」は、しかし、黒い被いをとって見ると脈々と生きている。息を吐いて、食い排泄する。そして、問えば答へてくれる。肥をやり光を水をやり土と対話する。それが農だ。農は連鎖により永久的なエネルギー。土を扱う技だ。人が人として生きる術はこれだ。

（総ては土より出でともに育ち、生き、土に帰る……）

村越 博子

「土」について、なんて深く考えた事はない。「土」というのはごく身近にあり、毎日

踏みしめているからだ。そこで、今改めて考えてみる。

「土」というのがいつの頃からあるのかはわからない。遙かな昔からあるのなら、何らかの役割りがあるんじゃないかと思う。役割り——それぞれが生まれて来たじてんで持っているもの、それは私にはよくわからない。ただ言えるのは、「土」から木が育ち、その木で住む為の家を作っているという事だ。

「土」から生まれる自然と生きている人間は、「土」の存在を忘れてはならないと思う。あるマンガ家の作品に、コンクリートばかりで「土」が全くなく、やがて大気が緑色になり人間の髪が草になった。そして狂ったようにコンクリートの建物を壊し、「土」を見つけた。人間は「土」にふれて草になった。——これはSFだけど、今は、いつかそうならぬ事を望むだけだ。

「土」は様々なものを生み出し、人類といつまでも共存しなければならぬと思う。そして、今の人々はその事を深く刻み込まなければならぬと思う。

菅原 和美
土それは自分たちが住むのに大切な物。自

分たちが住む家の下は土、野菜や花を育てるのも土、今は、水だけで育てたり、人工的に作った土をつかって育てる。野菜とかは、人工的の物でなく、自然のままのほうがいいと思う。たしかに、手を加えたほうが、いい物ができるだろう。それがいいとはいえない。ただ、土がもっている豊かさ、それをこわさないでほしい。

地球をつつむ土、大地は、すべての生命の生みの親、その土の中で仕事をするのは、いいものです。都会のアスファルトジャングルの中にいるより、自分は、田舎のほうがよい。都会の水は、土のよさをどう思っているのだろう。自分が、この園芸校にきたのは、植物が、泥にまみれて働くのが好きだから、入ったのだ。土のことは、うまくいえない。けど人間にとって大切な物のようなきがする。

田中 英和
僕は、今年この学校の園芸科に入学した。入学する前は、園芸科はどういうものかをよく知らなかった。入学して早速、地下足袋をはかされた。今まで九年間学んだ学校にはなかった農業実習というものをやらされて、少し抵抗があったが、毎回毎回やっているうち

に、僕たちは、生きるための当然の事をやっているのに気がついた。みんながこうやって生きているのは、野菜や稲などの作物のためだ。野菜や稲が育っているのは、土のおかげである。土に感謝！

滝口 保幸

今、「土」と問われて答えるとなるとまず「自然」と答えるでしょう。今までなら、グランドだとか庭などと答えたでしょう。でも今、実際にこの学校へ入り土を手に取り作物をそだててみて土は農業にいや人々の生活と切っても切れない関係があると思う。今、日本の土地を見ると都会では土にかわりコンクリートやアスファルト、一方農地は、薬品に犯されている。これからの日本に住む我々の課題は、自然の土を取りもどすことである。都会では今残っている土をコンクリートなどで覆わず、その自然の姿をとどめ、農地の方は大変だと思ふけれど薬品など使わず人の手、自然の力で少しずつ犯された土地を元に戻していかなければならないと思う。

布施 律子
土の第一印象……いくら考えても想い出せ

ない。土とは、物心つかないうちに、いつのまにか知り合ったのだ。おそらく土とのつき合いは誰もが一生続いて行くものだろう。そのような土を大半の人は「汚い」と言う。例

えば幼児が土に触ると、決まって母親は「汚いでしょ。手を洗って来なさい」と。たしかに土は汚いと思う。手から口に入った場合、体に異常が起るかも知れない。服についたら洗濯をしなくてはならない。その他、部屋

がよごれる……など。でも私はこう思う。土と直接肌で触れ、体で土を感じる。これがやはり最高な土との関係だと思う。私はどちらかというと、土という物について全くと言っていい程無知だ。だからこそ、少しでも多く土の事を知りたい。なぜなら、私たち人類よりも、遙かに長い歴史を持つ「先輩」兼「友人」兼「親」のような存在に感じるからだ。

リンカーン

「土をどう思う？」

いきなり聞かれても、直ぐには、答えられないだろう。

少し考えてから「どこにでも有る物」などと答える人が多いんじゃないだろうか。

その、どこにでもある土が、人間にとって

は、とても重要なものではないだろうか？

その理由としては、なんといっても、作物が作れなくなる。

作物を作る時に、土と肥料をよく混ぜ、そして、種を蒔いたり、苗を植えたりして、水を撒く。

こういった時に、やっぱり土は必要な物である。

農家の人に、「土を使わずに作物を作って」と言っても、ほとんどの人が出来ないだろう。

人間が生きて行くために、必要な食物、その食物を作るためには、土が必要だ。

だから、人間に一番ではなくても、とても必要なものだと思う。

斎藤 雄一

僕の家は昔から農業を営んできた。つまり、幼い頃から土と戯れていた。そのため土

については特に考えたことはないが、土はとても素晴らしいと思う。土に植物が生えて、酸素を人間や動物に提供してくれる。それ以外にも、人間の食料となる穀物、野菜なども土で育つことができる。

僕は今、家を継ぐために園芸科に入っている。しかし野菜を栽培するには、ただ種を土

に蒔けば、育つわけではなくそれなりに手入れも必要で、手を抜けばそれなりの結果が出るわけだから、売れるような物を作るとなるとかなりの手入れをすることになるわけだから農家はとても大変だということをあらためて知った。

最後に、土はとても素晴らしい物だからアスファルトやコンクリートよりも土を大切にすべきではないかと思う。

山田 友子

土は、大事な物だと書きたいところだが、今ひとつ大事な物なんだなあと思うことはない。

土がごく身近な所にあるから、土の上を歩くのも当たり前だし、風景の中に土があるのも当たり前だという気がする。

コンクリートだらけになって、土を見るのがめずらしくなったら、初めて大事な物だと思いかもしれない。

人間も土も

生きることを願って

黒部 澄子

一九四九年生れの私には、高度経済成長前の貧しいが豊かな農村での暮らしと、使い捨て全盛の都市での慌ただしく緊張した日々とが同居している。一九五〇年代の農村は、静かなたたずまいの中に悠久の時の流れを携えて、ずっしりとした重みがあった。祖先たちが、育んできた暮らしの知恵や感性が脈打つ中での日々を、物の洪水の中にいる子供たちに伝えていかなければならないと思っている。私の暮らした農村では、稲作を中心に、自家用の畑と家畜といった小規模有畜複合の農業が、おこなわれていた。日常は自給自足で、物の後先がよく見えた。季節には、めりはりがあった、土と水と太陽の循環の中で、すべてが関係性を保って息づいているように思えた。

高度経済成長やその後の減反政策は、農村の風景を一変させた。誘置された工場へは、農閑期だけの賃金労働が恒常化

し、自給自足の暮らしから消費する生活に移行して行った。省力化・合理化を旗印に、生産力拡大の工業の論理は、農業にも適用された。農薬・化学肥料・除草剤一辺倒の化学農業は、土を死なせ、連作障害に拍車をかける結果となり、悪循環の繰りかえしの中、農薬による中毒や死亡事故もあい次いで起こってきた。又、食糧の赤字べらしのため強制執行された減反は、稲作に対する誇りと自信を農村から失わせ、ゆるやかな人間関係にも亀裂を請じさせることになっていった。一方大量生産による大量消費は、価格の低下を表面的理由に、「食べ手より作り手」の利益を無制限に拡大し、国は、この一連の無謀を末確認のまま、四百種近くの食品添加物を野放し状態にして、企業保護にのり出していく。都市住民の生活は、賃金労働者によって支えられ、消費する一方の日常は、より利便性を求める方向に走ってしまっている。換金性の高いもののみが、価値を認められ、食や暮らしに関わる仕事、動植物の生長を助ける農作業は、経済的価値の低い労働として優劣をつけられたまま、資本主義社会の中で、据え置かれている。

明治維新からの念願であった欧米並みの豊かさが、富国強兵であったように、戦後の日本も工業立国を柱として、この

豊かさの実現を目ざしたのである。それは、経済侵略とも呼ばれる強引なやり方で、アジアの人々を踏み台にして、ようやく手に入れたものなのである。日本の農業は、工業製品の輸出とひきかえに小麦や穀物の過度な輸入を繰り返した。そのため余剰穀物の処理に困り、畜産の振興をはかった。戦後の、米不足から代用食として広まったパンは、こうして卵・牛乳・肉と一緒に、食の欧米化を普及させて行なった。この間、「米を食べるとバカになる」「卵・牛乳・肉の消費量が、文化国家のバロメーター」という言葉が、学者の口をかりて、町から村へと浸透して行なった。乳の文化を持たない日本人の舌は、次第にもどき牛乳に慣され、極度に工業化した畜産は、生きものとしては、通用しない飼いで、食肉とは言い難いものを、市場に出すようになって行なった。成人病、原因不明の病氣、小児ガン、奇形、死・流産も多く見られるようになった。

これらは、個人の問題というより、社会の問題として、その原因は、早急に究明されなければならないものであつて、単なる医療施設の拡充や、医療費補助で解決のはかれるものではないように思う。私は、アトピー性皮膚炎という原因不明の皮膚病をもつ子供の親として、薬物療法に限界と矛盾を感じて食事療法に切りかえた。そのなかから見えて来たことは、今までの近代栄養学に基づく高カロリー・高タンパクの食

事ではなく、米を主食に、野菜・豆・海藻・小魚を中心にした、日本の風土がつくり出した伝統食というものが、一番理にかなった食であることと、まわり道の果てに気づかされたのである。同時に日本では、パン・卵・牛乳・肉の組み合わせは、工業の生産力拡大の為の帳尻合わせに利用されたのであつて、欧米の豊かさは、自国の伝統に対する保守性であつたということを確認したわけである。

今、全国的な規模で、土と水と太陽の循環を基とした、農業本来の農が、広がりを見せている。工業生産力拡大は、人間と土をも含めた、すべての生態系を変え、いのちと健康への侵害を繰り返す。病氣になったり死ぬのは、少数派で、全体としてはものの数ではない、どうなってもよいという水俣病での国やチソの態度は、生産力拡大論が持つ切り捨て差別の思想が、背景になっている。暮らしや動植物の生長を助ける労働が、差別思想を持つ労働の下に差別されてある事実が、教育の場や社会での序列化を推進し、人々の分断に寄与してきているのである。生産力拡大論は、その生産拡大を唯一の目的とするがゆえに、労働の場で、生活の場で、役割の分担を強要する蓋然性をも合わせ持つわけである。国側の生産力拡大論は、差別と分断と搾取であり、小規模農的共生を目ざす解放された人々は、平等と連帯と搾取のない世界を目ざしている。

平等とは、農の世に見られる、特殊性を肯定することを中心としたものであって、「産む性」を持つがゆえに、それを保護という名で、差別し切り捨てて生産力拡大論者の言う平等を、意味しているわけではない。暮らしを、命をも管理する国という強者の前ではなされるがままに、身を投げ出しているわけにはいかない。法と力を楯として、遠慮会釈なく切り捨てての国の横暴を見すごすことは、今以上の辛酸をなめさせられることを覚悟の上でなければならぬ。生産力拡大によつて、もたらされたさまざまな公害は、私たちに循環性のない、無機的な暮らしを問い直すことを迫っている。それは、あくまでも小規模農の共生を主軸として、農村の暮らしの延長線上に都市の生活を置き、強者による支配から身を守る

発言

重い夏

和田 廣治
和田 美智子

今年の夏は、天気でも暑い日が続き、雨もほとんど降らなかったため、人間だけでなく、畑の野菜たちにとっても、大

ることの必要を説いている。

私が、地域で、細々とやっていることは、都市と農村の小規模農の共生への道を目ざした仲間づくりであり、そのために、まず生産力拡大に基づいた、今の暮らしを問い直す手段としての野菜や粉石けん売りである。冬に、トマトやキュウリを食べる暮らしは、合成洗剤を使いつつ、ハンドクリームを押しつけられる矛盾を見えにくくしている。事実を明確にすることが、今、求められている。暮らしを、土を水、人を取りもどすための道は、すぐ目の前にあるように思えてならない。農、本来の農業を目ざす人々と、都市生活者との連帯によつて。

発言

変な夏だったようです。国内外の情勢を見ても、日航機事故や毒ワイン事件、中曽根首相の靖国神社公式参拝、防衛費1%枠問題……。私たちの生活や今後の状況を大きく左右する事件や問題が相次いで起きています。うっかりしていると、それらの抱えている重大さに慣れっこになってしまい、見過ごしてしまいそうです。

さて、我が家にとっても今年の夏は、暑く・重く・長い夏でした。

七月二十九日am十一時二十三分、二男・啓生^{ひろき}誕生

美智子のお腹がだんだん大きくなる中、私や子供たちも生まれてくる赤ちゃんを楽しみに……と言いたいのですが、下の娘、民恵のように多少心配しながら「民恵のこと、かまってくれないんだもん」、出産予定日を待っていました。予定日は八月二十日でした。

七月二十八日。朝からよい天気。夕方から宿直で出勤する廣治は、少しでも寝ていたいところでしたが、美智子は「きようは畳を干します」と宣言。ドタバタとしながら、実に三年ぶりに畳を干しました。

何とか家の中に畳を入れ、廣治は夕方出勤。

翌二十九日も朝から晴天。と、美智子から職場の廣治へTEL。「どうも産まれそうなの……」。

今回こそは自宅で産もうと、助産婦さんにも依頼していたが、何とか来てくれて、出産が始まりました。子供たちが氣にして騒ぐため、廣治が子供たちを連れて二階へ行ったあとすぐに産まれました。助産婦さんが到着して二時間程で、美智子も準備を整え、スムーズな自宅出産でした。子供たちも大喜び。ところが……

体重は二四一〇グラム……

少し体重が少ないことが気になりましたが、長女の友実も

二五五〇グラムだったし、大丈夫だろうということで、家で育てることにし、夕方には助産婦さんも帰られました。

子供たちの協力で急いで作ったベビーベッドに寝ている赤ちゃんを、少しでも近くで見ようと、子供はベッドに顔をつけたり、手などをさわったり。やきもちをやくだろうと心配していた民恵の方が、「赤ちゃん、赤ちゃん」と大はしゃぎ。家事一切は廣治が行いました。たいしてうまくない食事でも、子供たちはガマンして食べてくれました。

夜中になって、赤ちゃんに湯ざましを少し飲ませたり、オシメなどを点検したり……。それらは全て、予定通りのことであり、四人目ということの慣れもあって、廣治ひとりでもれました。でも、気になることがいくつかありました。「泣き声が弱い」「体が何となく固い」「表情が固い」等々。

七月三十日になると美智子も体が回復し始めました。でも赤ちゃんはあいかわらず。子供たちは赤ちゃんのベッドに人形を置いたり、折り紙を置いたり、彼らなりのかわいがり方です。

美智子が母乳を飲ませようとするが、うまく飲めない感じでした。何となく元氣もなく、二晩目が過ぎました。

七月三十一日。朝、助産婦さんに連絡し十時半頃到着。

美智子が母乳を飲ませていた十一時すぎに、突然全身にチアノーゼが起き、救急車で富山医科薬科大学病院へ運びまし

た。我が家から病院までは、普通なら車で十五分程の距離。救急車では十分程で着いたと思いますが、ほんとうに長く感じられました。

富山県内の病院で、新生児集中治療室（NICU）があるのは、ほんのわずか。そのわずかなNICUに入院ということは、まだ幸せな方でした。

廊下の窓から保育器に入った赤ちゃんを見ながら、民恵が「赤ちゃんかわいそう。うちへ帰ろう」と言って泣いた時、「イタイイタイ治ったらね」としか説明できませんでした。

祈る思いで病院をあとにし、翌八月一日も過ぎてゆき、八月二日になりました。

『啓生』の意味は？

はじめのうち私たちは、名前をゆっくり考えるつもりでいました。でも、緊急入院という事態になったことから、集中的に討論しました。

美智子はどうしても「啓」をつけたいと主張しました。嫌煙権訴訟原告団長の福田緑さんと夫・三津夫さんの長男・啓君の名を取って発刊されている個人通信『啓』を読み、美智子は以前からその名前が気に入っていたようです。「生」は私がどうしてもつけたいと思いました。今にも死にそうなのが子の名前を考えると、やはり生きてほしいという気持ち

が頭をよぎりました。

でも次の瞬間、私は頭をガンとなぐられた思いになりました。「私たちは人間の生命ばかり考えているけど、人間は他の生き物たち、植物・微生物などに支えられて生きている。『生命』はそれらすべてにつながるものだ……」。

こうして決まった「啓生」は、我々の赤ちゃんの生命につながるすべての生命を見通す眼、世界をひらく存在になって欲しいという願いが込められています。八月二日の朝、日の出頃でした。

写真とらなきや

啓生が入院したあとになって、写真を一枚も撮っていないかっただことに気がつきました。友実のときは生後三日目、真悟は二日目、民恵は一カ月後。そして四人目の啓生も写さなきや……。

啓生は明らかに友実や民恵の顔に似ていました。つまり父親似ということですが、よく似た顔が四つ並んで写真が撮れたらよかったのに……と思います。

我が家にあるカメラは、二〇年前から使っている「オリンパスペン・D」。カメラ屋も驚いた程の長生きです。

八月二日の朝九時すぎ、容体急変の連絡で病院にかけつけ、はじめてNICU内に入りました。帽子・マスク・白衣を着

て、啓生が懸命に生きている姿を保育器のそばで見つめました。医師から「あと数時間」と言われ、用意したカメラで写し始めました。でも、フラインダーの中が揺れてなかなか写せず、ようやく意を決して写し始めました。いろんな角度から写しましたが、結局まともに焦点のあった写真は三十五枚のうちわずか二、三枚だけ。フィルムをすべて使い切った時、カメラをにぎりしめたまま、動くことができませんでした。「もう写せない……」。

生と死という『縁』／啓生の死

「あと数時間」と宣告され、保育器の中に生きている啓生を見つめました。チューブを口にくわえ、呼吸も心臓も機械によつてようやく生きている痛痛しい姿。ふと「安楽死」という言葉が頭に浮かびました。そして思いました。

「機械によつてでも、とにかく生きているのに、なぜ安楽死など考えるのか。人間の尊厳と言うが、どんな障害があろうが病気だろうが、一所懸命に生きることこそが大切ではないか。一分でも一秒でも長く生きてほしい」。

そう考えたとき、「機械を止めるとすぐに心臓も止まります」という医師に対して、「可能な限り続けて下さい」と頭を下げていました。

しかし、ついに時が来てしまいました。

八月二日 午後一時五分 死亡

機械でも、薬でも、啓生の生をつなぎ止めることはできなかったのです。保育器の中の啓生はもう身動きひとつせず横たわり、心電図なども直線を引くだけ。おだやかな顔でした。死因は直接には呼吸不全だが、出産時に頭蓋内出血を起し、それが全身に影響を及ぼしたということが、死後の病理解剖でわかりました。そして、それは仮にどんなに設備の整った病院で出産したとしても、同じ経過をたどっただろうとのことでした。それなら、せめて二晩でも自宅で私たちや子供たちと一緒に過ごせただけでも、よかったと思います。わずか五日間という短い人生しか持ち合わせずに生まれてきた啓生。しかしその短い人生を通して、私たちに対してきわめて大きなことを教え、また課題を与えてくれた啓生の存在を、今後私自身が乗り越えることができるでしょうか。おそらく彼の問いかけを、私は私が死ぬまで、自分に問い続けたいと思います。

一応浄土真宗の葬儀をあげましたが、私の実家のお寺の住職でこれまでもつきあいのある人をお願いして、心のこもったものができたと思っています。

「赤ちゃんの死は確かに悲しい事だが、生・死や出会い・別れは、いずれも縁である」。

啓生から見えてきた生命という、生きとし生ける者すべて

のつながりを大切にすること。それは、私たちのこれまでの「健やかな生命を子や孫に伝える」活動の幅を、さらに広げることです。生かしてゆきたいと思います。

いのちを尊重する社会を！

この夏、日本中を駆けめぐった問題を、いのちの観点から捉えてみます。まず日航機事故は、生命安全よりも経営優先の企業及び政府に責任があることは明白です。毒ワイン問題で特に「国産」ウソつきワインは、一社だけの問題ではなく、ウイスキー、ビールをはじめ、様々な食品についても言えます。いずれも生命や安全性よりも、利潤至上主義の企業とそれを助長する政府に責任があります。

そして、絶対許せないのが中曽根首相及び自民党政府です。ついに靖国神社公式参拝を強行しました。「靖国」を天皇制のシンボルとしてアジア諸国を侵略し、多数の生命を奪い、苦難を強いたことにフタをして、今再び軍国主義をめざす動き。「靖国」は「国に命をささげる」人々をつくるためにこそ公式参拝の強行に至ったと言えます。そして防衛費一％枠の撤廃問題は、人殺しのための軍備を限りなく増やそうという第一歩です。今まさに国民の生命を犠牲にして、一部の者だけが富を得る社会。絶対にそれらを許してはいけません。



ほんとうに悲しい夏でした。でも残された五人は元気です。民恵も三歳。外で仕事したいなーと思ったり……。どこかに畑を借りて百姓になろうなどと思ったり。さしあたり今年こそちゃんと蒔いた白菜と、太った大根を収穫したい。出産前に一度草ひきただけのさつまいもが草の中で大きくなりました。あとしばらくでこの畑も埋められ、道路ができます。早目にイモほりをしなくては……。でもこの土の中のミミズやオケラはどうなるのかな。ビニール袋に土を入れて自転車で家まで運んでみたけれど、労力の割には、はかどらない仕事、天気も悪く、あきらめました。

生命の重さということが何かにつけ思われます。啓生のおきみやげです。イモ畑のすみには、ピンクのコスモスがゆれています。

美智子

長い夏でした。でも私たちは立ち止まるのではなく、前進するのみです。生命ということを教えてくれた啓生に親として、またひとりの人間として恥ずかしい生き方をしたい。これからも頑張ります。皆さんよろしく

廣治

(「ほのぼの通信」より)

これが人間を生かす

道だろうか

——親・学校は子どもに何をしたか——

和 気 昭

一、はじめに

現在中三のむすこが六年前から登校拒否をするようになってからは、誰にも理解されず、苦しみ、悩んだ日々であった。それは長いトンネルの内をただ歩いているのと似た状態とでもいうような、気持は暗くなるばかりで、光を求め、出口はどこにあるのかわからぬまま右に左にと揺れながら、しかも子どもとは考え方も気持も別行動であった。昨年暮れから私たちと子どもとは心が一致することが出来たのだが（それまでの経過は略します）、はっきり言えば、登校拒否をしてくれたことで、現在の学校、医療行政、家庭とのかかわり方、それに警察・地域社会の差別観が、どこかで一本の線になっているのと思うようになった。登校拒否をしている

子どもの首を真綿でしめているような社会状況を、より多くの方に考えてもらいたい。

二、登校拒否児になぜ「宿泊治療」をするのか

A、教育という名のもとでの子どもいじめ

文部・厚生両省は、登校拒否をしている児童を情緒障害児と決めつけて、その指導を学校に指示しており、すでに多くの公立学校が、カウンセリングを始めている。文部省では「生徒指導資料」七、八集で例を引きながら説明している。クラスにこのような子どもがいると、担任はカウンセラーの指導を受けながら、その親に会い、何とか初期のうちに治そうとする。そして子どもの気持を聞きたいとか、あるいは理解しようとする（受容指導）。歳月がたつにつれ、迎えに行ったり、どんな手段や方法を使っても、激しい調子で登校させるようにながす（強制的な指導）。二、三年過ぎるともう学校ではどうしようもないと言って、教育委員会（指導室、区・市教育センター）に行き、病院で診てもらおうように親に説得する。即ち他の機関にゲタを預ける（教育指導の放棄）方向に豹変する。私たちの場合も、病院へ行き、診断書を提出せよと強く求められた。

しかし、小学校高学年以上に子どもが進級・進学すると、最後の切り札として、怠けから来る非行の始まりで心の悩みが根深いから専門機関（精神科、子どもだけの施設）で診てもらえ、長くかかってもしかたがない、根治するのが必要で、このまま休むと卒業させないと言う（入所院の強要）。そして学校は一生懸命色々指導・指示をしたから責任はない。あとは本人と親に責任があると申し渡すのである。ついに親は困りはて、子どもとの生活を諦め、他人に預け、なんとか直してもらうことを決心する。だが、そのことは親としての責任放棄なのだ。

B、個人の施設ならだめだが、公共施設ならいいのか

例えば三年前に世間に注目され、マスコミに登場した戸塚ヨットスクールの事件。校長・コーチによる暴力・殺人・傷害事件（裁判中）や、つい先頃の静岡県のお祥庵での寮生間のリンチ殺人事件。やりきれない思いで、テレビ、新聞を見たのは私一人ではないだろう。それでも尚、親は子どもをだまし、入所させている。しかも施設の責任者に共通している言葉は、国がやらないから、私が親から預ったこれら情緒障害児（登校拒否を含む）を治しているのだ！ どこが悪い、である。人助けをしているのに、との考えに立っているのである。

情緒障害児短期治療施設（以下「情短施設」とする）は、

すでに全国に十一ヶ所在り、古いところでは、一九六二年に三ヶ所も設置されている。それなりの成果があったのか、数年後には八ヶ所も出来てしまった。こんど東京都でも始めるということで、私たちは反対行動をしている。

耳慣れない情緒障害児という言葉について少し書くと、児童の精神障害の一つとして、教育福祉の分野でしばしば用いられているが、一定した概念規定はなく、さまざまな用い方をされている。大別して、①なんらかの心因（情緒因）に基づく障害とみる。②原因は問わず、現れてきた症状がなんらかの情緒面で問題がある、と記し、実によくわからない説明がされている。現れ方は四分類され、(a)心身症・嘔吐、下痢、呼吸困難、喘息、頭痛など (b)神経性習癖・指しゃぶり、爪かみ、どもり、夜尿、チック、偏食、拒食など (c)非社会的問題行動・登校拒否、かん黙、引つ込み思案、孤立（孤独）集団に入れない、内気、小心心など (d)反社会的問題行動・落ち着きがない（多動）金品持ち出し、怠学、反抗、口答え、うそなど、となっており、その他専門家の本には、わがまま、自己中心、おくびようを加えている人もいる。

これだけ拡大解釈されると、子どもはもろんのこと、我々大人でも一つや二つ該当するのではないだろうか。公共施設に入所させるには前述のことが条件となっている。しかも東京都では、情短施設として考えている児童センターは、児

童福祉法の範囲を越えてないと言うのだが、はたしてそうなのだろうか。前記の法では第四十三条の五では、軽度の情緒障害を有するおおむね十二歳未満の児童を、短期間、収容し、又は保護者のもとから通わせて、その情緒障害を治すことを目的とする施設、と定めているが、東京都ではどうだろうか。

C、親は子どもに何をしているか

現行の都児童センターでは現在十六名近く子どもが入所しているらしいが、その部屋には監視窓が付けられ、日夜職員などに見られているのである（「生活と自治」八月一日号八頁）。子どもたちの年齢は、十三歳以上が多く入っているということで、思春期児童を対象としているようだが、これは、法に違反しているし、しかも外出泊も子どもによつては必ずしも自由ではなく、社会から隔離、閉鎖されているのである。子どもの人権を無視していると言わざるを得ないし、絶対に許されるものではない。

私は十日程前、職労民生支部の責任者に、電話でたずねた。法に違反していること、子どもにどんな治療及び指導をしているのか、医者が決めているにもせよ、子どもの状態によつてちがうのではないかと。ところが監視窓について、なぜ取り付けたかの釈明はなかったのである。

民間の施設は費用が高くつくし、職員・療生などによる暴

力も心配だ。戸塚ヨットスクールのように、殺されるかもしれない。公共施設なら費用も安からうし、第一安心であり、人に聞かれても学校が認めている所だからいいだろう、との親の思いがある。しかし、こんな親の考え方や行動は、子どものためにはならず、かえつて親と子の心を分断する。親子の信頼関係の回復が困難になる。どの子どもでも、登校拒否をしているのを治してもらおうと考えてはならず、施設でやる治療に期待してはならないと思う。むしろ治してもらうのは、そのような公営民営の施設に子どもを入れる親であり、それをすすめる学校である。

三、子どもたちにきらわれる学校

友達や、先生からいじめられる子、給食の時間、好き嫌いで先生から叱られたり、長欠しがちな子どもがいると、この子は体が弱いから一緒に遊んではいけないとクラスの子どもたちに言い、子どもたちから切り離している無責任かつ子どもへの気持を逆なでする先生がいる。私の子どもはこの二点が原因だった。障害児と言われる子どもに対する先生たちの偏見と差別の眼なり姿勢が、子どもたちに伝わり、いじめが始まっているのが昨今増えているとも聞いている。

学校に行きたいが、どうしても行けない。行けない子もそれなりにすごく学校にこだわっている。親・学校は、子

どもが苦しんでいるのかかわらず、怠けているとか、みんなが我慢して行っているのに、こらえようがないと子どもを叱っている。しかし子どもにとって、今行けない、行かないと言う行為は抵抗の表現ではないのか。

また学習権は子どもに属するものであり、それを親・学校は認めるべきと考える。いくら学校に行かせようとしても、子どもが嫌っているということは、学校自体に問題を提起しているのだと、先生たちは考えてほしい。家庭に帰りたくないとか親の顔も見たくないという子どもがいるなら、家庭・親に問題があるだろう。子どもが学校に行かない・行かないというのは、学校に問題があると思う。どの子どももそれぞれ、素晴らしい個性を持っているのに、現在の親と学校は、その多様な可能性の芽を摘んでいるのである。

集団の中に入り、画一化、均質化させられていく子どもたちも、行きたくない、行っても面白くない、勉強がよくわからないなど言いながらも、学校に行くしかない。行かないとダメな人間になると決めているようだ。ここまで子どもを追い込んでいるのは、やはり学歴至上主義、資格がないとだめとの社会通念である。特に男の子には、学歴こそが男の勳章だとか、人格形成の証だとか親が思っているのである。そのような考えが子どもはたまらないのではないか。今の親は、自分自身子どもの時代はどうだったか。喜んで学校へ行った

日がどれ位あったか。一度考えてみたら、と思う。

四、私たちと会の周りでは

私たちは「情短施設」に子どもを入所させない、入所していたら出すようにと親に呼びかけている。学校には、親に進めるな、内申書・指導要録に記入するな、との動きをしている。指導要録は、全生徒対象に記載されるが、特に問題行動した子どもは不利でありそれが二〇年間当該学校に保存されるのである。都へ陳情書と署名運動、厚生省へは抗議書と賛同団体名簿を持って行動をしてきたが、お陰様で多くのご協力・ご支援をいただいた。会は、親と子の問題、学校・医療機関にかかわっているので複雑にならざるをえない。学校は、親に「情短施設」へ入れることを強制こそしていないだろうが（私たちの場合は強制入院と考えられそうだ）、親は学校・教育委員会・児童相談所・保健所などからも進められると、つい入れてしまう。早く治してもらうことに走ってしまう。親は、入所したことで子どもがどれだけ不利になるかを考えないのである。

私たちは、登校拒否の問題から今、精神医療と保安処分と言うテーマをかかえている。弁護士・精神科医の先生方との交流がそれなりに出来てはいるが、それぞれの先生の立場は、精神衛生法の改正について完全に対立点があり、私自身

法律・医療についてまるで知らないものだから、周りの人たちに迷惑をかけたり、はらはらさせたりもしている。登校拒否児についてなら、私なりに一つの哲学（おおげさだが）をもっているのです。その範囲で話し合ってきた。厚生省は登校拒否を精神障害三六〇の病名の内に入れていることが、精神障害実態調査であきらかになった。行政側と学校から、治してあげる、しかも短期間（一〜三ヶ月間）で宿泊させて集中的に治療する、と言われたことからどうしても児童福祉法、精神衛生法まで考えなくてはならず、大変な範囲で勉強せざるをえなくなった。実にしんどく、どこまでやれるか不安であるが、やりがいもあると思っている。

五、がんばるしかないね!!

本誌に投稿出来る機会を与えていただき、ありがたいと思っています。子どもの主張・権利をことごとく奪っているのは、親であり大人である以上、言いたいことが言えない子どもに代わってすこしでも叫んであげようと考えている。子をもつ親が、登校拒否の子の追い込まれている実状を知ってくださり、力を貸してくださいれば、子どもたちがどれだけ喜ぶことかと思うのだが。いかがなものだろうか。

（なお、東京都議会では、この問題をようやく取り上げたことを付記する）

（わき・あきら）



編集室から
あなたに

ご期待下さい、5年目のWe

◆Weを愛して下さるあなたへ

この号から巻末に振替用紙を綴じこみます。そう、5年目のWeのご予約をいただくシーズンが始まったのです。編集部の私たちが、郵便の着く都度、一喜一憂する季節になりました。どうぞよろしく願います。

◆5年目の企画は右の通りです。状況によって一部変更もあり得ますが、およそのイメージをつかんでいただきましょう。現在小さい活字の連載も、一まわり大きくして、いっそう読みやすくします。ご期待の上、ぜひ引き続いてご購読下さいませ。お友達、お仲間にもおすすめ下さいますように。小額の切手代用でも結構。

◆5年目のWeの企画

あなたのご投稿待ってます。執筆者リクエストも歓迎。

- 4 幼い日ー大人は忘れてしまった
- 5 子どもー大人の勝手な思い込み
- 6 いじめーその根っこには何が?
- 7 性ー小・中・高校生は何を思う?
- 8・9 親ーいま、学校に何ができる?
- 10 明日ー人はみな、成熟に向かって
- 11 祭ー民衆のエネルギー、その復権
- 12 平和ー今年を顧みる
- 1 女性ー世界を変え得るか
- 2・3 家庭科ー私たちにとって、それは何?

夏増刊 こどもたちへー大人になる旅
冬増刊 '86We フォーラムの記録



◆いつもむずかしいテーマ

に正面から取り組んでおられる編集の皆様の姿勢に、励まされております。夏の増刊号「働き続けるために」

を、やっと今読みおえしました。多くの方々の知恵に、感心させられること、しきりでした。

「三歳までは母親の手で」という考え方は、昔からあったかもしれませんが、今とくに盛んになっているように思います。家庭基盤充

実対策をはじめ、政府からの女(母親)への圧力の根拠になっていくものに、最近次々と明らかにされてきた乳幼児に関する研究結果があるでしょう。研究が進んできたことは、高く評価できます。しかし、それをもとに「それみたことか」といわんばかりに「だから母親は……」と押しつける

ことは、短絡的です。

地域に、昔のような育児力がなく、核家族で孤立している母親たちの状況を考えるとき、さらに都市のサラリーマン家庭の場合、父親が家庭にいる時間が圧倒的に短い条件もあるなら(時間でなく、密度とは思いますが、それにしても不在が多いようです)、母親にのみ育児のすべてを求め、責任を

求めても、よりよい育児が可能かどうか……おさなごを持っている母親なら、すぐにわかっていただけると思います。

保育園は、地域の子育ちセンターであってほしいと思います。福祉施設であるなら、しっかりと地域に根を張り、地域の子どもたちを抱え込むほどの力を備えてほしい(実際に子ども全員を入所させる、ということではない)。

けれど実際の「施設」の姿は、「保育に欠ける家庭」が入所基準です。とりわけ「母親が働かざるを得ない子ども」であり、救済対

策事業という考え方が濃厚です。

ボランティアで、母親が忙しい家庭、市民運動など地域に役立とうとしている母親たちも、最近多いのです。「保育に欠ける」この

子らは、なぜ入所できないのか。ボランティア活動については、「ボランティア」という精神主義を強調して、無償のまま、という状態

には、大きな疑問を感じています。安上がり福祉のお先棒をかつぐ危険性もありますが、これらは別の問題です。読者の皆さんのご意見をうかがいたく思います。そして、ボランティア活動をしてい

る人の子どもについて、受入れの方向性を持つべきだと思います。母親が働くことは、生活に困っている場合には認められて、困らない家庭の場合、なぜ否定的に見られるのか。女が働くことは、ごく自然なことなのに、役割により女の意志よりも、役割の枠が重視されてしまいます。「子どもがかわいそう」という、情に訴えるやり

方での非難は、相当あります。

本当に子どもはかわいそうなのか。かわいそうなら、どのような点がなのか。さらに、解決するために、母親が働かずにベッタリく

ついていたればそれで済むのかどうか。このような観点からの研究がありましたら、ぜひ知りたいと思います。

私の三人の息子たちは、みな保育園育ちです。体力づくりを重視する園で、雨が降らなければ、散歩、散歩。ずいぶん足が強くになりました。また0歳の時の無認可保

育所でのことです。乳母車に三人ぐらゐの子どもたちを乗せて散歩に出たところ、通りすがりに「まあ、かわいそうに……こんな小さいのに預けられて」と言った人があるそうです。その時、先生は心の中で「この子たちは、ちつともかわいそうじゃない。私たちがこんなに一生懸命育てているんだもの」と叫んだそうです。私たち母親は、ずいぶんこの話に励まされ



たものです。

一人の子を何人かの大人たちが手を取り合って育て合うということをもっと評価してよいと思います。

あえて、私は「幼保一元化」を考えます。ただし、幼稚園を文部省の「教育」から「福祉」へ移行する形で、子どもは「教育」よりも「福祉」の中に置くべきであると思います。人間としての全体の発達を考えなくては、子どもは歪むばかりです。

現在、「福祉の見直し」でこの先どうなるのだろうかという暗い気持ちになります。保育園は卒園してしまえば、それでおしまい、という所、ありますが、次の人たちに伝えられることはないかと模索しています。

一人子どもが生まれる度に三年の辛抱を自らに言い

聞かせて、十年近くになりました。三男もようやく二歳半です。自由業という点で、八時半～四時半の保育時間のみで、長時間保育は受けられません。仕事上悩むことがしばしばで、けれど忍耐の日々。三歳児に末息子が入ったら、どなたか預かって下さる人を探して、二重保育を覚悟しています。

(横浜・佐藤葉)

◆十月号、いつもにも増して、一気に読み終えてしまいました。四年間「We」につきあうことで、自身の活動の中で少しずつ、この時代に生まれあわせた幸せや、歴史の中に生きること、が少しずつ感じられるようになりました。十月号は、まさにそんなふうにまとまっていたと思えるのは、私の思い込みかもしれませんが。

三〇歳の私は、まだまだ人生の迷いもあり、自分の事で手一杯という部分があつて、とてもこと歴史の中のひとつの活動をになえてはいませんが、じっくりと歩い

てゆこうと思っています。必ず私の足で立つことがあると信じています。

今日、沖縄県収用委員会から特別送達が届きました。一坪反戦地主に申し込んでありましたので、これが、初めて私個人が法律に對した、ということになります。知らずに生きてきた昔と異なり、たったこの四年間で知れたことの多さに、尻込みする私でもありますが、ある意味で、これが生きるということなのかもしれません。

(市川・横山れいこ)

◆十月号はナイロビ特集ですので女性による、女性のための書店、ここ松香堂でも動いております。新聞紙上で「アレ」っと思つて読んでおりましたチカツプ美恵子さん、吉田和子さんの発表などが掲載されており、Weが運動体としてのミニコミ誌であることが、よくわかるいい内容でした。「参加してよかった、よかった」のナイロビ報告ではない報告、一気に読ませ

ていただきました。

ナイロビ特集に比べて、ささやかな、ちょっとした女性間の違いについて、私は述べています。ナイロビ問題の大きさに比べて、私のは一体何だというようなものかもしませんが、そのちがいがわかつていただけたか、不安です。

(京都・木下明美)

◆十月号、混乱しました。「女性の権利」と「人間の権利」とは、どう違うのか?と考えています。この十年が「部落の女には何もたらさなかった」という箇所がどうしても頭から離れません。チカツプ美恵子さんの文章も…。私の十年をとらえ直すのに、とてもよい教材です。(札幌・広瀬直子)

◆中嶋里美さんへ

十月号発言欄の提案に共鳴しました。Weの読者のネットワーク作りに、大賛成です。私も仲間に入りたいので、ご連絡下さい。

(市川市大野四一三一三四一四 黒部澄子 ☎0473-38-1298)

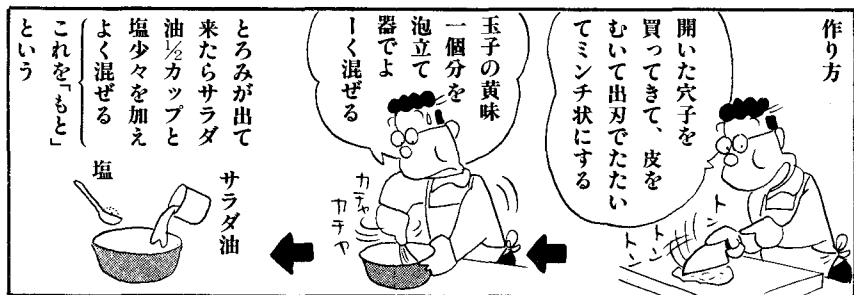
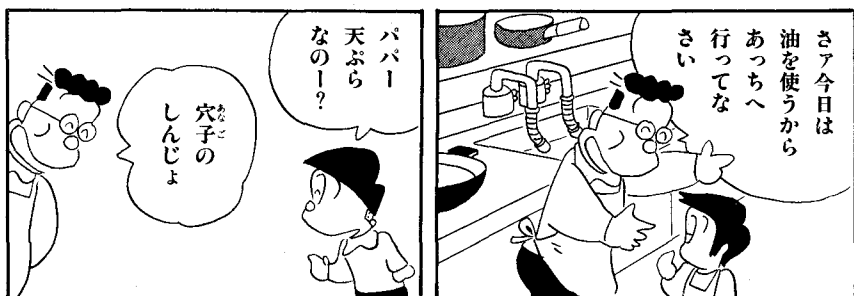
男の台所

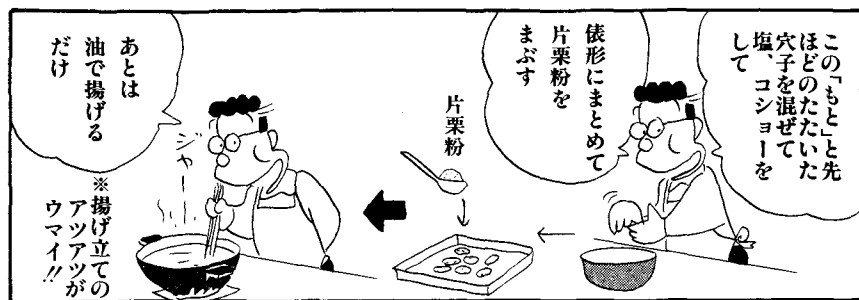
DAI DOKO

☆あなご…夏によくとれる魚だが一年中出回っている。寿司種、天ぶら、蒲焼等によく使われる、大きなものより中振りの方が旨い。兵庫県あたりが名産地。

その8 ^{あなご}穴子のしんじょ

高瀬 育





スパイ防止法の危険性

今年には敗戦後四十年、天皇在位六十年、日米安保条約成立後二十年など、いろいろな意味で節目の年といわれています。

中曽根首相は「戦後政治の総決算」と意気こんで、懸案であった靖国神社公式参拝をやつてのけ、防衛費GNP一％枠をうちやぶるうとしており、国鉄民営化など、いっきよに日本を思いのままにしようとしています。こんな時に突如出されてきたのが「スパイ防止法」です。

スパイ防止法で守られるとする「国家秘密」の範囲は、防衛問題だけではなく、広く「外交」にまでおよんでいます。死刑を含む罰則が盛り込まれているのに、政府の責任ある機関での検討もないまま、議員立法として六月の延長国会に提出されました。

自民党がその気になれば、今秋の国会でも可決が可能だといわれているスパイ防止法案は、「主権在民」を根底からくずすものとして批判されています。

というのは、今までだって「スパイ」を取り締まるものとして、国家公務員法や刑事特別法、電波法、自衛隊法など、十四もの法があるのに、どうしてもこれだけではくれない全ての市民を対象とし、眼や耳をふさいでこうとするのがねらいであるからです。

例えば軍事物資を製造する労働者に秘密の義務を課し、たびたび入港する核積載原潜を市民の目から覆うなど、防衛の質を高めた政府のおもわくが、みごとに貫かれている法案だといわれているのです。基地周辺をカメラを持って歩いていた人とか、リーダー追跡を防ぐ戦闘機の塗料とレンジの塗料が同じことから、塗料分析をしていた人を、取り締りの対象とするなども当然でできます。そして一方では、国会での政府追及などもままならなくなり、軍事・外交にかかわる報道そのものも規制されます。ということは、あらゆる日常会話にも警察の目が光り、市民一人ひとりも口を閉ざし、主権者としての勤労市民の、批判や判断材料が奪われるということです。

このスパイ防止法がねりあげられるそもそ

宮本なおみ

ものきっかけは、一九七八年の「日米防衛協力のための指針（ガイドライン）」にあります。「ガイドライン」は、日本の自衛隊と米軍の、「情報の保全に関しそれぞれ責任を負う」と、日本に対しスパイ防止法の制定を強要していました。

そこに重ねられたのが、地方議会で採択された、「スパイ防止法制定の政府への意見書」の山です。戦後民主主義の躍動期を経過して、以前から開始されている民衆の保守回帰を背景に、活力を失った地方議会は、自民党政権の重要な補完機関となっています。スパイ防止法制定の意見書を出した地方議会が約一五〇〇。この数は優生保護法改悪をめぐって出された賛否両方の意見書の数や、指紋押捺制度をめぐる地方議会の意見書の数を、はるかにこえるものです。

しのびよる治安維持法下時代への足がかり（スパイ防止法）をたち切ることができるのは、ほかならぬ私たちであることを思い知ろうではありませんか！

日が短くなってきた。夕方五時すぎにはもう薄暗い。六時をすぎると、とつぷりと日が暮れたようである。

今年は稲刈が始まってからというものの、晴れ一日、雨二三日。束の間の晴天には、時間を惜しんで作業に精を出した。一心に稲を刈り、ふと顔を上げると、いつのまにか夕闇が迫ってきている。さっきまであんなに明るかったのに、ほんの一瞬でトンと日が落ちてしまう。つるべ落とし、の言葉を思い出す。その稲刈りも、やっと今日で終わった。

稲刈が終わると村の中は活気づく。農協婦人部で、稲作研究会で、老人クラブで、「まあ骨休めに温泉でも行こうてえ」ということになる。

この村へ来た初めての年の秋、婦人部の一泊旅行に参加した。これまでは日帰りだったのが、この年はじめて一晩泊りを計画したとことで、参加者はみなはしゃいでいた。

婦人部のメンバーは二〇代の若妻から五〇

嫁と姑

五十嵐 愛子

代初めぐらいまでの年齢層である。昼すぎの集合でバスに乗り込んだ途端、お菓子や果物が配られた。目的地に着くまでの一時間半余り、みなしやべり、食べ、口は動きっぱなし。宿へ着き、部屋へ入ると、それぞれのバッグから出てくるわ、出てくるわ。野菜の自家製漬物にお茶菓子に果物に……。ええっ、まだ食べるの。驚いている私に幹事さんは言った。「アンタア、今日は誰に気兼ねもしないで、ラクラク食べようてえ」

誰に気兼ねもしないで、の誰とは誰。ああそうなのか。同居している舅・姑にそれだけ気を使って毎日暮らしているのか。農家の嫁の立場の大変さが改めてわかったようで、目頭が熱くなってしまった。「もう腹いっぱい

で夕食食べられないてえ」と屈託なく笑う一人ひとりがいじらしかった。

せつかくこの夜、私はみんなからいろいろな話を聞きたかった。サイフは誰が持っているのか、嫁と姑で家事をどのように分担し

ているのか、また農婦としての抱負なども聞きたかった。

しかし、食べられないと言いながらもペロリと夕食の膳を片づけ、アルコールもたしなみ、カラオケで歌い、星影のワルツでダンスを踊り、笑い合っているうちに夜は更けていった。別の機会である夜集まった時、何かの話から四十代初めの大農家の嫁さんが言ったことが忘れられない。「アンタア、我慢だて。オラなんか子どもが小さかった時、もう嫌だと夜中に上の子を背おい家を出ようと思った。そしたらさ、下の子がバアちゃんと寝ているのを思い出し、連れに行くことはできないし、ああ出て行けないと思ったら、ヘナヘナと玄關に座りこんじまつたて。一度や二度じゃないて」

もめごとの発端は、大体嫁と姑のこと。

私も同居して二年。私が明るくしていれば家族関係がよくいくのは分かっているが、毎日顔を合わせていれば、たまにはおもしろくないこともある。嫁・姑の固定観念には影響されないようにと自戒しているが、このなんだか陰うつな関係を超えたいと思う。もつとネアカなもつと新しい関係を作っていけないものか。今の私の大きな課題の一つである。

教師と教育への懷疑と諦念

——「霞通信」にいたる論理

長谷川公一

「霞通信」は、私にとつても本誌のなかで最も待ち遠しい頁である。先を急ぎがちな文章が多いなかで、悠揚として野太いともいいたくなるような独特の流れ。諦観と自己抑制の美学。感傷に流れず理に走らず、しかもくつきりとしたイメージでことばに託されている真情や情感。ほの暗く浮かびあがってくるひとびとが「心の底にかかえこんでいる不可思議な闇」の存在。塾に通ってくる子どもたちへの驚くべき共鳴と共感の力。私にとつての「霞通信」の独特の魅力はこんな風にでもいえるだろうか。また同時に、毎号思わずにはいられないのは、こういう感性、共感能力の持ち主が、自分を殺さずに学校というシステムと折りあつていくことの奇蹟的な困難さである。

武田秀夫『当世教師廃業事情（このごろのきょうしぎせつてんまつ）』（現代書館、一九八五年、一五〇〇円）は、この数年来の同氏の学校論・教育論を中心に編まれた本であ

り、公立中学校の教師を退職するにいたる氏の論理、内的な「必然の道」を指示している。それは、教育や学校の現状、管理体制への声高な告発ではない。い、ま、公教育のなかで教師であることのかなしみ、自分が自分でなくなつていくような教師自身のアイデンティティの崩壊感覚、そしていつの時代であつてもひとが教師をなりわいとすることの「独特の魔力」へのおそれ、教師と教育への根本的な懷疑と諦念が綴られている。

「やめてよかつたをつくづく思う」という氏の霞国語教室での「僥倖」、氏が願つたような、小人数の教室での「個」としての子どもたちとの対話、「ひとりのかなしみ」への寄りそい、そのありようは、本誌の「霞通信」がもつとも雄弁に物語つていよう。

このような氏の論理と選択、そして現在とを問題提起としてどう受けとめるのか。氏や佐々木賢氏、長谷川孝氏らの学校・教育懷疑論を、たとえば現行の学校制度の枠の

なかで改革をめざそうとする「家庭科の男女共修」論はどう受けとめていくべきだろうか。今後わたしたちがともに考えていきたい問題である。

逆に学校・教育懷疑論については、それが子どもや若者の自己形成にとつての組織的で計画的な指導の意義やオルタナティブをどのように考えているのか。学校と教育への自虐的なまでの懷疑は、〈教育〉のはたしてきた役割についてバランスを欠いているのではないか。

また、武田氏のこの書が、教育への国家的な統制が強まろうとするなかで、誠実であろうとする現場の教師たちにどのような効果をもつことになるのか。ここらある教師の中途退職を誘発することになるのではないかとという懸念。教師をやめることはギリギリの個人的な解決ではあつても、状況総体からみればひとつの喪失にとどまるのではないかという疑問。自然にこれらの疑問が生じてくる。

読者はどのように読まれたらどうか。なお題名が思わせぶりで氏に似つかわしくないケレンを感じると、いかにも「教師ストレス症候群」といつたていのパターン化された表紙カバーが惜しまれる。

テレビに登場する老人

鈴木 みどり

テレビの最大視聴者層といえは何と云って
も老人たち。三世代世帯では、祖父母のため
に二台目のテレビを持つ。一台しかない場合
は、おばあちゃんやおじいちゃんが一日中テ
レビをつけているので、子どもへの影響が心
配と悩んでいる母親もいる。

テレビにこれほど熱心な老人たちなのに、
彼らが画面に登場する機会は非常に少ない。

日常的にテレビの中で目にする老人といえは
「老害」と呼びたい政治家や経済界のリーダ
ー。あるいはニュースや教養番組で医療・福
祉の問題を扱う際、その対象として映し出さ
れる老人たち。これではひどすぎると常々感
じていたが、この数年、遅ればせながら高齢
化社会を反映してか、老人をレギュラー・ゲ
ストや主人公にする番組を企画し始めた。

その一つは昼のトークショー「いただきます
す」(フジTV系、午後一時)。この三〇分番
組は若い男性人気タレントを司会者に、月々
金の毎日、合わせて一五〇歳の高年齢女性二

人をゲストに迎え、視聴者からの主としてセ
ックスや結婚の相談に答える。ゲスト回答者
として登場するのは小森和子、浦辺くめ子、
清川虹子、塩沢トキと、異様な髪型や奇抜な
服装で話題に事欠かない翔んでる「おばあ
ま族」の面々。相談の内容といい、それを面
白おかしく紹介する司会者といい、すべてが
娯楽として企画されているのだが、それで
も、高年齢女性たちが喜々として楽しんでい
る姿は見ていて頼もしく、ほほえましくもあ
る。もともと、彼女たちのアドバイスは意外
なほど古めかし、性別役割分業観の補強に
つながるものが多いから、注意が必要だが。
帯番組でも、真面目に老人の自立と取り組
むものもある。秋から再登場した「おじいさ
んの台所、二年目」だ(TBS系、午後一時
四五分)。八〇歳を過ぎてひとり暮らしを始
めた父に、独身のキャリア・ウーマンの娘が
家事の特訓をする実話のドラマ化。毎回一五
分のミニ・シリーズだが、春に放映されて話

題になり、続編の企画となった。

父(浜村純)は妻に先立たれるまで、家事
らしいことを何もしなかった人。その老人に
料理の仕方から買物、洗たく、掃除など、細
々とした家事の手順を一から教え込み、実行
させなくてはならないのだから、娘(藤田弓
子)は心を鬼にして叱咤激励する他ない。そ
の上、娘は東京、父は名古屋でいつも見張っ
ているわけにもいかない。そこで娘は必要な
ことをすべて紙に書き並べ、それを父の家の
台所、トイレ、浴室と、家中に貼りめぐらす。

こんな娘のやり方は頑固な父の気に入らな
い。親を幼児のように扱うと怒り、それに反
論する娘と、時には取っ組み合いの喧嘩まで
始めてしまう。藤田という浜村という大変な
芸達者で、ボンボンと乱暴な言葉のやり取り
の中にも、娘と父が互いに思いやり、励まし
合う情愛を見事に表現し、心温まる老人自立
ストーリーを創り出している。

肯定的な老人の姿をテレビで見かけるよう
になったといっても、まだ少数派。視聴者と
してのシルバリーエイジの数を思えば、もっと
多様な老人の活躍できる場がテレビにあって
いいはずだ。

* おとなって… * * 真夜中のフソ電話 * * 文・松本のり子
絵・松本 哉



リリー……リリー……
意識のすみっこで電話が聞こえる。しつこい電話だ。
となりの布団を見ると寝た形跡がない。何時だ？ 二時
前。ブスッと電話に出る。
「もしもし……」「……今、市ヶ谷。新宿から、歩いて

哉

きたんだけど、足が痛くて……」「……………」
声の主は、妻たる私にタクシー代を用意して団地の一階までおり
て待っていてほしいのだ。

黙ったままの私。やがて電話は切れた。靴が足に合わなくて、こ
のところ痛がっていたから江東のはずれまで歩き続けるのはかわい
そうだった。だけど腹が立つ。ものすごく腹が立つ。お酒
を飲んで時間を忘れるのはわかる。だけどね、時間を気に
しないで飲むんなら、タクシー代計算に入れといてよ。そ
れでなきゃ、終電に間に合うように帰りなよ。一人で楽し
むんだもん。私なんかあてにしないですよ。

腹を立てながら布団にもぐり込む。だけど、ちゃんとこ
こまで歩けるだろうか。それともうまく寝場所が見つかる
だろうか。オールナイトの映画館に入るお金もないんだろ
うか。翌朝の布団は昨日のままであった。歩くのは無理だっ
たのか。そんなに痛かったのか。大ケガなんかしてなきゃ
いいけど。でも、けいさつからも病院からも連絡がないん
だから、まあ、無事だろう。

息子に話してみた。私のとった処置の味方を作ろうと思
って。しかし、「冷てえなあ」という返事。「だけどさあ、
自分のことの責任をとるってことはね……」と、くどくど
言い、少し丸めこんだ。

ある時、「おかあさんには、どつかで見捨てられちゃう
ってカンジなんだよな」という息子。家族の肩寄せあい
と、個人個人の独立はなかなかむずかしいもの。息子のこ
とばは私の気持の半分しか表していません。

東京と異なつて人さらいも迷い子もないから遠走りも自由だった。屋敷の周りの果実だけでなく、茱萸・山葡萄・桑の実に口の周囲を紫色にし、肉桂の根だけでなく薄の根まで掘つてしゃぶる。万葉人も食べたという茅花の銀色の穂も食べる。どちらもうすらい甘い味がした。また春から夏にかけての小川、めそっこ・めだか・あめんぼ・みずすましなど虫類まで捕えたり逃がしたり、何でも皆が遊び友達だった。遊びほうけて食事にも帰らないほど、野山の自然の中で過ごした。

川や池にもよく落ちた。奇妙に蝶の模様の白緋を着るときまつて落ちた。三つ身は一反で二枚とれるから、同じ物が二枚、だから余計である。実は不思議でも何でもない。その白緋を着るのは暑いころ、お転婆の私がそれを着て蝶のように飛んで歩くのだから、万事条件は備わっている。毎度のこと、帰るまでには生乾きにし、落ちたことなど知らん顔で帰る。が一度琴平様の瓢箪池に落ちて白地の着物が、青みどろで真青に染まり気持が悪くてどうしようもなく、そおと家に帰ったのだが、運悪く見つかり、竹箒を持った祖母に母屋の周りをグルグル追い回された。

「ハハキトクスグ コイ」という電報が私宛

に来たため、新井の祖母か母かと首をひねっている大人の心配をよそに、袂の着物を着て喜んだ私は、久し振りに南紺屋町の家に帰ってきた。ところが義祖母の顔には白い布が被せられ、いくら呼んでも答えてはくれない。私はボトボト大粒の涙を畳の上に落としなが

思えば思われる物語



自然のふところで

丸山光子

ら、蛙に食われた足の傷をほじくった。

田舎ならワアワア手放して泣いたであろう私も、生れた家とは言え大勢のお客の前では、さすがに声を上げ兼ねたと見える。実母が傍によつて来て、「みー坊は包帯が好きだったネ、さあ包帯をして上げよう」と隣の室に連れてつてくれた。時に意地悪はしたけれど真底かわいがつてくれた義祖母、血の繋りはなかったが、幼い日々の中で関わりが深かった

からこそ、お互いに愛情も感じたのであろう、私に相談なくみー坊を田舎にやつてと常に嘆いていたという義祖母、後にも先にも私が死者に対して流した涙はこの時だけだった。

翌日、日暮里の焼場であらうか、田圃の中を、人力車で行ったのを憶えている。焼場の中のことは一切忘れたが、門を出たところに大勢のお狐がいて銭をねだった。その中に一家族のお狐がいて六人分頭数だけやつたのに、背中の赤ん坊の分が入っていないと追いかけてきて、背中の子をゆすり上げて後一銭をもらつて行ったのが、今でも眼に浮かぶ。

数日を東京で過ごして横芝へ帰ってきた。

既に田舎の子になり切っていた私は、友達に對しても何となく劣等感めいたものを感じて、東京に未練はなかった。実のところ東京の家も余り居心地よくなかった。というのはかわいがつてくれた祖母もいないし、五歳下の妹が中心で私の居場所がない感じだった。

田舎に帰つてきて私は、水を得た魚のように腕白さを取りもどして暴れ回り、時には野山の自然の懷に抱かれて静かに雲の色々に見入り、心安らかな楽しい毎日を送った。

注(一) わけがため我が手もすまに春の野に抜ける茅花ぞ召して肥えませ

フウフウフウふうふ

時 代

幸福な人々が、自らの幸福を相対的に確認するためにこそ、不幸な人々が必要なのである。

——メラターデ

障害児教育自主教材編集委員会という所から『どんどん』という絵本が出ている。

この本の画期的な点は、今までの障害児者の描き方が、どれもこれも『肉体的欠陥』に主眼を置いていたのに対し、『どんどん』では障害児者を取り囲む「周りの人々」に注目している点にある。

例えば運動会、障害を持つてっちゃんが参加することでリレー競争に勝てなくなってしまう。そこでてっちゃんを仲間はずれにして、優勝したけれど……という具合である。



文・カット ウツのみや

そこには「君が輝く時」や「典子は今」に見られる「健全者社会に同化できる障害児者だけを感動的に受け入れようとする文化」へのささやかな抵抗がある。

僕はもう三十二になってしまった。

年を取ったなア、と思う時、今まで出会って来た沢山の人々や通り過ぎて行った人々を思い出す。

全国的に介護人口は減りつつあり、自立する障害者も頭打ちである。

僕の所も例外ではなく、ここ数年新しい人と出合いが継続できていない。

政治や社会科学に関心のある学生は、やはり減少しているように思う。

障害者の場合、人間関係が即、物理的介護に直結しているため、これは深刻な問題である。

久しぶりにピラを持って大学を回った。

ううむ、汚ない学生が減ったなあ。

「時給いくらくれるんですか」

おまえなあ、一〇年前なら糾弾だよ。

「お手伝いしてあげたいんですけどオ、とっても忙しくてエ、テニスやってエ……」

要するに二十四時間をどう優先的に配分するかということね。あっそう。

「ボランティア、してます。表彰もされました。老人ホーム行ったりとか、コンサートやったり……え？ 個人の家は行ってません。

仲間と一緒にないと楽しくないし……」

立場の違う人間同士がぶつかり合いながら新しいルールを考え出したり、お互いの違いを認識する「学習の場」としても、「介護」は確かに機能していたはずだった。

この文章の最初に出て来るメラターデという有名な哲学者の思想を知らない人はいないと言われている。彼の名に記憶のない方は名前を逆さまに読むことで確認できるだろう。

いのちのうみをのぞく

▼岩浅農也

『村に生きる子どもたち』

農山漁村文化協会 価九〇〇円

子どもが学習の主人公、とは誰でも言うがでは、そんな授業とは、と問われればたじろぐ。岩浅氏は「私の授業をつくることによって、生きている、やさしい子どもたちと出会い、その無限の可能性に触れたい」と願う。田んぼのしくみと農家の知恵、用水の努力と工夫、などを教材に、農民の知恵を読みとることを楽しみ、農民のエネルギーに打たれながら、子どもたちと共に村の自治の中身を追求していく。本当の知育がここにある。家庭科でもこういう授業ができるはずだ。

抽象的思考の不得意な子は、事実の断片に ついての知識だけを書いている教科書では、ほとんど学習できない。テストの点は低い。しかし、そういう子どもは人の働きのうわま えをはねるような生き方ができないだけで、額に汗して働き、そのことで私たちの社会を ささえる人になることは、必ず可能だ、と。

▼宮崎礼子・大木れい子

『農家の暮らしと生活設計』

家の光協会 価一五〇〇円

農家の主婦の手記・発言に依拠しながらも世界的な視野の広がりを持つ貴重な本。

例えば、・地域重視の学校給食の実現・食物教育を問い直す、と続く項で、現山形大学佐藤慶子講師の都立定時制高校での男女共修の家庭一般の授業を紹介し、生徒たちが「気づく」ことなしに「あすの食生活」を考えることはありえないと述べる。また、差別撤廃条約の条文の中の農村婦人問題と、わが国のそれを結び、さらに一主婦の手記に展望を見出し、次の文で締めくくる。

「嫁の座、女性としての差別の不当性に歯ざしりしながらも、人間として、農民として生きることの基礎それ自身が崩壊させられようとしている現実を、深く、正しく見つめて、日々の生活と営農にこう然と取り組み、奮闘している姿は、農家の婦人と農業に未来ありと確信させるに十分です。」

▼羽生横子

『はたけ』

新宿書房刊 価一三〇〇円

「都市で菜の花をつくるのが、罪悪感をおびてしまうのはなぜなのでしょう 都市に住む人は なぜ菜の花をつくらないのでしょうか つぼみは食べられます はたけで 菜の花は 朝も 昼も 夕もゆれます それを見ていると 大地がとてもしっかりしているのだと 風は 遠いところからくるのだと 花はやさしいのだとわかります」

「安心して暮らしたい」。わたしの行為はそこからはじまりそこに帰る、と書く詩人の詩と日誌と短文より成るしなやかな本。みずみずしい感性のこの人は、同時に郷里、今治市の織田が浜を守る運動家でもある。

▼国民生活センター編

『日本の有機農業運動』

日本経済評論社 価二二〇〇円

農業の現場の混沌と食のあり方をつなぐ新しい質の運動の見取り図として貴重。

彼

サン・セツト

半田 たつ子



ここは、どの駅？ 今日、なんの日？ 「ぎふー、ぎふー」の声にはじかれて降り立ったホームは、森閑と秋日の中に静まり返っていた。改札口を出る。ガランとした駅舎には、だあれもいない。何度となく訪れたこの駅、必ず出迎えて下さった尾藤操先生の温顔がない。よく知っているはずの駅の、このよそよそしさは何？

ああ、こういうことなのだ。尾藤先生を失うということは……。一時間後、私はやっと尾藤先生に会えた。黄色い菊で飾られた遺影で――。尾藤先生はやや横向きで、そのまなざしは遠くに向かって輝き、私に向かってはほほ笑みでは下さらない。優しいのに遠い。こういうことなのか。尾藤先生を失うということは……。

尾藤操先生？ お名前はどこかで聞いたような……というあなた、Weの'84年一月号を読んでほしい。私財をなげうって障害者自立のための「岐阜なずな学園」をつくり、情熱をこめて育ててこられた方だ。Weの出発に際しては、「十年分、二十年分も予約したいけれど、天国へは郵便も届かないだろうから」とおどけて五年分をまとめて申し込まれた。そればかりか、岐阜で百人の読者を募りたいと言わ

れ、百に満たない分は、だれかれに贈呈という形をとって、ご自身で負担された。私にとって、Weにとっての恩人なのだ。

先生の悲願―学園生が、先生や親に先立たれた後も、「なずなファミリー」として、助け合って生活する場を作りたい―が、ようやく実を結んだ。作業棟が増改築され、九月八日、先生の七十三歳の誕生日に、落成のお祝いがあったばかりだった。

昨夏、先生のお誘いで、先生の四十年來の友、児童文学者岸武雄氏らと、石徹白を尋ねた。岸氏の作品「いとしろへの道」の舞台、岐阜と福井の県境の村だ。その楽しい旅で、岸氏から、尾藤先生のご病状がただならぬことを知らされた。岐阜なずな学園の後援会長でもある岸氏は、だから建物よりも先生の健康をと気遣われた。

恐らくは、先生のご病状を知られたからであろう。弟さんのご一家が、財産を処分して資金を作られ、作業棟建設の槌音が響くことになった。先生は喜び勇んで、こまが舞うように、休みなく活動された。その強靱な精神力に、先生を案ずる人の祈りに、天もシャッポを脱いだのかと思った。奇蹟を信じかけていた。

今年に入って、その多忙さに加速度がついた。四月二十一日、尾藤先生の「岐阜日日賞」受賞となずな学園の十五周年を祝う会。九月九・十日、コロボックルの山―古屋分校―訪問とWeの読者会。九月八日、増改築のお祝いの会。尾藤先生からお声がかかれば、何はおいても馳せ参じてきた。しかし、十月十六日の電話は、岸武雄氏から。午後一時四十四分永眠と――奇蹟は遂に起こらなかった。

尾藤先生は、医師が普通なら立っていられるはずがないと言う病状の中で、点滴に通いつつ、可能性の限界に挑んでおられた。このままではダメ。岐阜から離して、仕事を忘れさせ、電話や来客と縁

を切らなくては、と、先生を師とも母とも慕う青森の山田泰子さんが計画を練った。岩手の押切郁さんと相談して、先生を東北旅行に誘い、ゆっくり温泉にでもつかっていたらいいというものだ。

国外・国内旅行とも無縁で、ただただ人のために働いてこられた先生が、ようやくGOのサインを出した。こちらからのおみやげ、あちらからのおみやげ、その手はずも整え、荷物も送り出し、今朝発つというその未明に、七転八倒の腹痛に襲われたのだった。

わずか十三日間の入院生活、当初の苦しみが柔らぐや、先生は、「初めてWeがゆっくり読める」と小学校の実践を書かれた西垣邦子氏に、あれこれと感想を送られたという。さらに亡くなられる前、七日の間に三編の文章を書き遺された。「おふくろの味」と題した一編は、病院食を調理する方の心づかいを謝した味わい深い名文だ。死の前日に書かれた絶筆は、その透徹した心境に憧憬さえ覚える。

山田泰子さんが、私を呼び「先生の病院に持っていかけたハンドバッグの中にあつたのよ」と渡して下さったのは、家庭科の男女共修をすすめる会の最新の会報だった。私が書いた「臨教審と女性民教審」という一文。そのタイトルの「女性民教審」の五文字が万年筆で囲んであった。また、十二月二十二日は今年をふり返る会、ふってご参加をとの案内。その日付も囲んであった。

尾藤先生は、Weのフォーラムにも一度参加したいとよくおっしゃっていた。共修の会にも、十二月末なら元気になれるかしら、行きたいなあと思われたのではないか。さらに、こういう形で、民教審ががんばろうとする私を激励して下さっていたのだ。

山田さんは続いて「とるものもとあえず青森を發つたので、喪服の用意がなかった。尾藤先生の黒い服をお借りしたら、ポケット

に入っていたので、きれいに洗ってアイロンをかけておいた、お棺の中に入れてあげてね」とWeのハンカチーフ手渡された。

告別式の弔辞で、岸武雄氏は、何度か声をつまらせられた。「重態との報でかけつけた私に、尾藤さんは激痛に耐えながら『この腹痛さえ なおれば また 元気に なるのだから 心配しないで』と逆に励ますのだった。まっかな太陽が大海原にストンと落ちるような見事な最期であつた」と。「尾藤さんほど、人間を大切にされた方はない。私心というものが全くない、稀有な方であつた」と。

広島島の病院から不自由な身体を車椅子に委せて馳せた森章二さんをはじめ、車椅子、松葉杖を使う方々をまじえて、四百何十人がお別れを惜しんだ。喪主尾藤正忠氏は、「悲願の作業棟で新しい生活が始まった矢先で、さぞ無念であろう。けれど、ここから姉を送り出せることは、遺族にとって、せめてもの慰め」と言われた。

安らかなお顔のすぐそばに、Weのハンカチーフをそっと添え、あはるほどの花で飾った。ついに小さな骨壺に入ってしまった先生とお別れして、深夜帰宅すれば、今日届いたらしい「教育報道新聞」のトップ記事が「障害者の幸と福祉増進を、創設15周年迎えた岐阜なずな学園」であった。そこに尾藤先生の談話が載っている。

「ほんとうの福祉は、金や物だけでは求められない心のあること、それを胸に実践行動する人間によって創られるもので、自分中心のエゴ的な生き方では学び体得できないことを自ら言いかけせ」と。

太陽はまっかに燃えながら、海原にストンと落ちた。落日に染まる西空のように美しく、輝やかしく、莊嚴な一日だった。

サン・セット。



いま「慈眼院釈尼妙依」と名を変えられた尾藤操氏は、最後のご入院となったベッドで三編の文章を書き遺していらつしやいました。

「病院ベッドへGO」「おふくろの味」「クレバスにかかると橋」です。「クレバスにかかると橋」は、ご逝去の前日に書かれた絶筆です。人間は、このようにも生き得るのだと、その壮絶な死をもって語って下さった尾藤操氏の絶筆を、ご遺族のご了承を得て掲載します。

遺稿

クレバスにかかると橋

尾藤 操

人間の一生には快晴の日もあり、雨の日あり、時には猛吹雪に道を見失うような時もある。

又大地震に暴風、洪水と重なる災害に立ちあがれぬ時もある。

なずな十五年の歩みをふりかえって見ても、そんな時はなかったと言えようことになる。

順調な山のぼりに全員手をとって汗を流し、一步又一步と前進を続けていゝうちは牛歩とは言え、それなりの満足があるが、同じ地

点にストップしたり、後退のやむなきに至つた時には脱落の不安におそわれる。

こんな時、若手の強力に精一杯後押ししてもらつて難所を乗り切つたこともある。

これから先、どんな難所や落石に出あうか、それは予想の上での決意ではあつたが、年と共に齢を重ね、体力の限界を考えると、今迄のような調子には行かないことも、わかり切つたことでもあつた。後統部隊の構成を考えて出発することも、忘れてならないことも言いかせていた。

岐路にさしかかつて数年間、どの道を進むかについて迷ひ続け、あちこち尋ね歩いて「この道をゆけば間違ひない」と教示してくれる所はどこもなく、進路は暗やみである。荆の道を切りひらくということは、道なき道を自ら創り出していくことでもある。

出発した以上、行先を信じて道をつける以外、方法はない。麓からの声援が大きく山にこだまし、無事を祈つてくれていることは何よりも心強い。

しかし、それが大きければ大きいほど、期待に応えねばならぬという責任感も大であり、その不安も手伝う。出発してまだ間がないのに、はじめてクレバスに出あつて思案した。

一つは力とたのむ指導員の突然の退職。

二つ目は突如として「病院ベッドへGO」の神の命令。

次には今ひとり指導員の結婚退職ということも予想せねばならぬ。

ここにどんな橋をかけたなら無事渡り切ることができるだろうか。橋をかけることが不可能なら廻り道をするか、出発点にかえつて

出直すか。

ベッドの上で、いろいろ前進への方途を予想し、肝心の橋となる材を待った。

私はいつも岐路にさしかかると立ちどまって考えながら、四周の動きを見つめる。そして、なるべく人の選ばない道を選ぶ人を見つけて、その人を友として歩むようにしている。このことは、福祉に通ずる道を見つける上で人間行動の真理であるように思えてならぬ。

人間は正直で、自分の不利なことは自然にさけていくようにできているもののようにで（自己保存の欲求ともいえよう）自らをそれに指示され、無意識に行動することが多い。今日も病院を訪れて来た人から、こんな話をきいた。

市民運動会の途中で雨が降り出した。殆どの人は、自分の身を第一に考え、逃げ帰るかどこかで雨をよけるのに懸命だった。責任者であっても、それを忘れて大衆と共に逃げ帰った人もあった。

運動場に使用した道具類が雨さらしとなり、ぬらしてならぬ大事故な機械もあり、数人の者がテントの中へ運ぶのに大変だったと。ところがテントに雨やどりしていた人は手伝うどころか、その場を移ろうとしない。器械や道具をいれるスペースもなく困っている、テントの上になまった雨水が、重さに堪えかねて、ドーンと落ちてきた。上手に逃げた人もあったが、頭からびしょぬれになって腹を立てた人もあった、と。

漫画にかけるような笑話ではあるが、私はその中に人間の真理と行動をかいま見て、その意味で痛快だった。

「人の不幸はおもしろい」と考える人もあり、「気の毒だと思う」人もある。心の中でどう思うか、それは一寸見ただけではわからない

いが「見ぬふりしてさける」という行動をすることが、お互によくあることのように思う。手を出せば不利になるからである。

自分の行動を規定するこの岐路の決意が、大小を問わず福祉社会に通ずる道への一歩一歩の前進だと私は考えている。

「不幸を見捨てておけない心情を育てること」

これは、自分の人づくりの上で忘れてならないとねがい続けているのですが、考え、思うことは容易であつても、自分の行動にまでとなると、なかなかできないものである。

何の計算も、一文の要求もなく、ボランティアとして貴重な労働力や時間、技術を提供して下さっている方々を眺め、私はいつもその心のうちを学ぼうと努力している。

さて、目前にあるクレバスに、誰がどんな橋をかけ、全員脱落しないで渡しうるだろうか。

枯ちかけて橋の役目は果たせなくても、全員渡り切れるよう祈る気持で、現場に立つだけでも立ちたい。

そのためにも一日も早く「健康」に向かい、そのありがたさを感じ謝できる日が帰ってくるのをねがってやまない。

60・10・15

腹痛もなおり、腹圧も減少、食欲も出て来た。

排便も正常になってあるのに、毎日ベッドに横たわる時間が長いせいか、夜眠られぬ日が続いている。

退屈になるとペンをとって、紙面に向かい、なぜなの日一日を想像している。

西暦二〇〇〇年

に向けての全国会議

十月十四日、婦人問題企画推進本部主催の
みだしの会が、東京・九段会館で開かれた。
主催者あいさつで中曽根首相は「女性の地位

向上のためにこれまでは基礎固め。今後は政
府があらゆる分野に女性が参加できるよう、
一層努力しなければならない。婦人自身の意

識を変えることも必要。婦人関係功労者二十
五人を表彰するが、その中に男性はただ一人
（福武直氏）である。次はもっと大勢男性が表
彰されるように、また、こういう会を開く必
要がないほど地位が向上するように」と。

首相は、来賓あいさつと表彰式の順序を変
えて表彰状を渡すと退席。来賓あいさつの
中で、婦人問題企画推進会議座長の藤田たき
氏は「国連婦人の十年というたび感慨無量
だ。ナイロビ会議で、二千年に向けての戦略
がコンセンサスをもって通過したのは大成
功。これで婦人問題が、国際的な地球をあげ
てのものになった。この大成功の原因は、ア
フリカの女の人たちの情熱、これを支持し成

功させようとしたフィリピンはじめ第三世界
のエネルギーにある。私はメキシコには首席
代表として出席したが、ナイロビを思うと雲
泥の差だ。政府代表、フォーラムでの民間代
表たちの活躍は立派だ。ところが、日本に学
ぼうとしたアフリカの人たちが、まだこんな
差別が日本にはあるのか、と言ったことも反
省すべきである」と。

続いて、日本政府代表の森山真弓、縫田嘩
子、赤松良子の三氏、日本政府代表顧問の山
崎倫子氏が報告。

森山氏は、99%まで合意に達しながら、植
民地主義・帝国主義、アパルトヘイト、シオ
ニズムをめぐる紛糾したが、フィリピンの
マナル代表の「譲り合って何とか合意に達す
る努力をしよう」との声涙ともに下る演説に
大拍手があり、これがきっかけで流れが変わ
った、と。

縫田氏は、二千年に向けての戦略で、各章
に、「障害」という項が入り、何が障害かが
はつきりしたことが、十年の成果と語った。
赤松氏は、第一委員会では日本が条約の批准
を一日も早くやろう、批准したら守ろうと呼
びかけ、多くの賛成を得た、これがよかった、
と。（世界に向けていい顔するだけでなく、

国内でも一日も早く条約の精神を生かそう。
これは編集部のつぶやき）

午後は「世界の婦人たちは……平等・発展
・平和をめざして」の映画とシンポジウム。

家庭科の男女共修をすすめる会
10・19集会

「二〇〇〇年に向けて、私たちの戦略
——新教課審に求める——」

十月十九日、新宿の婦人会館で。会員のN
Gフォーラム参加者の報告の後、フジテレ
ビニュースキャスター有馬真喜子氏の「世界
会議報告」。基本的には、メキシコ、コペ
ンをひきつぐものだが、障害がはつきり見え
てきたこと、対象とする婦人の範囲が広がった
こと、政治問題を避けていない、という三点
が特徴と。たいへんおもしろく有意義だった。
「私たちの戦略」では、教課審発足のいまを
とらえて

①文部大臣あての要請書を採択、大々的な
署名運動を行う

②教課審委員に、手紙と共に私たちの作っ
た各種パンフ、リーフレットを送り、その後
委員を訪問し、共修を訴える、全会員から委
員に、はがきを出すよう会報を通して呼びか

ける

- ③文部省の取り組みについて直接質問する
- ④技術科の教師と話し合う機会を作り、技

家庭科の男女共修に関する

要 請 書

一九八五年七月、日本は「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」の締約国となり、女子に対する差別を撤廃する政策をすべての適当な手段により、かつ、遅滞なく追求することに合意しました。

条約批准に先立ち、家庭科履修のあり方が条約に違反しないようにするため、「家庭科教育に関する検討会議」によって検討が行われ、男女同一の履修の方向が示されました。

この検討結果を受けて家庭科教育について具体的に審議する新しい「教育課程審議会」は、一九八五年九月に発足しましたが、この審議会では、社会の変化への対応、基礎・基本の徹底などが大きな検討課題となっています。

術科と共闘できるようにする、を決めた。

共修運動も、いよいよ実をとるべき段階に入った。Weの読者の皆さんの署名運動へのご

そして今、家庭生活の変貌、子どもたちの生活的自立能力の低下が極めて重要な問題となつています。

右のことを考慮し、家庭生活に関する基本的な知識・技術の内容とする家庭科の男女共修（共学・必修）を早急に実現するため、賛同署名をそえて次のことを要請いたします。

一、中学校、高等学校の家庭科の男女共修を含む新しい教育課程をできるだけ早く決定、実施して下さい。

二、教育課程審議会で審議をすすめるにあたって、次のことを十分考慮して下さい。

1、男女平等の実現を、社会の大きな変化に応ずるものとして、教育課程改訂の基本に示えること。

2、生活に関する教育を、教育のひとつとして位置づけること。

3、女子差別撤廃条約の精神を十分尊重し、教育課程を男女同一とするだけでなく、男女の役割についての定型化された概念の

協力を切望する。お問い合わせ、より強力な運動への提案は、ウイ書房へどうぞ。

撤廃を、伝統的な意識の極めて強い日本で効果的に行う努力をすること。

4、父母、現場教員、婦人団体、民間教育団体の意見を十分尊重すること。

三、現行の教育課程の枠内でも、次のことを実現して下さい。

1、中学校「技術・家庭」の学習領域指定の男女差をすぐになくして「技術」も「家庭」も、男女ひとしく必ず学習するようにすること。

2、高等学校「家庭一般」の男子の履修を積極的にすすめること。

3、男女共修をすすめるために、現場教員の研修、教育条件の整備を行うこと。

4、男女平等教育について積極的に指導を行うこと。

家庭科の男女共修をすすめる会

〒151 東京都渋谷区代々木二ノ

二一ノ一一 婦選会館内

文部大臣殿



◆さつまいもに着色料が使われているのを知った時、とても驚いた。魚にしても野菜にしても、「見分け方」なるものが新聞に載るが、あれがなかなか曲者。工業製品とは違い、色も形もバラバラであって当然であるものが、見栄えが悪くというだけで、出荷出来ないとなれば、「良質」とされるものに近づけようと着色料が使われる。生産者と消費者の間があまりにも開きすぎている。中国の文化大革命時代に若者たちが下放された。今その弊害が出ているらしいが、考え方としては間違っていないと私は思える。

不快害虫なるものがほとんどいない、クリーンな都会に居て批判出来るほど、農家の仕事は楽ではない。少しでも楽に、少しでも高

収入をと望んだ結果、化学肥料と農薬浸けの土は今ひどい状態にある。各地で有機農法が試みられている一方、土なし栽培が進んでいる。そのうち、この野菜は本物の土で栽培されましたと、貴重品のように売られる時が来るのだろうか。
(東京・成田淑子)

◆夏のフォーラムから二か月たちました。この間私はずい分と考え続けておりました。

フォーラムの内容そのものは、もりだくさんなことで、百人を越す参加人数という制約もあって、いく分不完全燃焼の思いが残りました。しかし、Weが目指す方向は明確であつたし、集まった人たちの熱気と志の高さと、実践している方々の自信に満ちた姿と堂々さに圧倒されました。

私はどのようにやっていくのだろう。過去をふり返り、この十年間をふり返り、自分のしたこと、しなかったこと、今後なにをどのようににできそうで、どうしていできそうもないことはどんなことか、などと考え続けておりました。

それで、一つだけはっきりしたことは、評論家にはなりたくないということでした。たとえば、出席簿の氏名の順番は男女混合「アイウエオ」順ではなぜいけないかと真剣に戦うことのしんどさや、自分の実験や試みを発表する人たちに、意見や評論を言ったり書いたりする自分は嫌だ、ということがはつきりました。フォーラムでは、ほんとうに、みごとに、実践・実行・発言する人たちがたくさんでした。

私は昔、数年間をかけて大きな（私にとって）戦いをして、二十八歳で大学勉強を始め、三十二歳で卒業し、やっと手にした「幼稚園教諭」の職を四年半で棒にふるま

した。その後、現在の学校に自分を売りこみ、ひろってもらって十二年たったところです。

たとえば私は「君が代」がきらいです。自分が歌わないのはなんとかできて、職場でそれをやめさせようとしたら、これはまた、職をなげうつ覚悟がいるのではないか、と思います。そこで、自分のできることでできないことがある、などと逃げ腰になりながら、あれやこれやと考えているうちに二か月もたつてしまいました。

フォーラムで、であった人たちは、私にとって実に刺激的で、また私自身に対しての問いかけの場となりました。

(盛岡・村上裕子)

◆横浜北の読者会は、植垣先生と佐野さんと私の三人だけ残して、他のメンバーの方たちが、ここ六か月ぐらいの間に引越してしまつたところへ、佐野さんのおつれあいの病氣入院が重なって、一時休んでいる状態です。佐野さんの都

合がよくいったら、また三人から始めたいと思っています。

私は生活クラブの組合員で、港北支部で支部委員を引受けて、いろいろな活動を日夜悩みつづけています。共同購入をしながら、毎旦生活の中のさまざまな問題や疑問などを皆で話し合い、考え、その中から生き方をさぐってきたいのです。

反核平和について、資源・ゴミについて、水のことについて、教育のことについてなどなど、何かにこだわりをもった人たちが、集まっていゐるゐる考える会ができています。

学校給食を考える会もその一つです。現在、自分の子供が小学校に通っている、またはもうすぐ小学校に入るといゝ若いお母さんが多いのですが、今の学校給食について、いろいろな意味から考えてみて、これだいいのかしら？と疑問をもっているのです。給食室の現場で働いていらっしやる調理

士さんや栄養士さんの立場から、お話を聞いたりして、学校給食の現場は、決して子供たちのためのものではないことを知りまゐた。そこで、私たちは何をしていくのか、まだ暗中模索です。

一日三回のうちのたつた一回位というのではなくて、三回のうちと大事な一回の食事だから、もっと大切に考えて、子供たちの学校給食をどうすればいいのか、考え直したいのです。そのためには、「食べること」って、いったい何なんだろう、ということから、もう一度掘り起こしてみんなで話し合ってみようと思います。食べること即ち生き方なんだと、私自身は思っているのですが……。

(横浜・小川裕子)

◆教師とは何か、家庭科教師は何をすればいいか。教職十七年目にして、まだまだもやもやと考えが定まらない状態です。最近ようやく、自分の感じたこと、自分がひつかかっていることを、とことん

自分で問いつめ、形にしていゝこうにも、ついつい忙しさにかまけとだと気がつきはじめました。フていしました。

さらに、卒業式の受付が女子、その他行事の接待は女生徒ということに反対すると、後になって他の職員会議の議題提出が女子教員であつたというだけで反発を買ったりする現実、教育への意欲も失っていました。

また、母と共にくらしているのをいいことに、家事は母に任せて全ての時間を学校のことに使っている自分の生活がいやになつておりました。そうしなければ仕事が終わらないということに。勉強する時間もないほど、生徒指導、クラス経営、その他雑務の多いこと。仕事をこなしているつもりなのに同僚から反発される。まず教科を完璧にこなして、仕事もやつて、

(京都・島川公子)

◆私は、高校で家庭科を教えて五年目になります。男女共学問題は採用試験ではタブーだと大学で言われながら、内心共学にしてやろうなどと考へて採用されました。しかし、部会内では共学の話はなく、やつと三年前頃から、ちらほら聞かれるようになりました。それもやや消極的な賛成が多いように、定年まであと数年なので、努力しても……とか、中学校での失敗や大変さばかりが強調されているように思へました。また私自身、共学や教科に関して勉強しようにも、ついつい忙しさにかまけとだと気がつきはじめました。フていしました。



〈We 武蔵野の会〉

◆九月二十九日(日)、冷い雨の中を六名が参加。We 編集部から中野さんと青木さんが加わりました。夏増刊号と七、八・九月号の読後感を持ち寄るところから話し合いがスタートしました。

金城さんの「人間の解放と法律」を読んで男と女のやさしい関係を断ち切った歴史的背景を知ったのが、背景を知らないままそれに慣らされてきた世代として大いに勉強になったという年長者の発言をきっかけに、各自のかかえている現実が出されました。

夫婦の関係は人の顔と同じ位、様々です。この読者会に出るのに①家事はすべてやり、夕食の準備までしてから夫に子どものことを頼んできた人②特に何もなかった人——がありました。あなたはどちらら派ですか？

「天国への架け橋を渡そう」が合言葉になっているご夫婦。夫の単身赴任でほっとしている妻と、妻のありがたみを知った夫。夫の転勤により根っこをもぎとられた妻の悲慘etc。その中で、地域にも仕事にも関わりつつ、自分を育てていく生き方もあるのじゃないかと考えさせられました。

最後に、夏のフォーラム参加者たちから、いかにも楽しそうでエネルギーシユな報告がありました。私も来年は子連れで行こうと決意。

次回は十二月一日(日)午後一時。御殿山コミユニティセンター。近々発足するWe 田無の会の日程は、決まり次第お知らせします。

〈岩崎久美子〉 〈We 愛知の会〉

◆九月二十一日、若々しい、愛知教育大学助教授野田満智子さんに無理をいつてきていただき、日頃研究してみえることの一端をうかがうことができました。その中で女教員会の設立と家事科教育研究の開始のお話は特に興味深いものでした。

「小学校の家事科が一九一一(明治四四)年理科の一部に導入され(理科家事とよばれる)、一九一九(大正八)年独立教科となっ

た」。この話にまずびっくり。「家事・裁縫科」と言われているので、家事科がこんなにおそい発足とは知りませんでした。一九一一年に理科の中に家事の対応という項目がもうけられ、女子だけに一時間増えたのです。この一時間をどういう授業をしていったらいいのか九年間いろいろ模索した末に、家事科という独立教科ができたそうです。内容は調理が中心で、洗濯、掃除、什器の手入れなどです。

ちょうどこの頃、女教員会が創設され、理科家事および家事科で何をどのように教えたらいのかの研究が主要な研究題目の一つになっていたのです。では、この女教員会とは何なのか、つくられた理由はなんなのか、どんな会のふんいきなのか…等々を学びました。

〈We の読者会カレンダー〉

12・1 湘南・三浦 藤沢市民会館 二時～

◆We の会の集い◆

・日時 12月14日(土) pm 2時半～5時半

・所 婦選会館 (E03-370-0238 国電新宿駅下車8分)

・来年の公開ゼミナール、夏季フォーラムなどについて話し合う。引き続き近くの北京飯店で望年会を。問い合わせはウイ書房へ



情 報 の 頁

◆日本大会◆ 「国連婦人の十年日本大会—
平等・発展・平和、二〇〇〇年にむけての
行動」

・日時 11月22日(金)am10時半～3時

・所 東京・日比谷公会堂

・内容 午前・開会あいさつ、来賓あいさつ
(婦人問題企画推進本部長、国連婦人の十
年推進議連代表、推進会議座長藤田たき氏)
基調報告、構成劇(10年の足跡)

午後(12時40分) 問題領域別報告、決議、

宣言、合唱、閉会あいさつ、デモ行進

・入場は無料、当日参加は自由

・主催 国際婦人年日本大会の決議を実現す
るための連絡会(〒151渋谷区代々木2-21
-11 婦選会館内) ☎03-370-0236)

◆講演会◆ 「Feminismの最前線」

・日時 11月23日(土)pm1時半～

・所 京都市社会教育総合センター4F大ホ
ール(☎075-802-3141)

・講師 上野千鶴子(平安女子短期大助教授)
・参加費 一般千円 会員六百円
・主催 ウイメンズブック友の会 共催 日
本女性学研究会フェミニスト企画集団
・連絡先 松香堂 〒602京都市上京区下立売
通西洞院西入 ☎075-441-6905

◆講演会◆ 女子教育研究所設立20周年記念
公開講演・シンポジウム

・日時 11月30日(土)pm1時半～4時半

・講演 「21世紀への展望と今後の教育」永井
道雄(国連大学特別顧問)

・シンポジウム「21世紀への展望と女子の高
等教育」縫田暉子(日本放送協会解説委員)
村井実(慶応大学教授)、青木生子(日本女
子大学学長)……三人とも教課審委員です
司会・一番ヶ瀬康子(日本女子大学教授)
・所 日本女子大学成瀬記念講堂(国電目白
駅下車、川村学園前よりスクールバス5分)
・主催 日本女子大学女子教育研究所
(☎03-943-3131)

◆つどい◆ 女から女へ贈る熱きメッセージ
第一回婦人のつどい

狛江市婦人問題を考える会

・日時 12月8日(日)pm1時半～
・所 狛江市福祉会館(小田急線狛江駅下車
バス、第一小前へ会館前)
・内容 講演・紀平梯子、うた・吉岡しげ美
入場整理券 前売千円 当日千二百円
・連絡先 昼・大内 ☎03-480-2483 夜(7
時～)・広瀬 ☎03-480-9169 遠水 ☎03-
480-8022

◆目録◆ 環境教育用教材目録(映画・ビデ
オ・スライド)'84年度 (財)日本環境協会

・'79年から'84年までの間に製作された環境保
全に関する映画、ビデオテープ及びスライ
ドで、'84年度末現在、各省庁・都道府県・
政令都市及び政府所管公益法人が保有して
いるものを掲載している。簡単な内容や申
込先、貸出方法なども

・連絡先 環境庁長官官房総務課 〒100千代
田区霞ヶ関1-2-2 ☎03-581-3351

◆傍聴にいらっしやいませんか

「女性による民間教育審議会」公開審議会
テーマ「親がつけてほしい学力とは何か」
12月3日(火)pm6時～8時半・所 新宿区婦
人情報センター(都営地下鉄新宿線曙橋下
車5分)・問合せ先 ☎03-268-7968

■北海道 パート労働者で組合結成（タイムス9/4）

札幌市に、東京、仙台でわずかに例のあるパート労組「札幌・パートユニオン」が誕生した。パート八年の経験をもつ根津芳子さんを会長に札幌勤労者相談センター（中央区南二西六、栄ビル）内に事務所を置く。手始めに「パート一〇番」を開設、電話で相談に応じる。正社員と区別され、悪条件に悩むパート労働者が集まって、相互に助けあう共済制度をつくる一方、最低賃金の順守、一方的な解雇の反対、有給休暇、年金、健保問題等、労働条件の改善に取り組んでいく。

（広瀬直子）

□「日の丸」「君が代」強制するな（読売9/10、毎日9/28）

道教委は文部省が先に通知した「日の丸掲揚、君が代斉唱」の徹底を学校レベルにおろす措置で、植村道教育長は「強制するものでない」との見解を明らかにしたが、学校現場に日の丸、君が代が持ち込まれることに強く反対する北教組は、「予想される混乱を無視した暴挙」と反発を強めており新たな火種となりそう。

（広瀬直子）

■新潟 第一回「にいがた女性大会」に七

百人参加（新潟日報9/28）

婦人の十年最終年を記念して開催された同会は、市内四〇以上の婦人団体が協力して実現にこぎつけた。小木ミサヲ実行委員長は「新潟女性年」の幕開けを告げるもので、今日がその「元旦」と力強い宣言。また若杉市長も「市としても今後、婦人問題に力を入れる」と約束。「生活のなかの男女不平等をみつめてとり除く努力をしよう」「仕事と家庭を両立調和できるための働く条件づくりを」「地域を中心とした女性の連携の場づくり」等七項目の大会決議を採択した。

（山口久子）

■千葉 「買春」市議に辞職要求（朝日9/25）

都内で摘発された中学生売春の客の中に、四街道市議がいた問題で、同市議に辞職勧告するよう求めている市民団体にに対し、井岡四郎市議長は「辞職勧告の議会への提出は適当でない。辞職は、本人の良識によるべきだ」と回答。これに対し、「売春問題ととりくむ会」では、問題の市議を除く二九市議に対し、「問題の市議はどうあるべきだと思うか」などの質問を設けたアンケートを郵送するなど、抗議運動をつづけていく。（高橋喜久江）

（毎日9/21）

□自閉症児者親の会結成（毎日9/21）

市原市に住む自閉症児者を持つ親たちが手を取り合って協力していこうと親の会「ぞうの会」（鈴木恵子代表）を結成、五十人を超す母親が参加、理解と協力を訴えていく。同会事務局の佐藤淑子さんは「母親は一日中振り回されてヘトヘト、私の経験から言っても、自閉症児者は隔離されるより、地域社会との結びつきの中で、発達の障害を取り除いて成長を促す方が治療に役立ちます。この会は親だけでなく一般の方や団体も加入できる賛助会員制度を設け、みなさんの理解や協力をお願いしたいと思います」と訴える。（木田直子）

■東京 指紋押捺拒否のビデオ上映を出席

（朝日10/11）

指紋押捺問題を地域の人たちにも知ってもらいたいと、東久留米市の住民グループがドキュメント映画「指紋押捺拒否」のビデオ上映の出前を始めた。たとえ一人でも、ビデオと器材を持って駆けつける仕組み。上映実行委員会のメンバーの田島義夫さんは、小金井市で試写会を見たのがきっかけ。「泣く泣く指紋押捺に応じた神奈川県の女子高生の悔しい思いがよく出ていて、感動的。歴史的な側面もよくわかる」と、大勢の人たちに見てもらう方法を考えた。しかし、今のところ見てくれたのは三十人余。「指紋押捺問題をまだ他人

事」と思っている人が多く「あせらずに五年、十年後を考えじっくり上映運動を続け、押捺をさせている我々の社会についても考えてもらいたい」と語る。(姫野順子)

■石川 性非行で中学女子教員が討議 (北国 9/30)

いじめ問題と並び、深刻化している性非行をテーマに、県教委の女子教員生徒指導推進会議には、県内の中学校女子教員約百人が出席して、性非行の防止策や性教育のあり方などについて討議を交わした。全体会では、生徒の内面、心情を理解した指導、温かく、冷静な対応、系統だった性教育などの指導方針が確認されたものの、生徒が男女を問わず性に非常な好奇心を持っている中で、「性教育が必要なのはわかるが、どこから手をつけたらよいかわからない」などの率直な悩みも出され、指導の難しさをのぞかせた。(山田千鶴子)

■愛知 名古屋にフリースクール 「野並子どもの村」(毎日 10/4)

子どもたち一人ひとりの個性や能力に応じた教育の場を、自分たちの手でと、「名古屋に自由な学校をつくる会」の有志がフリースクールの建設計画を進めてきたが、

来春まず幼児部を開設する。天白区天白町野並相生二八の三四一、徳林寺内に、その名も「自由な学校・野並子どもの村」。当初は先生二人幼児十五人だけのスタートだが「将来は小学校も」と夢は大きい。(岡本のりこ)

□「学校生活と子どもの人権」シンポ(毎日 9/29)

名古屋弁護士会主催の同シンポには約二百人が参加、花井増実、鈴木次夫両弁護士が独自調査に基づいて、県内の一部の中学、高校で行われている規律づくりの生活や厳しすぎるクラブ活動の実情を紹介。続いて西春日井郡西春日で九月初め、父母らによって設けられた「体罰一〇番」の報告。教師の体罰事件をきっかけにスタートさせた電話相談だが、今も多くの声がよせられているという。

「自分も体罰を加えた経験がある」という公立小の男性教師は「校長や教頭から(児童の指導のことで)注意されると、言うことを聞かせようと殴ってしまう。大半の先生は苦しい立場」と現場報告をした。(岡本のりこ)

■京都 演劇で「古い」問いかけ(朝日 8/25)

綴喜郡田辺町保健課の職員が、同町が今年度から始めた寝たきり老人の訪問指導をきつ

かけに、老人医療にまつわる様々な問題を劇化して、上演。嫁の苦勞、老人の疎外感、夫の無責任……。どれもひと事ではないはず。いつか必ずくる老いに対し、本人や家族がどう対応したらよいか考えてほしかった」と演出担当の金辻美津恵保健婦長。(塚崎美和子)

■大阪 五十歳以上の熟年院生募集(朝日 10/3)

実社会での豊かな経験を、最後に学問で仕上げてみませんか——大阪市立大学経済学部は六一年度から五十歳以上の大学院生を特別枠(五人)で募集する。文部省大学課では「これはひとつの見識だと思うが、ひとつの試みとして見守りたい」としている。

(由良サダコ)
■熊本 小・中学などに国旗交付(熊日 9/25)

文部省の「日の丸」徹底通達が出るなか、菊池郡泗水町議会で、有田町長が町内の十小中学校・幼・保育園に国旗を交付した。文部省の調べでは、県下の日の丸掲揚率は小中高とも一〇〇%と全国でもトップクラス。校長らは、「住民の関心の盛り上がりもあり、いまま

度の徹底を願ったもの」と受け止めている。(宮原由美子)

会館で開かれた。先の調査が報告され、①子どもの自主性と人権を尊重する校則に改める②教師は体罰をやめ、教育委員会は体罰禁止を徹底する③弁護士会は子どもの人権を擁護する相談窓口と救済機関を設ける——など10項目を提言した。(10・16, 19)

◆ 精神病院の密室性を是正—厚生省 ◆

報徳会宇都宮病院事件などで問題になった精神病院入院患者の処遇のあり方について、厚生省は10月19日「通信・面会に関するガイドライン」をまとめた。「外部との通信・面会は原則として、自由に行われるべきだ」という考えに立って、公衆電話を置くなどをうたっている。(10・20)

◆ 「もんじゅ」反対提訴へ ◆

動力炉・核燃料開発事業団(吉田登里事長)が福井県敦賀市白木に建設する高速増殖炉原型炉「もんじゅ」に反対する住民が、動燃事業団を相手に民事訴訟を、国を相手に行政訴訟を起こした。高速増殖炉は新型炉で、その安全性が初めて問われる。原告側は同炉のもつ危険性と非経済性、プルトニウム社会がもたらす問題などを前面に掲げて建設中止に追い込みたいとしている。(9・26)

◆ 国家秘密法反対に500人 ◆

「言論・報道の自由を封殺する国家秘密法(スパイ防止法)に反対しよう」と学者や芸術家が次々と壇上に上がり、さまざまな表現方法で同法の危険性を訴え、論陣を張る「ふたたび暗黒の時代を復活させるな!」

9・28トークマラソン」が、9月28日渋谷の山手教会で開かれた。総評、中立労連、全国マスコミ文化共闘の労働団体主催。(9・29)

◆ 平和運動再生へ熱気 ◆

「(防衛費の国民総生産比)1%問題と軍縮を考える」シンポジウムは、平和運動をねがう学者、文化人と超党派ハト派政治家による初めての共同行動となって、10月19日、東京自治労会館で開かれ、熱心な論議が続けられた。(10・20)

◆ 「女は世界をどう変えるか」 ◆

国際シンポジウム「女は世界をどう変えるか」(主催・朝日新聞社、朝日イブニングニュース社)が、10月23日から3日間開かれた。世界5カ国から学者、作家、女性解放活動家ら8人(うち男性3人)が参加して、女の変革と社会の変化とのかかわりなどを討議した。

23日「女性の地位」「差別の構造」

24日「女性原理と男性原理」「家庭と子供」

25日「21世紀への戦略」(10・23~25)

◆ 西暦2000年に向けて ◆

「西暦2000年に向けて平等・発展・平和の一層の推進のために」と題する全国会議が婦人問題企画本部主催で10月14日九段会館で開かれた。首相は婦人の地位向上に功績のあった25人を「婦人関係功労者」として表彰した。午後のシンポジウムでは、男女2人ずつの講師が発言。全国から約1200人の女性が集まった。緒方貞子・上智大教授は「既成の社会に自分を合わせるのではなく、望ましい社会をつくるために女性がもっとエネルギーを注ぎたい」と。

(10・14, 16)

◆ TV界「やらせ」の周辺 ◆

少年非行をテーマに、テレビ朝日が放映した番組をめぐる、少女2人を含む3人が暴力行為の疑いで逮捕された。また番組担当ディレクターが、この暴行為教唆で逮捕されたため、TV界における「やらせ」や「行き過ぎ」に論議が高まった。

テレビ朝日は10月14日、おわびのための特別番組で数人の評論家による討論会を放映したが、その中で番組直後から批判や苦情の声があったこと、局内のチェック機能が果たされていなかったことを認めた。

日本民間放送連盟は去年5月、自主的に放送倫理小委員会を設け①青少年への配慮②人権・プライバシーへの配慮③要注意広告業種への対応——という三つ柱をテーマに検討を進めてきた。また「やらせ」や「行き過ぎ」がこのまままかりとおれば、言論表現への規制の動きが強まることも警戒している。(10・9~18)



◆ 適格審・研修制を推進—臨教審 ◆

臨教審第3部会は10月7日、「基本答申」の柱となる教員の資質向上策について部会案をまとめた。新任教員に1年間、指導教員をつけるなどして適格性を判定する「初任者長期研修制度」、暴力をふるったりする問題教師の排除を狙った「教職適格審査会制度」などのほか、新たに学校現場の活性化をめざし社会人を積極的に教壇に登用するため期限付きの「特別免許」制度を作る。
(朝日—以下同じ—10・8)

◆ 適格審・研修制を批判—日教組 ◆

日教組の田中委員長は、臨教審で進められている「資質向上」策の論議について、「現場の教職員の実態を直視し、どうしたらよりよい教育実践ができるか探るべきだ。『適格審』『研修制』は教育実践を固定的にとらえ、教師としての使命感は養い得ない」と反対姿勢を明確にした。
(10・7)

◆ 共通テスト64年春から ◆

政府の教育改革推進閣僚会議が10月8日開かれ、松永文相は共通一次試験に代わる大学入試共通テストの実施時期について、64年度実施を目標とすることを明らかにした。
(10・8)

◆ 国大入試改革 ◆

国立大学協会の入試改善特別委が10月17日、国立大入試の「二期制」を決めた。62年春から実施される見通しのこの制度が、53年まで続いた旧一、二期校制度と大きく違っているのは、グループ分けが固定していないこと。新制度では、大学・学部自主判断にまかせる。文相は「国立95大学のうち3分の1校は後半グループに」と。

また、旧制度は、一期校の合格発表後二期校の試験があったので「二期校コンプレックス」を招く傾向を生んだ。新制度では

3月上旬に連続して試験をする。(10・18)

◆ 首相靖国神社例大祭公式参拝見送り ◆

藤波官房長官は10月8日、靖国神社秋季例大祭公式参拝を見送りたいとの中曽根首相の意向を伝えた。理由は①国会の代表質問中である②北京大学生のデモ以来中国の反発をおおる恐れがある③例大祭は靖国神社の宗教行事であるなど。安倍外相は10日、第1回日中外相定期協議のため北京入りし、呉学謙外相と会談した。呉外相は首相の靖国公式参拝について「9月18日の北京でのデモの背景にある中国人民の気持ちに留意し、理解してほしい」と述べ、日本が軍事大国化しないようクギを刺した。

(10・9, 11)

◆ 日の丸と君が代促進求む沖縄県議会 ◆

国旗掲揚、国歌斉唱を指導する文部省通達をきっかけに、日の丸・君が代問題をめぐる賛否が渦巻くなか、10月11日開かれた定例沖縄県議会総務企画委員会は、日の丸掲揚と君が代斉唱の促進を求める決議案を可決した。沖縄県では、20万人余が死亡した40年前の地上戦の体験から、日の丸・君が代に対する抵抗感が根強く、文部省調査の日の丸掲揚・君が代斉唱の状況は、日の丸が小・中・高でそれぞれ 6.9、6.6、0%、君が代はいずれも 0%だった。

(9・6, 10・11)

◆ “校則ずくめ” 日弁連調査・シンポ ◆

日本弁護士連合会は10月15日、「学校生活と子どもの人権」と題する調査報告書をまとめた。全国の公立中学・高校では、生徒の服装や所持品をはじめ、校外の日常生活に至るまで校則が設けられ、違反した生徒に教師が体罰を加えるなど生徒管理の実態が浮き彫りになった。

また、同会の人権擁護大会シンポが18日、千人を超える参加者を集めて、秋田市文化



《表紙のことば—加藤由美子》

先頃小学校の運動会があった。回りを狭い私道に至るまで舗装された道路に囲まれた運動場。「ネェ、(とっておきの土なんだもん) 気持ちいいよ。裸足で走ったらあ。」と娘に言ったら、「みんなズックだもん。やだよ!!」

★Weバックナンバーのご案内★

- 〈vol.1〉 1月号 男と女の新しいかわりを
 〈vol.2〉 4月号 教師は、今こそ声を
 6月号 はたらくことをめぐって
 7月号 コミュニケーション
 8・9月号 老いを考える
 10月号 今、教科書問題を問う
 11月号 食べるということ
 12月号 着るということ
 83年増 学校はよみがえり得るか
 1月号 「1984年」
 2・3月号 住むということ
 〈vol.3〉 4月号 PTAって何
 いまこそ、家庭科を問う
 6月号 地域に生きる
 7月号 少年・少女たち
 8・9月号 “遊ぶ”ということ
 10月号 支え合いつつ ひり立つ
 11月号 “病む”ということ
 12月号 つきあいを考える
 84年増 自分らしさをこそ
 1月号 学び・教えるとは
 2・3月号 “育てる”ということ
 〈vol.4〉 4月号 性をどう語る
 5月号 結婚の風景
 6月号 家族、その人間関係
 7月号 離婚と子どもたち
 8・9月号 法律と私たち
 85年夏増 働き続けるために
 10月号 いま、熱く女の時代
 11月号 みよりの秋に

つてきました。

(青木)

◆「現代・人間の危機」と題する法政大学の公開講座に参加した。とりあげられている核戦争・沖縄の平和思想・教育改革などに私も危機を感じていたから。非核三原則がたとえ守られても日本は五千発の核に囲まれている。「日本人は市民革命をやっていないから未だに町民。町民とはその日暮らしができればいいと思っている人。政治・社会に目を向けていこう」と。

(中野)

◆購読の継続を(馬場)

化を探索」です。

(平田)

◆十月八日、都高教の「指紋捺捺強制糾弾」集会で、在日大韓キリスト教川崎教会牧師李仁夏さんの話を聞いた。なんと、'47年五月二日、憲法施行の前日、最後の勅令として「外国人登録令」が公布、即日施行された、と。日本人として李さんを直視できなかった。「悲劇の現代史をきちつと語って下さい」という訴えに、先生から一言も発言がなかったのが残念だった。

♥女性史の上に刻印されるであろう'85年、その最後の号。私にとって、Weにとつての恩人、尾藤操先生突然のご逝去。ご遺稿を掲載し感無量です。先生はまことに行動の人でした。私自身は、批判だけ達者なのではないかと恥じます。

♥各種の運動が壁にぶつかっています。地表は新しい皮膜で被われつつあるものの、それと地殻との関係は？ 五年目の企画を練りつつ考えています。♥次号は「くらしの文化を探索」です。

新しい家庭科—

Vol. 4 No. 9 1985年11月20日発行
 ¥530(年間購読料・増刊号含¥6700)
 編集兼発行人／半田たつ子

発行所／(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
 ☎03(326)1380 振替 東京6-59867
 印刷所／(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

旭川	富貴堂	三省堂本店、書泉グラン	竹中書店、中日書房、きた	舞鶴	舞鶴堂	
	京栄堂書店	デ、東京堂、八重洲ブック	やま書店、丸山書店	和歌山	宇治書店	
札幌	北東京堂書店	センター<豊島>池袋書店	江崎	青雲堂	紀勢堂書店	
小樽	矢野書店	紀文堂書店<杉並>木風舎、	豊橋	文教書店	住岡書店ジャスコ	
小樽	熊谷書店	新愛書店、ブラサード書	豊田	耕文堂	多屋孫書店	
伊豆	新生堂	店、たつみ書房、みどり書	岡崎	鈴彦書店	流泉書房、ヒカリ書	
函館	神田書店	房<新宿>紀伊國屋書店、	岡崎	カマクラ文庫	店、日進堂、明文館、文進堂	
青森	成田本店	模索舎、ブックスミヤ、	尾張	活人堂	書店、アイヨ書店、幾久書店	
八戸	伊吉書院	伊野屋書店、ジョキ<渋谷>	愛知	三浦書店	西宮	イカロス書房
盛岡	東山堂、みみずく	すべすべ、えいがか、<葛	刈谷	日進書房	姫路	塚新西武B.C
	書房、信栄書店	飾>宏精堂、中野書店<世	刈谷	酒井日進堂	明石	宣文堂書房
花巻	誠山房	田谷>やまべ書店<山崎>	新小	葉山書店、万松堂	豊岡	姫路丸善
水沢	松田書店	店、ひまわり書店<練馬>	長津	島書店	岡崎	浅野八代書店
仙台	こどもの本の店	平形書房<台東>愛京堂、<板	津	英進堂	岡山	学友書房
	ブーの家、八重洲書房、	橋>裕弘堂<江東>吉田書	岡崎	英進堂	岡山	ひさや書店
	ボラン、萩書房、高山書	籍部<品川>エグツ図書、雄	阪上	春陽館	山子	弘栄堂
	店、金港堂、千忠書店	文堂<吉祥寺>エグツ書店、	三宮	福野書店	米出	今井MC本店
古川	高山書店	<三鷹>第九書房、<八王子>	高岡	鈴木長崎屋店	松江	武田書店
秋田	ホビット館	の村<調布>みづき書房、	松本	清明堂書店	江島	大学前園山書店
酒田	加賀屋書店	神代書店<小金井>みや	三宮	友信堂	広島	やまびこ書店、
山形	八文字屋	書店<府中>国府書店会	高岡	清文堂、イソッ		いづみ書店、アサヒ書店、
	高陽堂書店	<国分寺>青野書店<国立>	岡谷	ア星、文苑堂	竹原	紀伊國屋書店
尾花	鈴木書店	増田書店富士見台店<立	松本	笠原書店	福山	草間書店
鶴岡	阿部久書店	川>石川書店、オリオン書	飯坂	新光堂書店	山口	岡田書店
福島	岩瀬書店	房、泰明堂<小平>和中書店	上野	牧野書店	観音寺	西京書店
	西沢書店	<清瀬>マルオカ書店、飯田	田中	平安堂	高松	タカハシ書店
郡山	松文堂	書店<町田>久美堂<福生>	金沢	英文堂		松岡書店
会津	ニシザワ	向陽館	野沢	金井書店	徳島	みやたけ書店
保原	木村書店	横浜 文教堂、有隣堂、	ルセンター、北国書林	福井	うつのみやセー	雄徳堂徳野書店
藤岡	川島朝日堂	栄松堂、ともだち書店	福井	ひまわり書店、	土佐山田	ブックスエミール
前橋	アルプス社	川崎 北野書店、早川	教奈	じっぷじっぷ、吉川隆文	北九州	依光書店
中之	島村書店	書店、大塚書店	松阪	堂、品川書店、勝木書店	福岡	北九州書店、白石書店、
中田	至誠堂書店	相模原 中村書房	大阪	海光堂		黒崎ひとりわBC
水戸	ツルヤB.C	鎌倉 たらは書房	大	海老山書店	二日市	金文堂、横文館、金
結城	太陽堂	大船書房	紀伊國屋書店、ユーゴー	中村書店	久留米	進堂
浦川	岩瀬書店、須原屋	相模書房	書店、樋口書籍、米原十六	旭屋書店本店、	直方	丸山スコレ店
	新井書店	藤沢 東松堂	堂、藤川書店、学の友、西坂	書店、呼文堂、り、富士原文	大牟田	江頭書店
越谷	ブックスサトウ	厚木 内田屋書房	書店、呼文堂、り、富士原文	信堂、飯田集英館、川口文	筑後	菊竹金文堂
東松	日野屋書店	綾瀬 藤美堂	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店	方	みやはら書店
和光	比企文化社	栗野 みどり書店	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店	牟田	金善堂
狭山	山屋	榎本書店	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店	後	吉田書店
蓮田	楓書房	茅ヶ崎 文泉堂	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店	津	まつら書店
大飯	マスタ書店	小田原 伊勢治書店	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店	賀	金華堂
新船	阿里書房	甲府 平井書店	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店	佐	好文堂、童話館
橋本	めいわどう	静岡 太洋堂	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店	世	紅屋書店、金明堂
武B.C.	みやかわ南口店	見書店、森上書店、宮崎書店	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店	保	高校生協、三章文庫
津田	前原かつば、西	磐田 あつみ書店	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店	本	松山書店
鎌ケ	はつらつ書房	松北 谷島屋書店	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店	崎	池田書店
佐原	元山書店	沼津 マルサン書店	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店	延	開書堂、今村書店
浦安	大和屋書店	宮 文正堂書店	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店	大	スズキ書店
東葛	岡田書店	名古 資然堂書店	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店	志	加世田書店
原町	多田屋	ウニタ書店、	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店	鹿	大学生協
大東	原勝書店	ボランの広場、日比野泰	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店		帯広畜産大学、東北大学、岩
	ブックスさかい	文堂、谷口正文館書店、	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店		手大学、福島大学、新潟大学、
	<千代田> ビビ、	白樺書房西店、白楊書店、	信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店		群馬大学、宇都宮大学、茨城
	日成堂、書肆アクセス、		信堂、飯田集英館、川口文	室堂、坂口書店、北村書店		大学、埼玉大学、芝浦工大、

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入ができます。

お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由でご指定のうえ、ご注文下さい。